

斜里町のオホーツク文化遺跡について

大井 晴 男

〒060 札幌市北区北10条西7丁目 北海道大学文学部附属北方文化研究施設

1

斜里町管内・知床半島の北西岸には、少なからぬいわゆるオホーツク文化にかかる遺跡¹が知ら

1) オホーツク文化ないしこれに関係すると思われるグループは、地域的にもかなりの拡がりを持ち、時間的にもかなりの幅をもっていたものと考えられている。そのうちのどこまでを指してオホーツク文化と呼ぶかは、研究者の間でも必ずしも充分な意見の一致をみているわけではない。斜里町管内の関係する遺跡について考えようとする場合、こうした問題に関して、直接関わってくるのは、従来「(オホーツク式土器と擦文式土器との)接触様式」「融合型式」あるいは「トビニタイ土器群」など呼びならわされてきた土器群によって示されるグループ、あるいは藤本強氏のタームを借りていえば『トビニタイ文化』にかかる遺跡を、どう取扱うかという問題である。斜里町内には、ウトロ滝ノ上遺跡・ピラガ丘遺跡第Ⅰ～Ⅲ地点・須藤遺跡等、発掘調査がおこなわれ、その報告が公刊されているこのグループにかかる遺跡があり、さらに分布調査の結果から、それと考えられる遺跡もまた知られているからである。筆者は、現在、こうしたグループについても、オホーツク文化という枠の中で捉えてよいのではないかと考えているが、それが大きな文化変容を遂げ、以下小論で問題とする遺跡群のあり方・地域的集団の構造に関して、大きな変化をもっていたこともまた疑いを容れないところであろう。しかも、そうした問題に関して、われわれがこのグループについて、なお詳細な議論を展開するにたるだけの資料・データをもちえているとは、遺憾ながらともいえないようである。したがって、小論では、便宜的に、このグループにかかる遺跡については議論の対象とはしないこととしたい。他日、あらためてそれらについて論ずる機会があらうと考えている。

藤本強「トビニタイ文化の遺跡立地」『北海道考古学』第15輯、1979。

駒井和愛編「オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡 下」東京大学文学部、1964。

米村哲英「ピラガ丘遺跡」斜里町教育委員会、1970。

米村哲英他「ピラガ丘遺跡——第Ⅱ地点発掘調査概報」斜里町教育委員会、1972。

れている(第1図)。

斜里町内のこうした遺跡が周知されるようになったのは、1955年に刊行された『斜里町史』のうち河野広道氏による「斜里町史先史時代史」²が公表されて以来のことである。氏は、1948・1949・1951年の3年にわたって斜里町管内の遺跡の調査を実施され³、その結果にもとづいて上記の文章を執筆されたようである。この文章中で河野氏は『斜里町内遺跡所在地』として40箇所⁴をあげておられるが、そのうちの9地点についてオホーツク式土器が出土することを記載しておられる⁵。河野氏は、東京大学大学院生(当時)佐藤達夫氏および斜里町郷土研究会の諸氏の協力をえて、これらのうちの『6 ウトロ市街地』⁶『10 ウト

金盛典夫「ピラガ丘遺跡——第Ⅲ地点発掘調査報告」斜里町教育委員会、1976。

金盛典夫・村田良介・松田美砂子「斜里町文化財調査報告Ⅰ——須藤遺跡・内藤遺跡発掘調査報告書——」斜里町教育委員会、1981。

2) 河野広道「先史時代史」斜里町史編纂委員会編『斜里町史』斜里町役場、所収、1955。

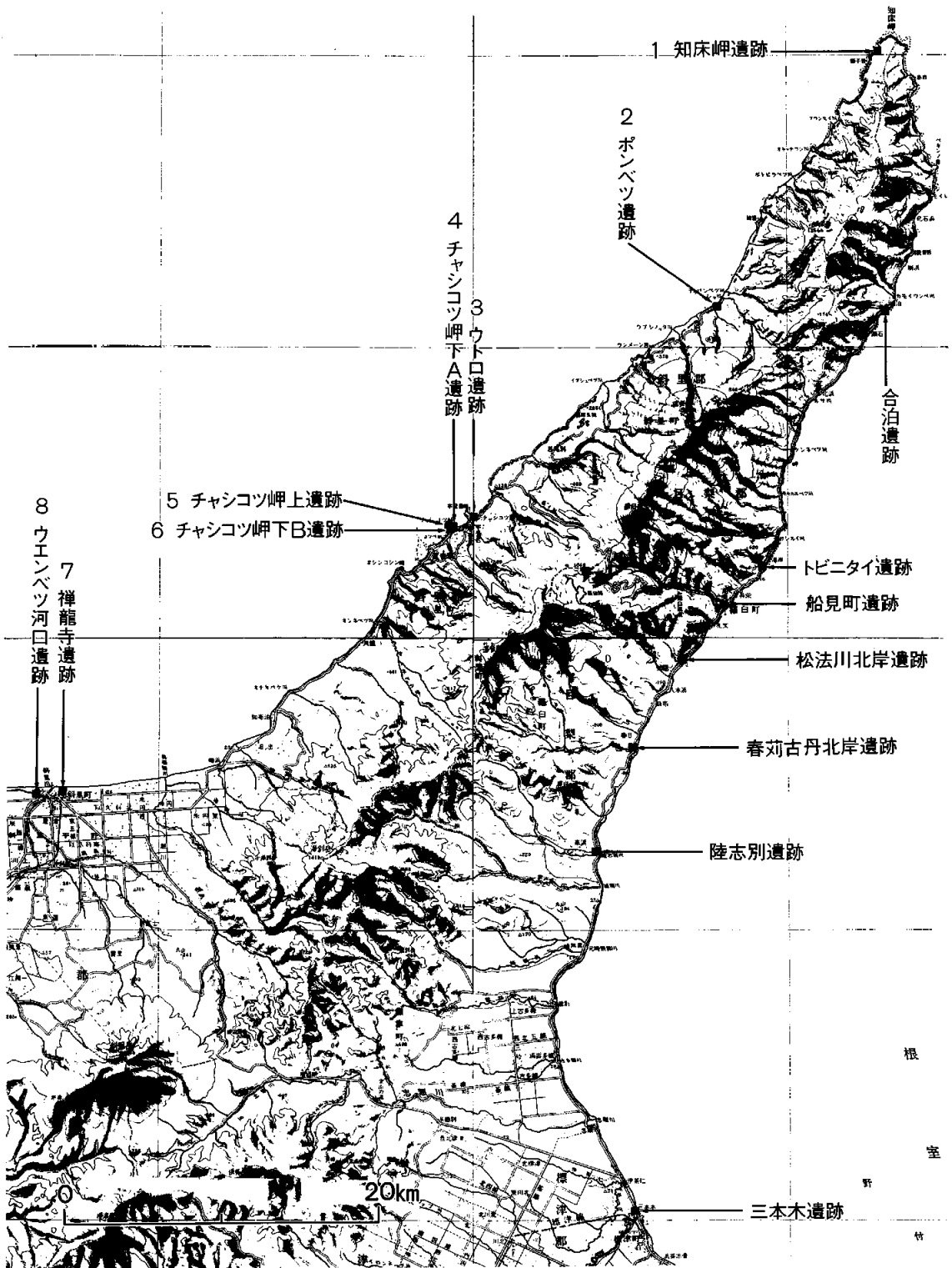
3) 下記の文献の記載による。

宇田川洋編『河野広道ノート〈考古編1〉——北海道東北部の考古学的調査——』北海道出版企画センター、1981。

4) 前註2文献では、その『第7節 斜里町内遺跡所在地』の項の冒頭に「所在地の確認されたものだけでも39ヶ所に達する」と書かれているが、以下の記載では「1 知床岬東端附近」から「40 来運岩井重利所有畑地」まで、計40箇所について記載がある。これが単純な誤りなのか、いずれかの理由があるのか、明らかでない。

5) これらの9地点の中には、後にも述べるように、現在すでに確認できなくなっている地点もあり、またピラガ丘遺跡のように、前註1にいう『トビニタイ文化』にかかる遺跡も含まれている。一方、その後に発見・確認されている遺跡もあって、現時点での斜里町内におけるオホーツク文化にかかる遺跡の分布は、河野氏の記載されたところとはやや異なっている。

6) この地点は、前註1引用の駒井氏編文献にいう『ウト



第1図 斜里町管内・知床半島北西岸(および知床半島南東岸)におけるオホーツク文化遺跡の分布

ロチャシコツ岬西側平地』⁷⁾について、発掘調査をおこなわれたようである。しかし、これらの発掘調査については、遂にその報告はおこなわれず、したがって、遺憾ながら、その詳細は明らかではない。

斜里町管内では、その後、1958年から1960年にかけて、東京大学文学部考古学研究室による一連の調査がおこなわれ、オホーツク文化にかかる遺跡としては、1959年に『ウトロ海岸砂丘遺跡』⁸⁾の発掘調査がおこなわれている。筆者も、その一部について、大学院生として参加した。なお、この調査の結果は、1964年に『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡 下』の一部として公刊されている⁹⁾。こえて、1961・1962年の2年度にわたって、松下亘氏他による知床岬遺跡の発掘調査が実施され、1961年度分については同年に概報が、1962年度分については1964年に網走郷土博物館からその報告書が、刊行された¹⁰⁾。さらに、1965年になって、文化財保護委員会・北海道教育委員会の共催による「知床半島特別調査」の一環として、大場利夫氏他の知床遺跡調査班によって、ふたたび知床岬遺跡の発掘調査が実施され、その結果は、1967年に、他の分野の調査結果とあわせて、北海道教育委員会刊行の報告書に掲載されている¹¹⁾。

一方、われわれ北海道大学文学部附属北方文化

ロ海岸砂丘遺跡』とともに、北海道教育庁遺跡台帳にいう『ウトロ遺跡』の一部をなすものと思われる。

7) 本遺跡は、同じく北海道教育庁遺跡台帳にいう『チャシコツ岬下B遺跡』にあたる。なお、筆者は下記の文献等で、本遺跡を『チャシコツ岬下(西)遺跡』と呼んだが、以下、小論では北海道教育庁遺跡台帳の呼称にしたがう。

大井晴男「オホーツク文化の社会組織」『北方文化研究』第12号、1979。

8) 前註6を参照されたい。

9) 前註1引用の駒井氏編文獻。

10) 知床岬遺跡調査隊「知床岬遺跡第一次調査概報」『北海道の文化』創刊号、1961。

松下亘・米村哲英・畠山三郎太・安部三郎「知床岬—知床半島の古代文化をさぐる—」(市立網走郷土博物館報告1)市立網走郷土博物館、1964。

11) 知床遺跡調査班「知床半島の遺跡」『知床半島(特別調査報告)』(北海道文化財シリーズ第9集)北海道教育委員会、1967。

なお、この報文中では、調査地点を『知床岬はさみ岩湾上第一地点』と呼んでいるが、これは北海道教育庁遺跡台帳にいう『知床岬遺跡』の一部である。

研究施設のスタッフも、1966年に施設が開設されて以来、オホーツク文化の研究を主要なプロジェクトとして、道北部を中心に、関係する遺跡のいくつかについて発掘調査をおこなうとともに、あわせて、その他の地域を含む北海道のオホーツク文化関係遺跡について分布調査と資料の蒐集・現状の確認をおこなうことを計画し、鋭意その作業を進めてきたのである。そして、そうした調査の一環として、1970年、われわれは斜里町を訪れ、町内の遺跡の一部を踏査している。

こえて、1976年、斜里町・斜里町教育委員会・斜里町郷土研究会の御好意によって、本町に北海道大学文学部附属北方文化研究施設斜里分室が開設された。以来、われわれ北方文化研究施設のスタッフは、この斜里分室を基地として、斜里町管内および周辺市町村の関係する遺跡について、各種の調査計画を実施しつつある。これらの調査にあたっては、その前身である斜里町立しれとこ資料館当時から、当斜里町立知床博物館の全面的な御協力を戴いている。また、斜里町・斜里町教育委員会・斜里町郷土研究会をはじめ、きわめて多くの町民各位の万般にわたる温かい御支援・御協力をも忘れることができない。こうした御協力・御支援なしには、われわれの調査はその成果をあげることができなかったであろうし、さらに今後の計画の遂行もまた困難であろうと思われる。この誌面をかりて、御協力・御支援を深謝するとともに、今後のさらなる御協力・御支援をお願いする次第である。

さて、小論では、われわれ北方文化研究施設のそれを含めて、これまでの調査・研究の結果にもとづいて、斜里町管内に知られるオホーツク文化にかかる諸遺跡について、そのあり方を検討してみることにしたい。もちろん、これまでのわれわれの調査による資料・データは、先学・同学諸氏によるそれを加えてみても、これらの遺跡について考えるために、けっして充分なものといえないことは明らかであろう。したがって、筆者が、小論でそれらについて明快な・疑問の余地のない結論を導きうると考えているわけでは必ずしもない。むしろ、筆者は、ここにある見とおしを、われわれ自身のそれを含めて、これらの諸遺跡の今後の調査・研究についての指針となりうる(かもしれない)、いずれかの見とおしを提示することができ

ればよしとしなければならないであろうと考えているのである。

2

ここでは、まず斜里町管内のオホーツク文化にかかる諸遺跡について、既往の発掘調査その他によってえられている資料・データに、その後のわれわれの調査によってえられた資料・データを加えて、あらためてそれぞれに記載しておくことにしよう。

ここに記載する遺跡は、知床岬遺跡・ポンベツ遺跡・ウトロ遺跡・チャシコツ岬下A遺跡・チャシコツ岬上遺跡・チャシコツ岬下B遺跡・禪龍寺遺跡・ウエンベツ河口遺跡の8遺跡である¹²⁾。これらのうち、河野広道氏が「斜里町史先史時代史」中に述べられたオホーツク式土器の出土地点・9地点の中に含まれているのは、ウトロ遺跡（河野氏による「6 ウトロ市街地」）・チャシコツ岬上遺跡（同じく「9 ウトロチャシコツ岬上部」）・チャシコツ岬下B遺跡（同じく「10 ウトロチャシコツ岬西側平地」）・禪龍寺遺跡（同じく「29 競馬場西端」）の4遺跡である。知床岬遺跡（河野氏による「1 知床岬東端付近」）については、「竪穴住居跡が多い」ことと「薄手の土器・石器が出土する」ことは述べられているが、オホーツク式土器の出土についてはふれられていない¹³⁾。他の3遺跡に

12) 以上の遺跡名は、北海道教育庁遺跡台帳によるものである。以下、小論では、原則として、この呼称にしたがうことにする。

なお「知床岬遺跡」は、ここにいう斜里町管内所在のもの（道番号I-08-5）と、羅臼町所在のそれ（道番号N-05-1）と、同名のふたつの遺跡があるらしい。以下、小論で「知床岬遺跡」と書いた場合、当然であるが、前者を指すものとお考え戴きたい。

また、知床博物館には、他に「大栄海岸」出土とされる刻文土器を主体とするオホーツク式土器が保管されているが、遺跡としては確認されていないようである。われわれもこの出土地点を確認していないので、ここではふれないことにしたい。

13) 前註10松下氏他報告書の序文「知床半島遺跡調査報告によせて」の中で、米村喜男衛氏が「(昭和3年に)オホーツク式土器であることを確認し、その附近の草むらの中に相当大型の竪穴が所々に点在しているのを見」たことを書いておられる。氏は、これを「当時の北見郷土研究会会報、郷土研究1号に概略を報告した」とも書いて

つについては河野氏の記載になく、その後確認されたものである。なお、河野氏が記載された他の5地点のうち、『36 ピラガ丘』は、その後の発掘調査によって、藤本強氏のいわゆる『トビニタイ文化』の集落遺跡であることが確認されており¹⁴⁾、また「20 東朱円(島戸狩)墓地付近」も、朱円竪穴群遺跡の一部であって、続縄文文化・擦文文化にかかる竪穴群中に『トビニタイ文化』にかかるそれが加わっているのだと考えられよう。他の『14 チップトマリ二線八番地木塚友喜所有畑地』『32 黒田公園』『34 栄町神社の小丘』については、その後、オホーツク式土器の出土は確認されていない。ついでにいえば、この後二者は、その位置等から考えて、ピラガ丘遺跡第I~III地点・須藤遺跡に続く『トビニタイ文化』の集落遺跡だったのではないかと推測している¹⁵⁾。

以下、各遺跡について、それぞれに記載する。なお、遺跡名に頭書した番号は、第1図として示した斜里町におけるオホーツク文化遺跡分布図中の番号に一致する。

1. 知床岬遺跡

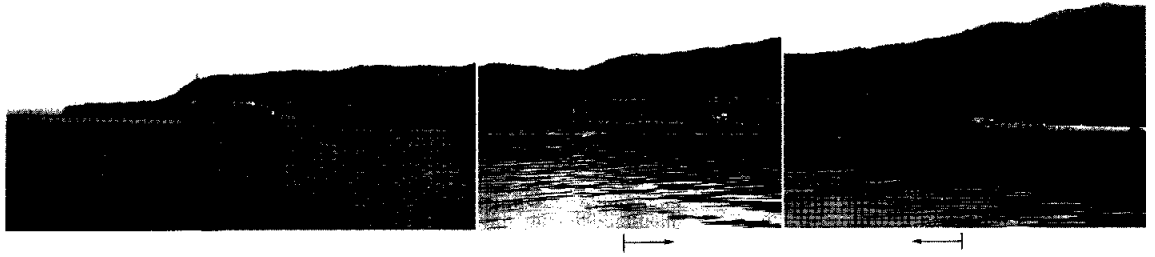
知床半島の北東岸は、ほぼ全域にわたって脊稜山脈が海にせまり、多くの場所で懸崖となって海に落ちている。ウトロ漁港をでた船は、こうした懸崖を見ながら岬にむかうのである。そこでは、いくつかの河川の川口に僅かな浜が広がる以外、ほとんど平地らしい平地は認められない。しかし、船が岬に近づくと、そこには灯台の立つ山稜を背景として、見事な平坦面の広がるのが認められる(第2図)。この平坦面は海拔20~30mをはかり、標識的な海蝕段丘であるという¹⁶⁾。

おられるが、筆者はこの文献は未見であり、その詳細は不明である。河野氏の記載は、「米村によれば」とあるので、米村氏の談話あるいは上記文献がソースになっていたと思われるが、なぜオホーツク式土器の出土にふれられていないのか、疑問が残る。

14) 前註1引用の米村氏、1970、米村氏他、1972、金盛氏、1976、各報告書。

15) 前註3文献176頁、第72図1・2の資料(同図には半沢公園の註記があるが、これは本文にいう「32 黒田公園」のことである)は、そうした可能性を示唆するものであろう。

16) 石川俊夫「知床半島北半部の地質とところどころ」『地床半島(特別調査報告)』(北海道文化財シリーズ第9集)北海道教育委員会、所収、1967。



第2図 知床岬先端部の海蝕段丘（矢印が竪穴群の分布範囲）

段丘は、燈台の直下では幅50m程と狭くなるが羅臼側では東1km程の赤岩まで200~300m幅で続き、一方、斜里側では、付図1¹⁷⁾にみるように、獅子岩付近まで2kmにおよんで、途中文吉湾によって中断するが、150~300m幅で続いている。この海蝕段丘上は、僅かな灌木はあっても、ほとんど全く森林から解放され、一面の草原になっている。草原は、この段丘上で、かなりはっきりした形で三つの部分に区分できるようである。草丈50~100cmの丈の低い草本群落と、草丈150~200cmの丈の高い草本群落、およびササ群落の三つである。辻井達一氏は、前二者の境界を連ねる線の方位がほぼ夏の卓越風のそれと一致することを指摘しておられる¹⁸⁾。こうした植物群落のあり方は、後にもふれるが、遺跡のあり方と全く無関係ではなかったようである。

さて、付図1中で、遺跡として確認されているのは、その右端に近いアブラコ湾上の燈台の発電小屋付近の知床岬燈台下遺跡と、啓吉湾・はさみ岩湾・文吉湾にのぞむ段丘上に広がるこの知床岬遺跡の2地点である。その他、後者から200m程離

れて、山際に、竪穴らしい凹み3個が認められるが、遺跡かいなかなお確認されていない。前者・知床岬燈台下遺跡附近では、これまでいくつかの黒曜石剥片が採集されているが、その性格はなお明らかであるとはいえない。付図1にみるようにこの附近では不明確なものを含めて3個の竪穴が認められるが、それがかなり小形であることからみて、少なくともオホーツク文化にかかる竪穴ではないように思われる。すなわち、ここでは、後者・知床岬遺跡についてのみ、記載しておくことにする。

この地点では、付図1にみられるように、啓吉湾上から文吉湾上にかけて、300m強にわたって、地表面から確認できる形で数多くの竪穴の分布が認められる。われわれのおこなった測量調査では、ここに、やや不明確なものを含めて、83個の竪穴を認めている。

これらの竪穴には、径5~8mとやや小さくまた浅いほぼ円形を呈するものから、径10mを超える大形でかつ深い方形ないし六角形を呈するものまでが含まれている。後に述べるように、本遺跡では、これまで3回の発掘調査がおこなわれており、続縄文文化にかかる遺物とオホーツク文化にかかる遺物、および近世のアイヌ族にかかる遺物などが発見されているが、近世のアイヌ族は竪穴を作っていないかと思われる¹⁹⁾ので、これらの竪穴は、前二者・続縄文文化あるいはオホーツク文化にかかる竪穴住居址であろうと推定される。

17) 付図1は、1979年から1981年にかけておこなった、われわれ北海道大学北方文化研究施設の測量調査によるものである。この調査にあたっては、現地の知床水産の番屋の方々に、輸送・宿泊から食事の世話にいたるまで、全面的な御協力を戴いた。衷心から御礼申上げる次第である。また、この調査では、一部、知床博物館金盛典夫氏の御協力をもえている。明記して御礼申上げる。なお、付図1には、一部、農林水産省旭川営林局北見支局の斜里事業区基本図114の成果をも利用している。巻末添付。

18) 辻井達一「知床半島における二、三の興味ある植物群落について」『知床半島（特別調査報告）』（北海道文化財シリーズ第9集）北海道教育委員会、所収、1967。

19) 大井晴男「擦文文化といわゆる“アイヌ”文化との関係について」『北方文化研究』第15号、1984、の註46)を参照。

後に述べるように、これまでの発掘調査の結果からみれば、浅く小形の円形の竪穴は続縄文文化にかかる、そして深く大形の方形ないし六角形のそれはオホーツク文化にかかる、竪穴住居址だったかと考えられる。もっとも、本遺跡にみられる竪穴が截然とこうした二者に区分できるわけではなく、そこには不明瞭なもの・中間的なものもまたないわけではない。しかし、付図1によれば、そのおおよその推定は下可能ではないようにみえる。たとえば、遺跡の東端附近の例についてみると、1～5・7・9～11・13・14号などは続縄文文化にかかる竪穴住居址かと思われるし、一方、6・8・12・15・16号などの例はオホーツク文化にかかる竪穴住居址かと推定されることになろう。

こうした推定にたつて付図1をみると、竪穴群のうち段丘のやや奥・ササ群落の中に分布する竪穴は、いずれも前者・浅く小形の円形を呈するもの、つまり、続縄文文化にかかる竪穴住居址のようであって、それに対して段丘縁に近い部分・丈の高い草本群落の中に分布するそれには、後者・深く大形の方形あるいは六角形を呈するもの、つまり、オホーツク文化にかかる竪穴住居址が多いようにみえる。もっとも、段丘縁に近い部分にも不明瞭ではあるが、5・40・41・43・44・54号など、前者・浅く小形の円形を呈する例もまたないわけではない。想像をたくましくすれば、本遺跡には、まず段丘縁近くからやや奥・ササ群落の中にまでおよんで、続縄文文化にかかる竪穴住居址群が作られ、その後、段丘縁寄りの部分にのみ、オホーツク文化にかかる竪穴住居址群が形成されたのかもしれない。こうした位置に竪穴住居址群が残されたのは、さきにもみたように、夏季の卓越風の影響を受け難い場所を選んだ結果だったかと考えられる。

すでに述べたように、判定に苦しむものがないわけではないが、この遺跡で、オホーツク文化にかかる竪穴住居址かと考えられる竪穴は、28個に達している。付図1によってその分布をみると、啓吉湾上に、ほぼ段丘縁に沿うように、6・8・12・15・16号の5個が並び、ついではさみ岩湾上に21～28・34・42・53・55・64～68号の17個が、はさみ岩湾にむかって、段丘縁にいくらかの空地を残す形で、ほぼ半円形をなすように分布するようである²⁰。さらに加えて、はさみ岩湾の東・啓

吉湾との間にある突出部には17～20号の4個が群在し、また逆側、はさみ岩湾の西・文吉湾との間にある突出部²¹上には82号と、不明瞭ではあるが、83号の2個の竪穴が認められる。

こうしたオホーツク文化にかかるものと思われる竪穴住居址群の分布のあり方をどのように捉えるかは、かなり困難な問題であるといわざるをえないようである。筆者はさきに、オホーツク文化にかかる集落遺跡のあり方について、いくつかの類型にわけて考えてみたことがあるが、この知床岬遺跡の場合、部分的にはともかく、全体としてはそのいずれの類型にも当てはまりそうもない²²。後にあらためて考えてみることにしよう。

なお、測量調査の時点で、われわれは、金盛典夫氏から、竪穴群の分布地域の東に接して獣骨の散布する地点があるという御教示をえていた。これは、北海道教育庁遺跡台帳にも記載されているところである。筆者らは、それがオホーツク文化の荷負者の動物儀礼に関わるものかもしれないと予想して、測量調査に際して細心の注意をはらったが、遺憾ながら遂に確認することができなかった。さらに今後の調査に俟ちたい。

さて、さきにも述べたように、本遺跡ではこれまで3回にわたって発掘調査が実施されている。本遺跡について考えるためには、当然、これらの結果をも含めて考えなければならないので、ここでは、それらの調査結果について振り返ってみておくことにする。

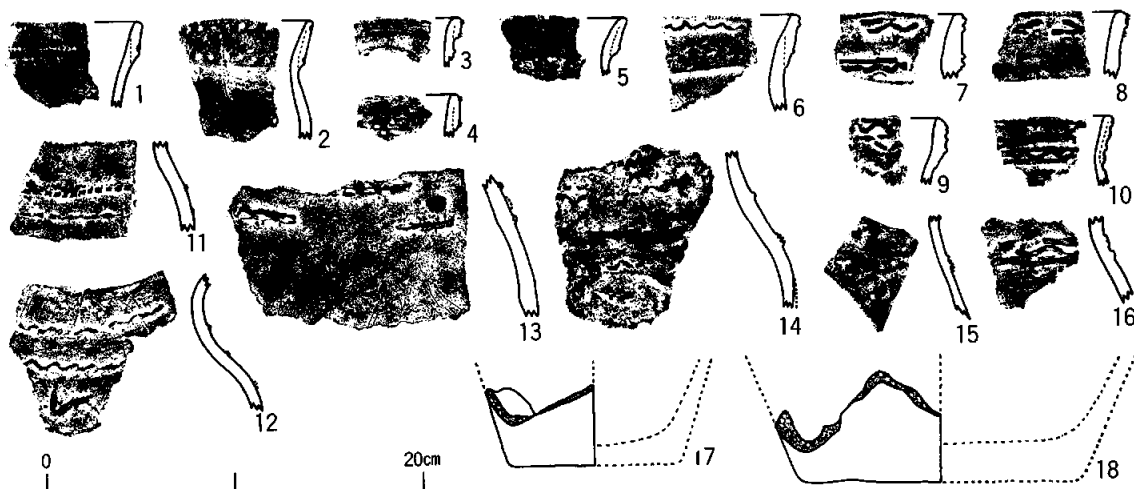
本遺跡の最初の発掘調査は、1961年に松下亘氏他の5氏によっておこなわれた。その結果は、同年、概報の形で公表されており、それによってみると、疑問の余地がないわけではないが、われわ

20) もっとも、やや不明瞭な40・41・43号などが、オホーツク文化にかかる竪穴住居址だったとすれば、こうした捉え方はできないことになる。正確には、さらに今後の調査に俟たねばなるまい。

21) このはさみ岩湾と文吉湾を境する突出部の基部・その最狭部に、2条の浅い濠が認められる。おそらく、この突出部はアイヌ族のチャシだったものと考えられる。

22) 大井晴男「遺跡・遺跡群の型式論的処理について——オホーツク文化の場合——」『北海道考古学』第18輯、1982、参照。

この論文中で、筆者は、本遺跡のオホーツク文化にかかる集落をII B型としたが、付図1によれば、そう捉えることは困難のようである。訂正しておきたい。



第3図 知床岬遺跡（1961年度調査）出土のオホーツク式土器

れが付図1にいう42号堅穴に、対角線の方向に、トレンチを開けられたようである²³。調査に当たられた諸氏は、このトレンチで、堅穴住居址の床面の一部らしい面・炉址の一部らしい焼砂などを確認されたという。ただ、堅穴壁の立上りを確認されてはおられないようであって、この部分がたしかに堅穴住居址の一部であったかどうか、必ずしも確証がえられているとはいえないが、ほぼそう考えて誤りないものと思われる。トレンチ内からは主としてオホーツク式土器が出土したようであり²⁴、概報にも述べられるように、ここにはオホーツク文化にかかる堅穴住居址があったのであ

う。出土したオホーツク式土器には、型押文をもつもの²⁵・刻文をもつものもないわけではないとしても、貼付文をもつものが多数を占めるようである（第3図）²⁶。つまり、本遺跡には、貼付文土器を伴う堅穴住居址すなわち、筆者のいわゆる『道東型のオホーツク文化』²⁷にかかる堅穴住居址が、残されているものと考えてよいであろう。

翌1962年、そのメンバーこそ変わったが、やはり松下亘氏他の5氏によって、本遺跡の第二次の発掘調査がおこなわれている。その結果は、さきに述べたように、市立郷土網走博物館報告1として公表された²⁸。報告書によると、この調査では、前年度トレンチに隣接する『外観上平坦な地域』の2箇所にてA区・B区の2トレンチを掘開された

23) 前註10知床岬遺跡調査隊文献。

なお、同文献によれば、この堅穴住居址は『はさみ岩湾（仮称）の段丘崖端から……（中略）……約38米山手寄りにあり』『くほみのりんかくの水平プランは約7.8米×8.3米の隅丸方形で、対角線の長さは約11米』と書かれている。しかし、付図1の42号堅穴はその中央で段丘縁から46m、堅穴端部でも40m離れており、またその大ききさもほぼ10m×10mをはかり、同文献の記述と一致しない。だが、42号堅穴にはその対角線の方向にトレンチの跡が残っており、他にそうした事例もないので、多少の距離・大きさの違いがあっても、ほぼ、この堅穴はわれわれの42号堅穴に当るものと考えてよいと思われる。

24) 前註10知床岬遺跡調査隊文献には『縄文を地文とする土器』45片と『オホーツク式土器』133片が出土したことが述べられているが、この調査ではトレンチ以外に試掘坑が開けられており、ここからも土器が出土しているらしいので、トレンチ内の土器の比率がどうであったか、正確には確認できない。

25) 以下、オホーツク式土器の記載に際しては、下記の文献の例にならう。

大場利夫・大井晴男編『オホーツク文化の研究2、香深井遺跡 上』東京大学出版会、1975。

26) 第3図には知床博物館所蔵の当該調査の出土資料を掲載させて載いた。資料の利用を許可された知床博物館および調査担当者松下亘氏に御礼申上げる。なお、図中1・2・5～7・9・12・13・16は、前註10知床岬遺跡調査隊文献の第6・7図中に紹介されている資料である。また、17・18の底部資料も、同文献第7図中に断面図として示されている例の中に含まれているかもしれない。なお、同文献第6図5・6および第7図3・4の資料は、筆者の見た資料中には含まれていなかった。

27) 前註22文献。

28) 前註10松下氏他文献。

という。われわれの測量調査の時点での所見ではこれらのふたつのトレンチは、われわれが付図1で43号と呼んだ浅い竪穴に接する位置にあっているようである²⁹。2トレンチのうちA区では、2枚の包含層が認められ、第一層からは『オホーツク式土器と石器が』第二層からは『縄文の施文された土器及び石器が』出土しているという。さらに、A区では、オホーツク文化にかかる『配石をともなう墳墓』が確認されている。一方、B区では、A区よりもやや厚い第一層からは『オホーツク式土器のみが出土し』、またこの層中には、『遺構として確定的でない』が、おそらくオホーツク文化にかかるものと思われる『配石状礫群』等が見出されている。出土するオホーツク式土器は、A・B両区ともに、貼付文土器が多数を占めるらしいが、少数ではあっても刻文系の文様をもつ土器が発見されていることは注意を惹く。なお、このB区では、第一層の下に『かく乱されているとしか考えられない』『相当厚い堆積層』を隔てて、柱穴・炉址等を伴う『竪穴住居址面の一部』らしいものが認められている。このB区はわれわれの43号竪穴に接しているので、あるいは『住居址の壁まで』は『つきとめられ』ていないが、ここには竪穴住居址があり、それが、43号と呼んだ浅い竪穴として、地表面から確認されるのではないだろうか。そして、そうであるとすれば、この『竪穴住居址面』の層準からは『縄文の施文された土器』のみが出土しているので、竪穴住居址はそのグループにかかるものである、すなわち、さきにもいうように、本遺跡の地表面から円形に見える浅い竪穴は、ほぼ、そのグループのものであると推定されてよいのかもしれない。

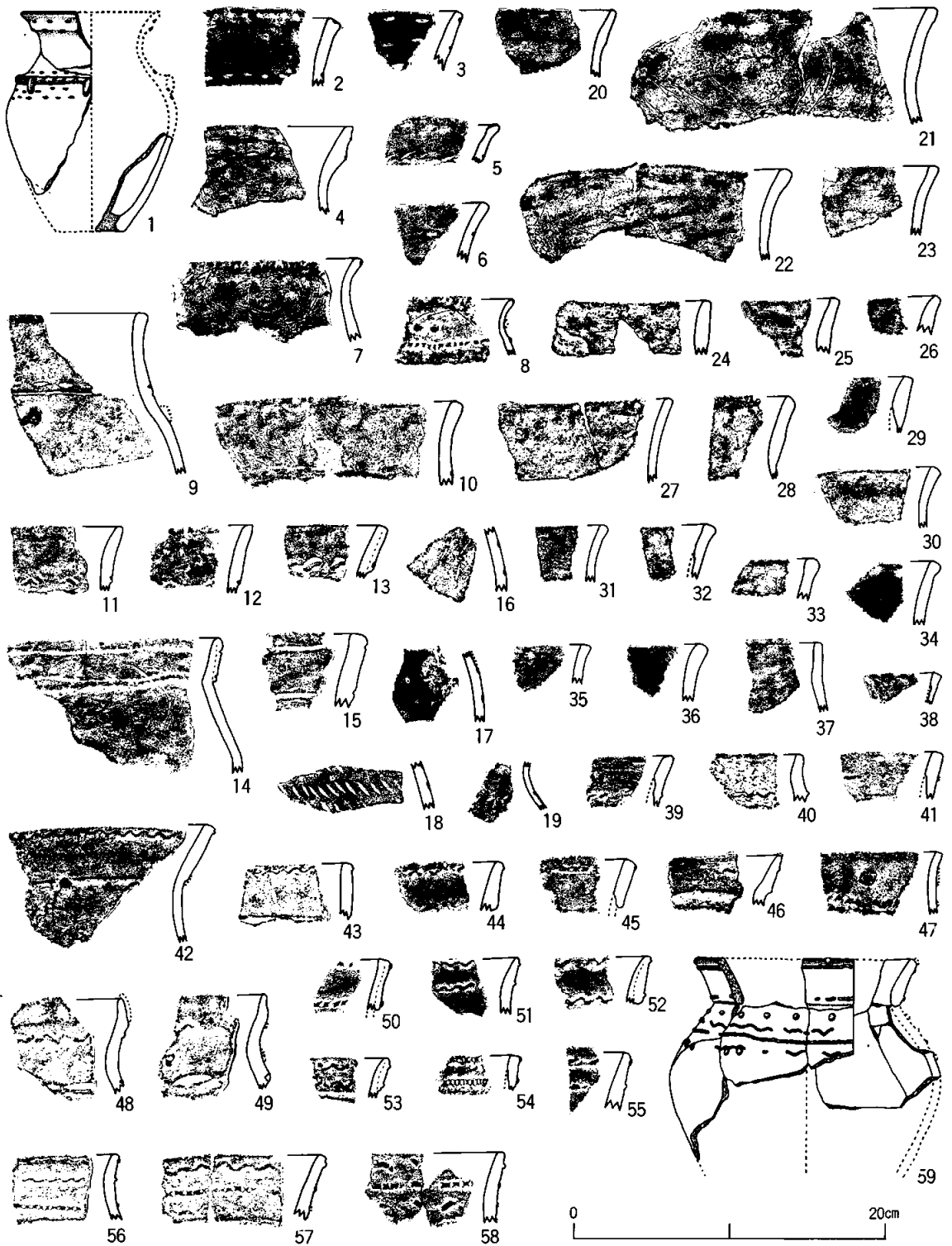
本遺跡の第三次の発掘調査は、こえて1965年におこなわれている。これもさきにもふれたように、大場利夫氏他の知床遺跡調査班によって実施されたものである³⁰。報告書によると、この調査は、1962年度に『発掘されたところ』『より北に4米離れた』点から『長辺11米、短辺5米の発掘区を設定し』これを調査したと記載されている³¹。こ

の発掘区内でも、1962年度の調査区と同様に、第一層中に、一部地表に露出して、礫群の分布が見られたようである。これらの礫群は『あるところと無いところが判然とし、しかも密集した部分と、まばらな部分とがあり、明らかに人工的に配合されたものである』が、『明確な遺構を示すものはみられなかった』という。その他、この発掘区内では、『墓こうが一基、墓こう様のものが一基発見されている』というが、報告されたかぎりでは1962年度A区のそれほど明確なものではなく、墓であるかどうか、やや疑問が残る。出土遺物には『縄文の施文された土器』とオホーツク式土器を含む土器群のほか、石器・骨製品・金属製品等があるという。土器群の中では、オホーツク式土器が多く、その80%強を占める。ここでも、やはり貼付文土器が多いが、ふたたび刻文系の文様をもつ土器もまた発見されている(第4～6図)³²。その他、石器群のうちにも、有孔石錘の破損品・同未製品(?)等、明らかにオホーツク文化にかかる遺物が含まれている(第7図)³³。一方で、出土遺物の中に含まれる2個体分の鉄鍋破片も、注意

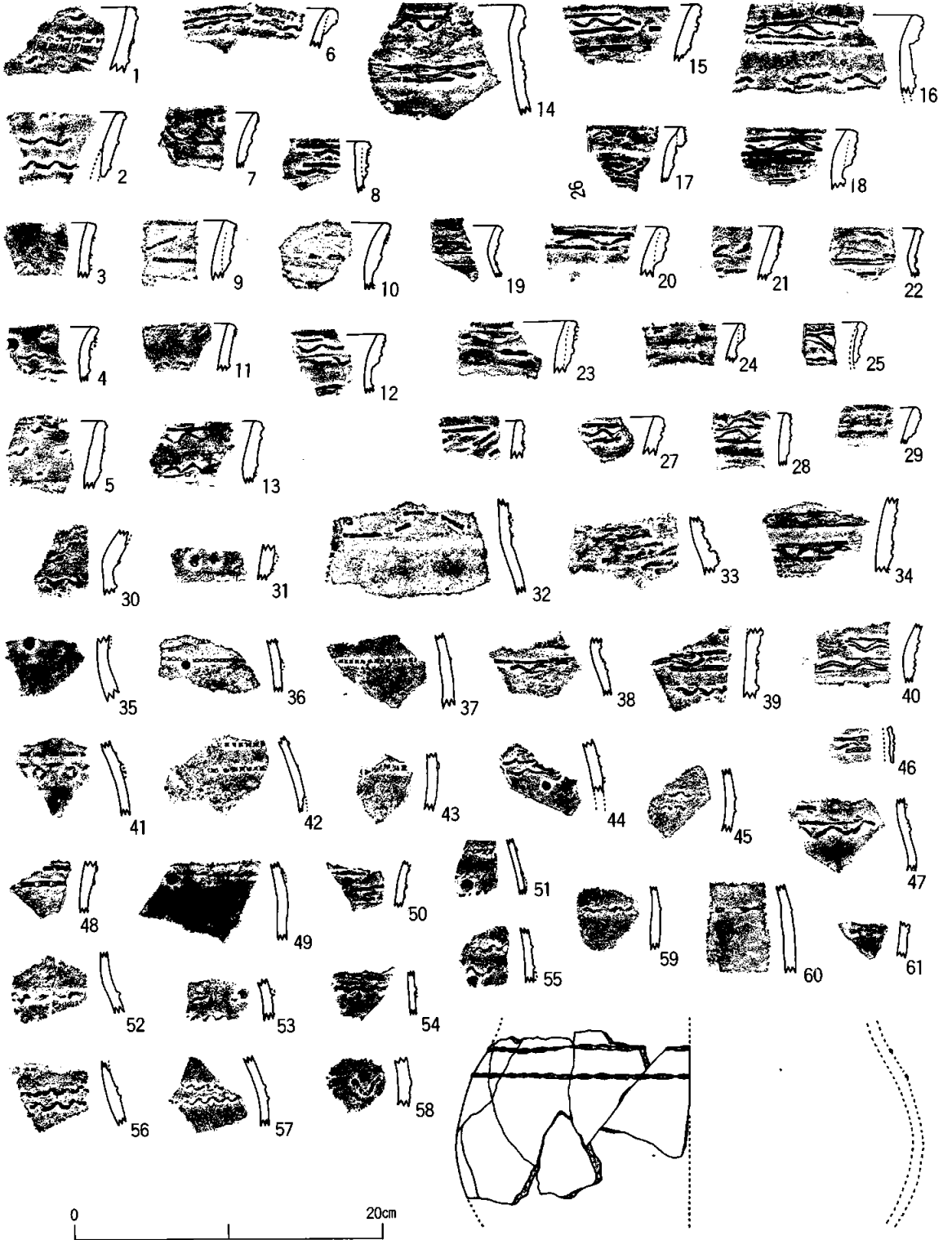
- 31) この報告書にいう1962年度に『発掘されたところは』前註10松下氏他文献にいうA区だったようである。われわれの測量調査の際の所見によれば、1965年の発掘区は1962年度B区のすぐ北東に、これに接するように設定されたらしい。ただし、地表から確認される場所は、ほぼ3×10m程であり、報告書の記載と一致しない。また、報告書に『未発掘に終わった』と書かれている発掘区と『竪穴住居址状の凹部』(われわれのいう40・41号竪穴)を結ぶトレンチも、われわれの測量調査の時点で明らかに地表から確認できる形であり、報告書の記載とはいささか喰いちがいがありそうである。
- 32) 第4～6図には知床博物館所蔵の当該調査の出土資料を掲載させて戴いた。資料の利用を許可された知床博物館および調査担当者大場利夫氏に御礼申上げる。なお、第5図1・5・8・9・11・14・18・48・51・59および第6図1・12・15・18・22・28・34・37・39・42・44・62は、前註11報文の第7図中に紹介されている資料である。ただし、同図15・18・32・37は、われわれの見た資料の中には含まれていなかった。
- 33) 第7図には知床博物館所蔵の当該調査の出土資料を掲載させて戴いた。資料の利用を許可された知床博物館および調査担当者大場利夫氏に御礼申上げる。なお、前註11文献第8図23・24に示された例はわれわれの見た資料中にはなく、小論の第7図1・2に示す例は未紹介の資料である。また、同図3に示した資料は、われわれの測量調査の際の表面採集資料である。

29) 前註10松下氏他文献の『Fig. 3 遺跡付近局地図』とわれわれの測量調査の際の所見とは必ずしも一致しないが、いくつかの状況から上のように判断した。

30) 前註11文献。



第4図 知床岬遺跡（1965年度調査）出土のオホーツク式土器[1]



第5図 知床岬遺跡（1965年度調査）出土のオホーツク式土器〔2〕



第6図 知床岬遺跡（1965年度調査）出土のオホーック式土器〔3〕

第7図 知床岬遺跡（1965年度調査）出土の石錘。ただし、3は北方文化研究施設の測量調査の際の表面採集資料。

さるべきものかもしれない。これらの遺物は、この地点が、近世のアイヌ族によっても利用されていたことをうかがわせるものだからである。

以上にみてきた三次にわたる発掘調査の結果によって考えると、本遺跡は、大きくわけて三つのグループ、すなわち、縄文文化の荷負者・オホーック文化の荷負者・近世のアイヌ族の三者によって、時期を異にして、それぞれに利用され、遺跡として形成されていったものと考えてよいであろう。

それらのうちオホーック文化の荷負者について

いえば、ここには貼付文土器を伴う竪穴住居址が残された、つまり、本遺跡が『道東型のオホーック文化』の荷負者によって集落として利用されていたことが明らかであるといえそうである。しかし、そこでもなお問題が残っていないわけではない。すなわち、これらの発掘調査では、そのいずれについても、貼付文土器のみでなく、刻文系の土器もまた出土しているからである。いったい、この刻文系の土器群は、どのような経緯で本遺跡に残されたのであろうか。これらは、竪穴住居址を残した貼付文土器群の製作・使用者とは異なる人間集団によって残されたのであろうか、あるいは、同じ集団によって残された、つまり、貼付文土器とともに、並行して製作・使用されていたのであろうか。實際上、時間的にズレをもっているといわれる刻文系の土器群と貼付文土器群との間の型式論的変遷の実態は、これまでのところ、必ずしも十分に明らかにされているとはいえないようである。しかし、藤本強氏のいわゆる『オホー

ツク土器d群・e群³⁴を伴う竪穴住居址では、たとえば、トコロチャシ1号外側竪穴・同1号内側竪穴・同2号竪穴・同Tトレンチ竪穴など、およびモヨロ貝塚10号竪穴でも、刻文系の土器はほとんど共伴しなかったらしい³⁵。それがそのとおりであったとすれば、本遺跡における刻文系の土器は、貼付文土器に伴うものではなかった、すなわち、竪穴住居址を残した貼付文土器群の製作・使用者とは異なる人間集団によって残された、いいかえれば、それらとは時期を異にして・別の人間

集団によって残されたものと考えられることになろうか。そして、そうであるとすれば、本遺跡で刻文土器群の製作・使用者達が竪穴住居址を残したかどうかをお確認されていないが、これまでの事例³⁶から考えれば、彼等は竪穴住居址を残していなかった、つまり、彼等が本遺跡をキャンプサイトとして利用していたのだと考える可能性が大きいように思われる。ここでは、オホーツク文化の荷負者に関して、本遺跡が、まず刻文系土器群の製作・使用者のキャンプサイトとしてあり、後に貼付文土器群の製作・使用者達によって集落として利用されたものと考えておきたい。

34) 藤本強「オホーツク土器について」『考古学雑誌』第51巻4号、1966。

35) 前註1引用の駒井氏編文献。

その唯一の例外になるかと思われるのは、同文献中に報じられているトビニタイ遺跡1号竪穴の例である。この場合、前註34文献に藤本氏もいわれるように、氏のいわゆる「オホーツク土器d群」と考えられた貼付文土器群とともに、かなりの数にのぼる刻文系の土器破片が発見されている。藤本氏は、これらの刻文系の土器が「付近の竪穴から、床面におちて、混入したもの」と考えておられるが、筆者は前註7引用の文献で、刻文系の土器群の製作・使用者に関して、この遺跡がキャンプサイトとしてあったものと、つまり、そのグループの竪穴住居址があったわけではなく、その包含層を切って貼付文土器群を伴う竪穴住居が作られたものと考えた。藤本氏の理解と筆者のそれとの間にはやや差があるが、少なくとも、これらの刻文系の土器が、この竪穴に共伴した貼付文土器群に伴うものではないと考える点では一致するようである。そして、そう考えるとすれば、これもまた例外ではないことになる。

ちなみに、筆者は、下記の文献で、礼文島香深井A遺跡発見の土器群を素材として、道北部のオホーツク式土器が全く漸移的な形での型式論的変遷を遂げていたことを論じたが、しかし、本文にいうところが誤っていないとすれば、道東部における刻文系土器群から貼付文土器群への変遷は、それとは異なっていたものと考えなければならぬようである。つまり、本文にいうように藤本氏の「オホーツク土器d群・e群」に刻文系の土器がほとんど共伴しない以上、両者の間の変遷は漸移的であったとは考え難いからである。藤本氏の「オホーツク土器c群」は、刻文系の土器群に僅かに「擬縄貼付文」が伴うグループとされているが、ここには典型的な貼付文土器はなお共伴してはいないようである。つまり、藤本氏の「オホーツク土器c群」から同「d群・e群」への変遷の経過は、なお明らかであるとはいえないことになろう。さきに本文中に「刻文系の土器群と貼付文土器群との間の型式論的変遷の実態は、これまでのところ、必ずしも十分に明らかにされているとはいえない」といったのは、その故である。さらに今後の研究に俟ちたい。

大井晴男「土器群の型式論的変遷について 上下——型式論再考——」『考古学雑誌』第67巻3・4号、1982。

ついでにいえば、オホーツク文化にかかる遺跡の場合、これまでの例では、墓域は、たとえば竪穴住居址群などとは隔離されて、独立してあるのが通例のようである³⁷。その意味では、本遺跡の1962年度調査で確認された墓址が、竪穴住居址群と重なるような位置にある、ないしは、さきに述べたように、段丘縁に面して半円形に分布する竪穴住居址群の中央の空所中に位置していることは、注意さるべきかもしれない。竪穴住居址群の分布のあり方とともに、集落の構成にかかわる問題として、さらに考えてみる必要があろう。

2. ポンベツ遺跡

ルシャ川川口付近は、ウトロから岬にいたる知床半島北西岸の海岸線で、ほとんど唯一、断崖絶壁から解放されるところである。この付近で脊稜山脈は最も高度を下げ、ルシャ川・テッパンベツ川のふたつのやや大きな河川が海に注いでいる。ウトロ漁港をでて岬にむかう船がこの沖にさしかかると、波静かな日にも、脊稜山脈を越えて吹きおろしてきた風の影響をうける。

ポンベツ遺跡は、このルシャ川の西900m程の

36) 前註7引用の文献および同22文献を参照されたい。

37) 網走市モヨロ貝塚では、これまでの報告書の記載によると、竪穴住居址群の分布と墓域の拡がりとは、実際上、重なってしまうようであり、その意味では例外としなければならぬかもしれない。しかし、この場合、両者が同時にあったのかどうかをも含めて、さらに検討しなければならない問題が残っているように思われる。

下記文献等を参照されたい。

米村喜男衛「モヨロ貝塚資料集」網走郷土博物館、1950。

駒井和愛他「網走モヨロ貝塚」前註1引用の駒井氏編「オホーツク海沿岸…」に別編として所収、1964。

ところに注ぐ小河川の川口の右岸に残されている(付図2)³⁸。ルシャ川周辺では、テッパンベツ川右岸に続縄文期の遺跡が残されているほか、付図2にも見られるように、ルシャ川右岸の段丘状の台地上に、これも続縄文期のものらしい、竪穴3個が認められている。これらふたつの遺跡がやや大きな河川の開けた河口部に残されているのに対して、ポンベツ遺跡は、規模の小さいポンベツ川右岸の、背後に山地を負う、礫だらけの海浜の僅かな高みに残されているのである。

遺跡はまさに川に接しており、水流によって削られた崖面には遺物包含層が露出している。ただし崖面で採集される土器は、そのほとんどが続縄文土器である。河道に接して、海拔8mから12m程のところには、付図2にみるように、僅かにやや平坦な面の拡がり認められる。この平坦面上の、海拔10mから12mの高さにかけて、現河道から10m程のところから50m程の範囲で、やや不明瞭ではあるが、13個の竪穴が観察されている。竪穴は、大きいもので径8m程・小さいもので径4m程の、外見上円形を呈するものである。これらの竪穴内あるいはその付近からは、筆者等は遂になんらの遺物も発見できなかったが、かつて貼付文をもつオホーツク式土器が採集できたという³⁹。たしかに竪穴群に接する川岸に露出している包含層から発見されている土器は、そのほとんどが続縄文土器であって、オホーツク式土器は無文の胴部破片のみであるが、竪穴群の位置・立地およびその分布状態などから考えると、これらの竪穴群がオホーツク文化にかかるものである、それもおそらくは貼付文土器群の製作・使用者によって残されたものである可能性が大きいように思われる。以下、そうした想定の上に論を進めておくことにしたい。

本遺跡の立地環境は、少なくとも現代のわれわ

れの感覚で考えるかぎり、集落の立地としてけっして好適なものとは考え難い。付図2にも明らかのように、むしろ、はるかに開けた環境にあり、しかも広い平坦面の拡がるテッパンベツ川口・ルシャ川口の方が、集落立地としてより好適であるように思われる。しかも、さきにいう川岸の崖面でみると、この遺跡は、かなりの厚さをもつ河川堆積物・礫床の上に形成されているらしい。実際、竪穴内でも、表面からかなりの礫のあることが推定できるのであって、おそらく竪穴は、その床面に多数の大小の礫が露出していたのではないかと想定される。その点でも、この遺跡の立地は、集落を作るために好適な条件にあったとは考え難いのである。問題は、したがって、なぜこうした不適当な条件のところ集落が作られなければならなかったかにある。勿論、さきに述べた知床岬遺跡と以下に述べるウトロ付近の遺跡群のちょうど中間、両者からそれぞれ20km前後の位置にあって、生業の場の関係から、このあたりにもうひとつの集落が作られる必要があったことを前提として、しかもほとんどルシャ付近にしかそれを可能にする場所がえられないことを前提として、つまり、ルシャ付近で、他の地点——たとえばテッパンベツ川口・ルシャ川口など——をおいて、ポンベツ川口に集落が作られたのはなぜかという問題である。この付近の遺跡については全く発掘調査はおこなわれておらず、確定的にいうのは困難であるが、さきに注意したように、この付近が脊稜山脈を越えて吹きおろす夏季の卓越風の通路になっていることと関係するのではあるまいか。ポンベツ川口は、この付近では最もそうした風の影響を受け難いところである。オホーツク文化の荷負者は、集落の場として、他のいくつかのマイナスの条件にもかかわらず、そうした立地を選択していたのではないかと考えられる。

ついでに、金盛典夫氏らによって表面採集され、知床博物館に所蔵されている、本遺跡発見のオホーツク式土器があるので、紹介しておくことにしよう。紹介できる唯一の資料である。資料は口縁部の小破片であり、櫛歯状の型押文といわゆる指圧式浮文が施文されている(第8図)⁴⁰。さきにいう竪穴群が、筆者の想定のように、貼付文土器群

38) 付図2は北海道大学北方文化研究施設の1978年度の測量調査によるものである。この調査にあたっては、現地の水産庁北海道さけますふ化場北見支場岩尾別事業場および19号漁業部の方々に、全面的な御協力を戴いた。また、知床博物館の御支援も忘れることができない。明記して御礼申上げる次第である。また、この付図2には、一部、北海道林務部の斜里町森林図の成果をも利用していることを明記しておく。巻末添付。

39) 金盛典夫氏の御教示による。

40) 資料の利用を許可された知床博物館に御礼申上げる。



第8図 ポンベツ遺跡出土
のオホーツク式土器

の製作・使用者達によって残されたものと考えれば、この土器がそれとどんな関係にあったかがさらに問題になろう。この場合も確定的にいうことができないが、あるいは、ここ

にも刻文系の土器群の製作・使用者達のキャンプサイトが残されているのであろうか。さらに今後の調査に俟つことにしたい。

なお、この原稿執筆中の1984年5月、金盛典夫氏らとともに、さらに本遺跡を踏査する機会をえた。その結果、付図2に示した竪穴群の背後の急斜面を登った中段の、海拔20m強の、川に沿うて細長くのびるテラス状の平坦部(付図2では、この部分はわれわれは実測しておらず、北海道林務部の森林図によっているが、必ずしも正確に表現されていない)に、新たに竪穴10個を確認した。竪穴は外見上ほぼ方形で、径5~7mをはかる。付近で遺物等を確認できなかったが、おそらく、これらもまたオホーツク文化にかかる竪穴群であろうと思われる。近い将来、この部分についてさらに測量調査を実施することを考えている。ここでは、付図2の遺漏は明らかであるが、そのままの形で示しておくことにする。さきに述べた下段の竪穴群との関係については、後にあらためてふれるところであろう。

3. ウトロ遺跡

ウトロ付近は、高い海蝕崖が続き、顕著な湾入部のない知床半島北東岸にあって、やや明らかな湾入部を作るほとんど唯一の個所である。

ウトロ付近には、現在のウトロ市街からチャシコツ岬のあたりにかけて、僅か2km程の間にウトロ遺跡・チャシコツ岬下A遺跡・チャシコツ岬上遺跡・チャシコツ岬下B遺跡の4つの遺跡が知られている。当然、これらの場合、そのそれぞれが相互に無関係にありえたとは、およそ考え難い。したがって、われわれは、これらの相互の関係をも含めて考える必要があると思われるが、そうした問題はあらためて後節で考察することとし、さしあたり、ここでは、個々に、それぞれの遺跡についてのみ記載しておくことにする。

北海道教育庁遺跡台帳によると、ウトロ遺跡の

範囲は、「神社山」と通称されているウトロ神社をのせる孤立した海拔30m程の岩体を中心として、その東西にまたがっているようである。ただし、筆者自身、1959年に東京大学文学部考古学研究室による発掘調査に際して、そのメンバーの一人としてはじめて訪れて以来、たびたびこの遺跡を訪れる機会をえているが、「神社山」の西側ではなお遺跡を確認していない。

本遺跡では、これまで、大きくわけて二度の発掘調査がおこなわれている。

そのひとつは、前述の1948~1951年の河野氏の斜里町管内の遺跡調査の一環としておこなわれたもので、1949・1951両年にそれぞれ各一日ずつの発掘調査がおこなわれたようである⁴¹。その発掘地点は、正確には不明であるが、知床博物館所蔵の資料の註記によると、『ウトロ神社下』『ウトロ市街地』『築港事務所』の三者があって、3地点にわたっていたのではないかと思われる。当時、築港事務所は「神社山」の西側にあったということなので、この時の調査は「神社山」の東・西両側でおこなわれたことを知ることができる⁴²。

もうひとつの調査は、筆者もそれに参加した東京大学考古学研究室によるものであって、1959年の7月と9・10月の2回にわたって実施されている。この発掘調査は、「神社山」の東側、砂浜のやや奥の海拔8m程の高みに、当時唯一の旅館であり、われわれが御世話戴いたウトロ館の北に接する地点についておこなわれた。当時の筆者の記憶によると、「神社山」の西には、その東側にあるような砂浜の高まりはなく、なだらかに海にむかって落ちており、そこまで遺跡が広がっているとはおよそ考えられないような状況であった。さきにいう1948~1951年の調査当時の想定される状況と考えあわせると、それ以降、1959年までの間に「神社山」の西側でかなりの地形変更がおこな

41) 前註3引用の文献の記載による。

ただし、知床博物館所蔵の資料にみられる註記によると、『23、8、5』と記された例があり、あるいは、1948年にも発掘調査がおこなわれていたのではないかと疑われる。

42) 金盛典夫氏の御教示による。

なお、当時調査に参加された高桑華夷治氏も、筆者に「神社山」の西側でも調査をおこなったことを証言されている。

われていたのではないかと推定される。

結局、ウトロでは、かつて「神社山」の西側にも、現在その東側にみられるのと同様な砂浜の高まりが続いており、ウトロ遺跡は、北海道教育庁遺跡台帳に示されるように、「神社山」の東側だけでなく、その西側にまで拡がっていたものと考えてよいのであろう。つまり、ウトロ遺跡は、あまり深くはないが湾入部の奥の、背後に海岸段丘の段丘崖を負う奥行 200m 弱の砂浜の高まりの上に、「神社山」をはさんで東西に幅 300m 程の範囲に、あったものと考えられることになる。

上に述べてきた大きくわけて二度の発掘調査で明らかにされたことは、オホーツク文化にかかわる部分では、刻文系の土器を伴う墳墓（おそらく複数の）があった⁴³ことであり、また一方で、藤本氏のいわゆる『オホーツク土器c群』を伴う竪穴住居址が確認された⁴⁴ことである。

遺憾ながら、1948～1951年の河野氏らの調査については、これまで、その詳細は公表されておらず、その内容は不明の点が多すぎる。しかし、おそらく当時の資料の一部が、現在、知床博物館に所蔵されているので、それらをここに図示しておくことにしよう（第9～11図）⁴⁵。これらの資料、特に第9図・第10図に示した土器群をみると、そこでは、さきにみた知床岬遺跡の場合とは明らかなちがいがあ、すなわち、知床岬遺跡で少数であった刻文系の土器群が、本遺跡で発見された土器群の場合、むしろ多数を占めていることが注意される。貼付文をもつ土器もないわけではないが、それらは比較的少数でしかない。僅かな資料であるが、第9図・第10図の場合では、底部を除いて、資料の70%以上が刻文系の土器群によって占められているのである。知床岬遺跡について、筆者は、刻文系の土器群が貼付文土器群とは時期を異にして・それに先立って残されたものと考えたが、も

しそれが正しかったとすると、本遺跡は、知床岬遺跡とは時期を異にして、主として刻文系の土器群の製作・使用者達によって残されたものと考えることができるのかもしれない。そして、そうであるとすれば、従来、刻文系の土器群の製作・使用者達によってこうした地形の場所に集落が作られた事例は知られていない⁴⁶ので、本遺跡は、そのキャンプサイトだった蓋然性が大きいことになろう。もっとも、それがどこにあったかは遺憾ながら明らかではないが、河野氏らの発掘区が、本遺跡におけるそのグループのキャンプサイトの主要な部分に当たっていたかどうかには、問題がある。河野氏は『オホーツク式土器人の墳墓』が『ウトロ市街地神社附近に群在している』と書かれている⁴⁷ので、氏らの発掘区は、むしろその墓域に当たっていたのかもしれない。実際、氏らの蒐集された資料の中には、墳墓の副葬品かと思われる例が少なくない⁴⁸のである。

すでにみたように、1959年の東京大学考古学研究室の発掘調査では、藤本氏のいわゆる『オホーツク土器c群』を伴う竪穴住居址が確認されている。しかし、この調査の発掘区内では、竪穴住居址に伴うものとされた例を除くと、オホーツク式土器の出土例は決して多数ではない。つまり、この調査の発掘区もまた、刻文系の土器群の製作・使用者のキャンプサイトの主要部には当たってなかったものと考えざるをえないことになる。

この調査に関してもうひとつ注意すべきことは、ここで確認された竪穴住居址が、単独であったのか、あるいはいくつか群在していたもののうちのひとつがたまたま確認されたのかという問題である。この調査では、まず東西10m・南北4mのトレンチが開けられ、この西端にオホーツク文化にかかる竪穴住居址がかかったために、想定されるその拡がりにもあうように、西および南北に発掘区を拡張している。したがって、西および南北には発掘区はほぼ竪穴住居址の範囲にとどまるが、竪穴住居址から東には、さらに8m程の拡がりがあり、ここにはオホーツク文化にかかる竪穴住居址がないことが確認されていることになる。つま

43) 前註2文献、および同3引用の文献。

44) 前註1引用の駒井氏編文献、および同34文献。

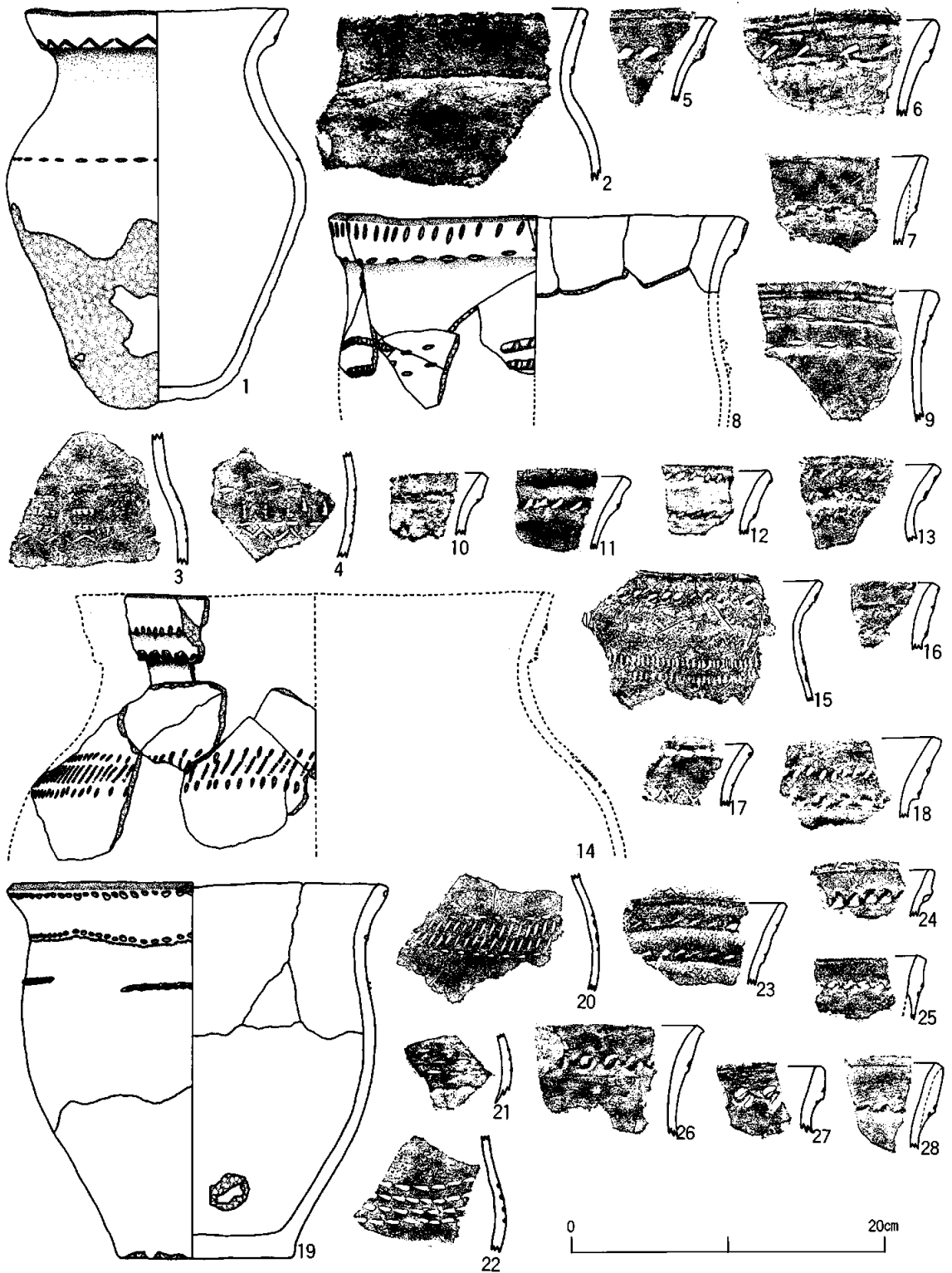
45) 資料の利用を許可された知床博物館に御礼申上げる。
なお、知床博物館所蔵の資料のうち、前註3文献の第97図・第98図1に示されている例は、再掲しなかった。

また、第9図1・19に示した2点の完形の土器は、旧ウトロ館の大丸いそ氏から筆者を介して知床博物館に寄贈された資料であり、旧ウトロ館の付近から発見されたものであるという。

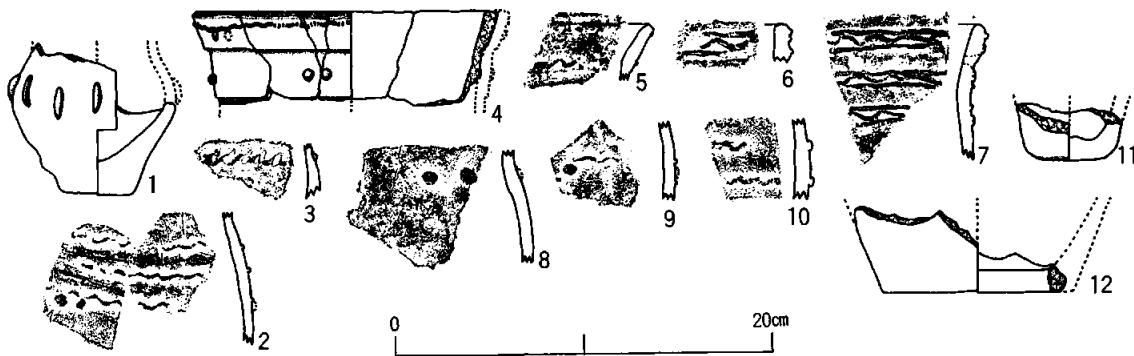
46) 前註7引用の文献および同22文献参照。

47) 前註2文献31頁。

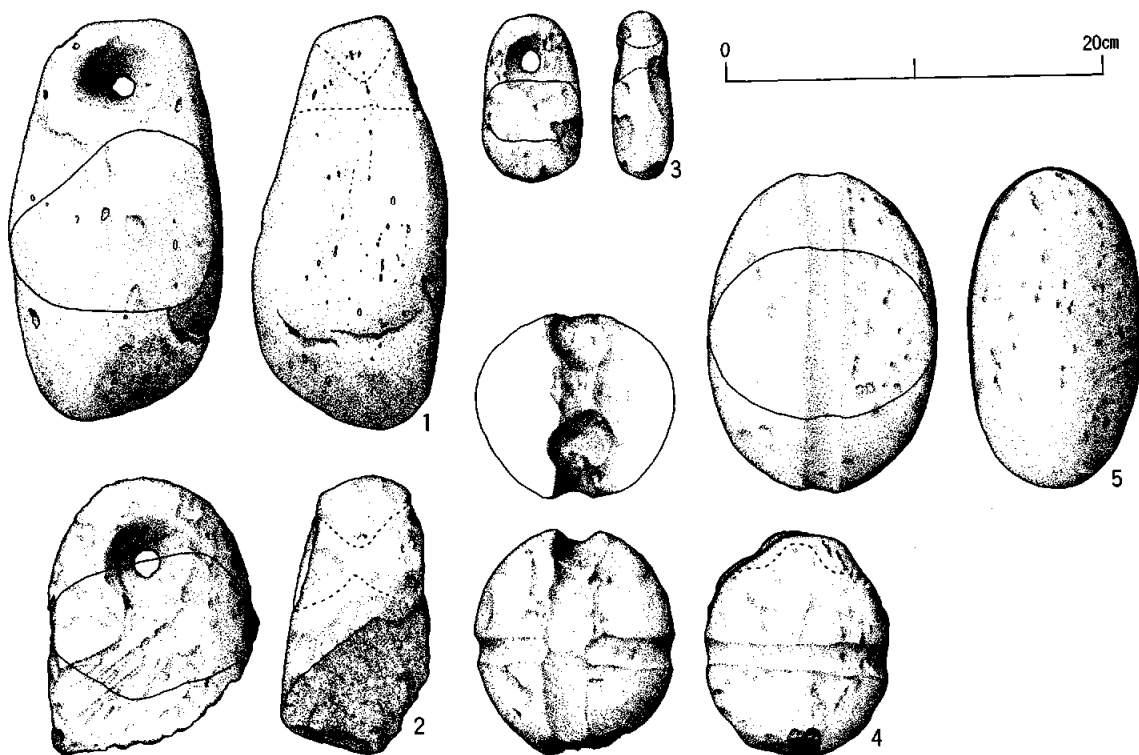
48) 前註3引用の文献の「VI 付編」を参照。



第9図 ウトロ遺跡出土のオホーツク式土器〔1〕



第10図 ウトロ遺跡出土のオホーツク式土器〔2〕



第11図 ウトロ遺跡出土の石錘

り、この発掘区のかぎりでは、竪穴住居址が単独であったのかどうか、確認できないわけである。しかし、ウトロに永く住んでおられた方々のお話によれば、この付近には、かつていくつかの竪穴が地表面から確認しうる形で残っていたという⁴⁹。筆者も、その後、やはり調査のために滞在した折に、完形の典型的な貼付文土器の出土地点として

現国道の南・より崖寄りの場所を教えられ、そこに、すでに大部分埋められて不明瞭ではあったが、竪穴らしい凹みがあったこと、その時に、貼付文土器を伴う竪穴住居址があるのだらうと考えたことを記憶している。これらによって考えれば、1959年度の調査によって確認された竪穴住居址は、おそらく単独にあったのではなく、群在する竪穴住居址のひとつがたまたま発掘区にかかったのだと判断してよさそうである。それも、それらの竪

49) 金盛典夫氏の御教示による。

穴住居址群は、藤本氏のいわゆる『オホーツクc群』以降、おそらく、貼付文土器群の製作・使用者によって残されたものと考えられることができるのではあるまいか。

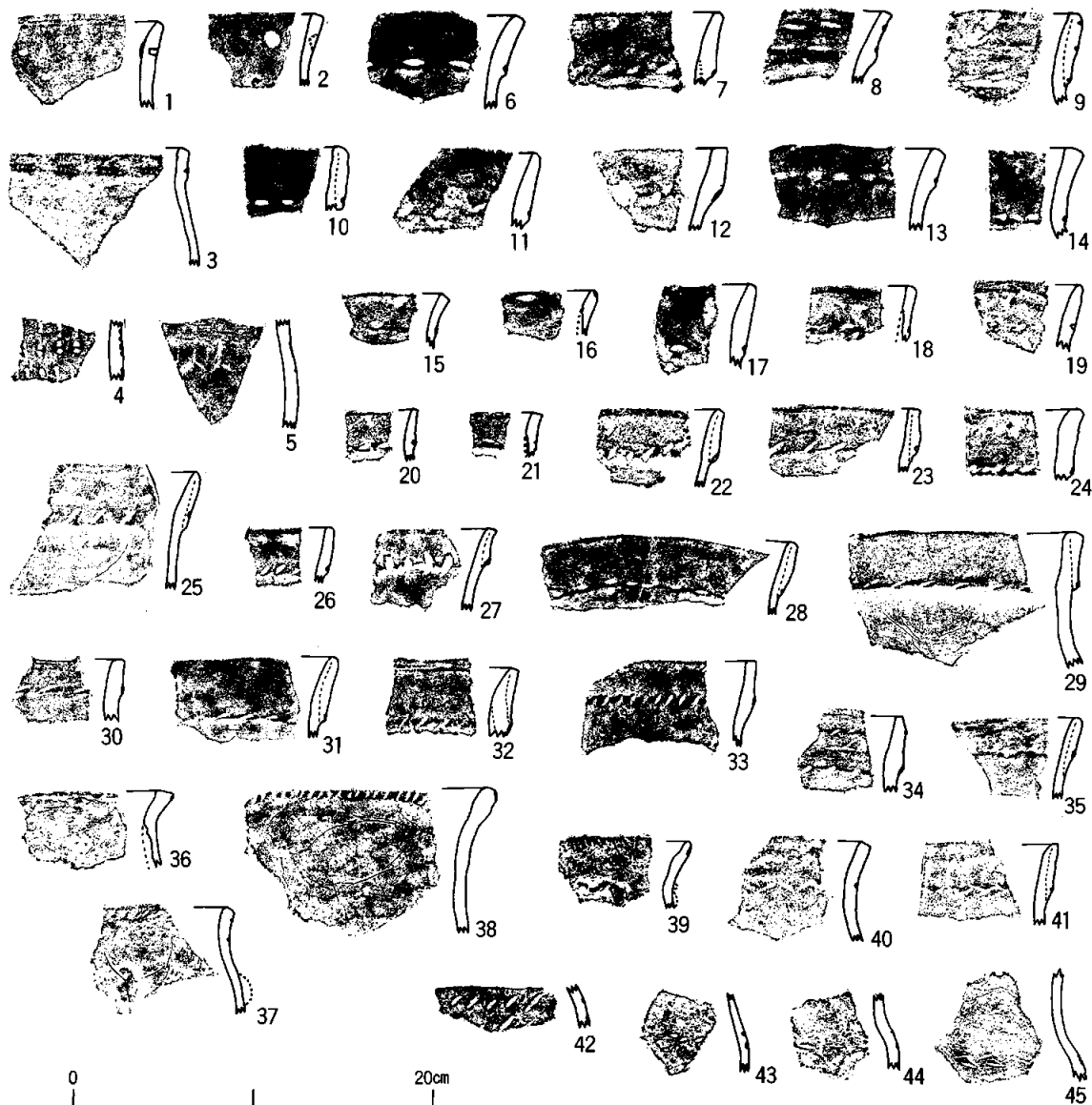
結局、オホーツク文化の荷負者に関していえば、ウトロ遺跡は、これまでに知られるところから考えて、まず刻文系の土器群の製作・使用者達のキャンプサイト（あるいは後に述べるようにチャシコツ岬下A遺跡・チャシコツ岬下B遺跡にかかる

墓域？）としてあり、後に貼付文土器群の製作・使用者達によって集落として利用されたものと判断してよいのであろう。

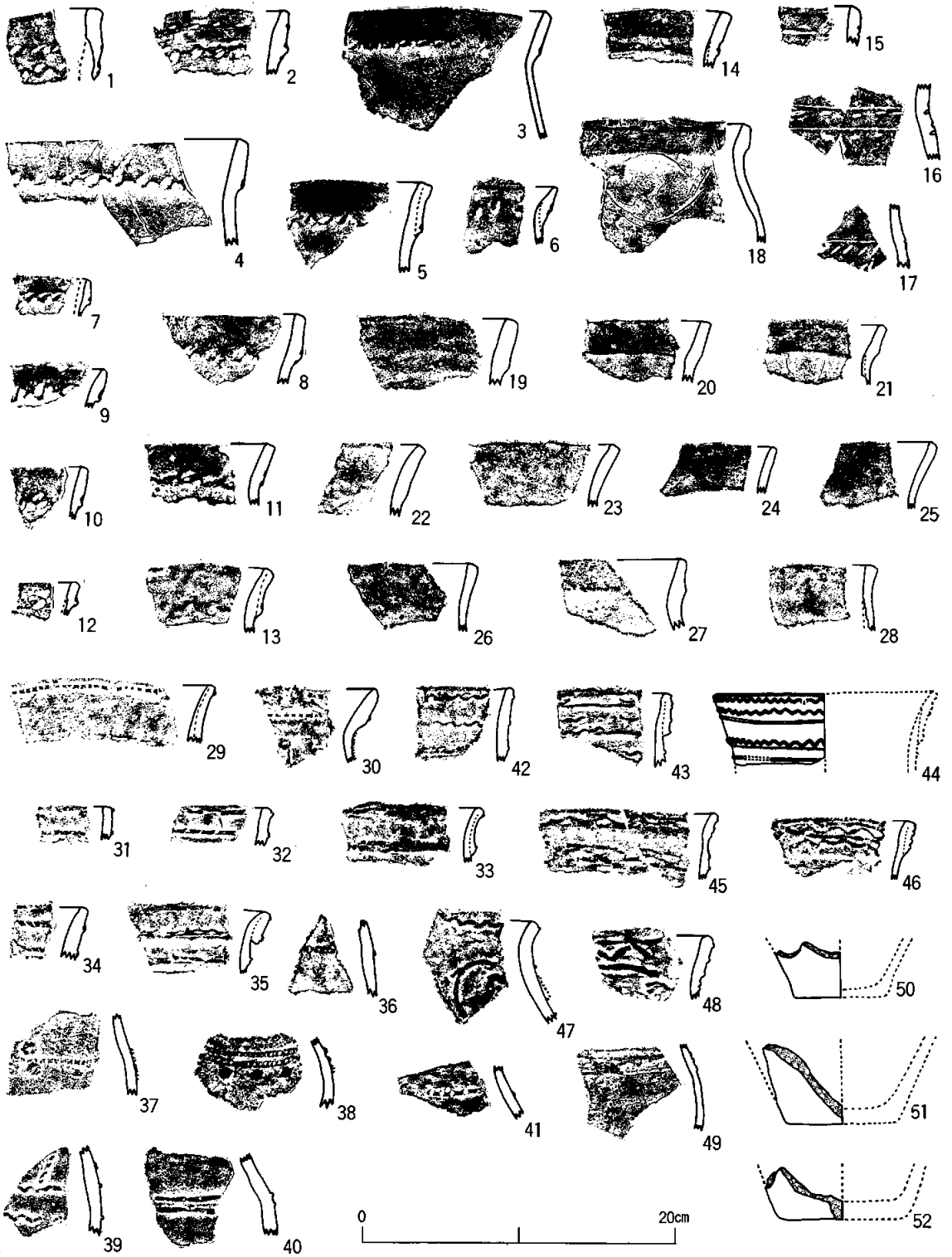
4. チャシコツ岬下A遺跡

チャシコツ岬下A遺跡はチャシコツ岬の基部東側に位置している（付図3）⁵⁰。なお、同図には

50) 付図3は北海道大学北方文化研究施設の1977年度の測量調査によるものである。なお、この図には、一部、斜



第12図 チャシコツ岬下A遺跡出土のオホーツク式土器〔1〕



第13図 チャシコツ岬下A遺跡出土のオホーツク式土器〔2〕

北海道教育庁遺跡台帳に示される遺跡の範囲を破線で、また筆者らが測量調査に際して遺物を採集しえた範囲をスクリーン・トーンによって示した。

1948～1951年の調査当時、河野氏は、次項に述べるチャシコツ岬上遺跡をも踏査・試掘しておられるようになって、チャシコツ岬へ登るためには、当然、この地点を通っていた筈であると思われる。それにもかかわらず、河野氏が「斜里町史先史時代史」のうちでこの遺跡に全くふれるところがないのは、やや理解に苦しむ。あるいは、この付近には、当時、なお全く人家等がなく、遺物を表面採集できなかったために、また後にいうように表面から確認しうる堅穴等もなかったために、遺跡の存在に気付かれなかったのであろうか。

遺跡は、チャシコツ岬に登る急斜面を負う、幅70m程の砂浜に残されている。遺跡付近には、現在、人家が立ちならび、一部耕作されているところもあって、地表面で遺物を採集できる。ただし、遺物を採集できる範囲は、北海道教育庁遺跡台帳に示されるところよりはるかにかぎられている。なお、現在この付近では堅穴は確認できず、かつて堅穴があったという記録・証言もまたない。

われわれがこの遺跡で採集した遺物は、けっして多数ではないが、そのほとんどが刻文系の土器であった。さいわい、この遺跡についても大丸いそ氏の採集・保管されていた土器があるので、われわれの採集資料とあわせて、図示しておくことにしよう(第12・13図)⁵¹。

図にも明らかなように、これまで本遺跡で発見されている土器では、第12図1に示す斜里町で発見されている唯一の例である円形刺突文をもつ例を含めて、刻文系の土器群がその80%近くを占め、貼付文をもつ土器は、各種の例を含めて、20%強を占めるにすぎない。こうした本遺跡の土器群のあり方と、さきにみたように、本遺跡で堅穴が知られていないという事実を重ねあわせてみると、本遺跡もまた、刻文系の土器群の製作・使用者のキャンプサイトだったのではないかという想定が浮んでくる。たしかに、本遺跡でも貼付文系の土

器が発見されているが、堅穴が知られていないことから考えて、そのグループの集落は、本遺跡では遂に作られることがなかったのであろう。

5. チャシコツ岬上遺跡

チャシコツ岬は、付図3に明らかなように、その海に面する部分で、全く近寄り難い絶壁に取囲まれている。これに接する部分でも、東側もまた西側も、海浜からの高度差40m以上におよぶ・斜度40度を超える、急斜面に取囲まれているのである。その基部は、やはり両側を急斜面にはさまれた、細い尾根に連なっている。こうした断崖・急斜面に囲まれた頂部には、海拔49mから55mをはかる、東西100m強・南北に100m弱のほぼ三角形を呈する、平坦部がある。現在この平坦部には、半分崩落した1号堅穴・やや疑問の残る23号堅穴を含めて、30個の堅穴が残されている。なお、河野氏の「斜里町史先史時代史」には、「チャシコツ岬の海中に突出した部分の稜線を」『一条の空濠によって仕切って』『柴として利用したチャシコツがある』『現在もはっきりした空濠を認めることができる』と記載されている⁵²。チャシコツ岬の呼称は、おそらくこれに由来するのであろう。しかし、現状では、河野氏のいわれる『空濠』は、遺憾ながら、確認できない。平坦部から背後につながる細い尾根の最低部は、現在国道の切通になっている部分であって、海拔34m程であるが、多分、まさに国道によって切通されてしまった尾根の最低部に『空濠』が作られていたのではないかと思われる。

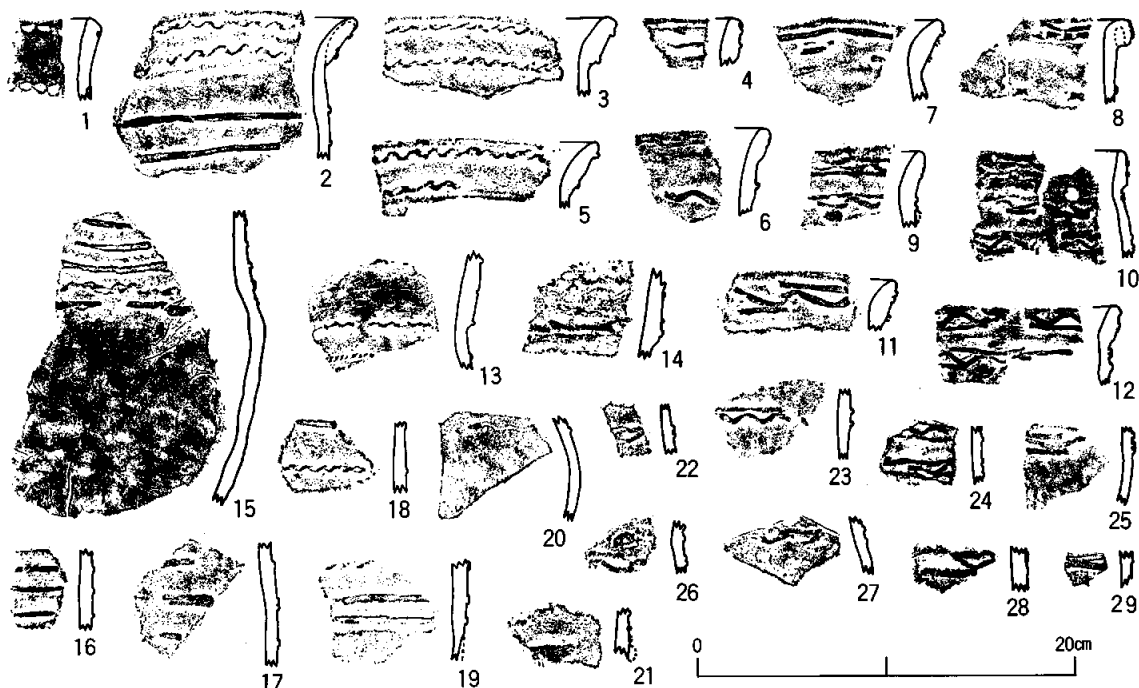
さて、前述の平坦部にある堅穴は、いずれもほぼ方形に近いプランをもっているが、明らかに、大きくかつ深いものと小さくかつ浅いものの別がありそうである。大きく・深いものは、径10m前後をはかり、その多くが1mないしそれを超える深さをもっている。それらのうちには、例えば8号・14号など、五角形ないし六角形に近いプランをもつものが含まれる。一方、小さく・浅いものは、径6m前後、深さも数十cmにとどまる。両者の配置には明らかな規則性は認められないが、いずれかといえば、北側・海寄りに小さく・浅いものが多いようである。

河野氏自身は「斜里町史先史時代史」中には明

里町役場による「ウトロ市街図」の成果を利用している。巻末添付。

51) 大丸いそ氏によって採集・保管されていた資料は、現在、氏から筆者を介して知床博物館に寄贈されており、同館に保管されている。

52) 前註2文献14・34頁。



第14図 チャシコツ岬上遺跡出土のオホーツク式土器

記しておられないが、1948～1951年の一連の斜里町管内の遺跡の調査に際して、本遺跡の竪穴のいくつかについて試掘をおこなわれたようである⁵³。この試掘の際の資料かと思われるものが、現在、知床博物館に所蔵されているので、われわれの僅かな表面採集資料とともに、図示しておくことにする(第14図)⁵⁴。この図にも明らかなように、本遺跡でこれまでに発見されている土器群は、そのほとんどが貼付文系の土器によってなるようであ

る。そこには、同図1に見るように、刻文をもつ土器も発見されていないわけではないが、これもトコロチャシ遺跡1号外側竪穴の事例⁵⁵などを考慮すれば、貼付文土器群に伴件するものと考えて支障ないように思われる。結局、本遺跡は、貼付文土器群の製作・使用者によって、竪穴住居を作る集落として、利用されていたものと考えてよいのであろう。

ただ、ここで注意を惹かれるのは、さきにもふれたように、本遺跡の竪穴群のうちに、大きく・深いものと小さく・浅いものの両者が含まれていることである。いわゆる『トピニタイ文化』にかかる竪穴住居址が、オホーツク文化のそれと比較して、一般に小形であることは、すでに注意されているところである⁵⁶。あるいは、本遺跡における小さく・浅い竪穴は、いわゆる『トピニタイ文化』にかかる竪穴住居址だったのではないだろうか。そうした眼で見ると、第14図16～19・28・29などの断面四角形になる貼付文をもつ例は、いわゆる「接触様式」「融合型式」あるいは「トピニタイ土器群」などと呼びならわされてきた土器群

53) 前註3引用の文献参照。

なお、同文献167頁の宇田川氏の『解説』の中に引用された『佐藤達夫氏による発掘調査日誌』には「2. チャシコツ上竪穴中央部ボーリング、細工用? 凹石1」とのみ記載されており、試掘された竪穴の位置・数については記載がない。一方、同文献191頁の『解説』には、いずれの材料によられたものか明らかでないが、『岬先端部付近(A号)と丘頂部(B号)の2個の竪穴住居址を試掘したい』と書かれている。つまり、本文にいう30個の竪穴の中のいくつか、あるいはそのどれとどれとが、試掘されたのかは、これらの記載からは遺憾ながら確認できない。

54) 資料の利用を許可された知床博物館に御礼申上げる。

なお、第14図の8・11に示した資料は、前註3文献の第80図4・3に示されたものと同様の資料であろう。ついでに、同図5・6の資料は博物館所蔵の資料中には見当らなかった。

55) 前註1引用の駒井氏編文献。

56) 前註1引用の駒井氏編文献165頁。

に多いように思われる⁵⁷。調査の現状ではなお断定的にはいえないが、もしこうした想定が当たっていたとすれば、本遺跡は、まず貼付文土器群の製作・使用者、つまり『道東型のオホーツク文化』の荷負者によって集落として利用され、さらに引続いて、いわゆる『トビニタイ文化』の荷負者によっても集落として利用されていたものと考えることができそうである。

6. チャシコツ岬下B遺跡

チャシコツ岬下B遺跡はチャシコツ岬の基部西側に位置している。付図3には北海道教育庁遺跡台帳に示される遺跡の範囲を破線によって示した。

本遺跡は、付図3にも明らかなように、前述のチャシコツ岬下A遺跡と、直線距離にすれば100m程しか離れていない。しかし、チャシコツ岬上遺跡から背後につながる稜線を隔てて、両者・チャシコツ岬下A遺跡とチャシコツ岬下B遺跡は、明らかに別々の遺跡であると考えなければならないであろう。両者は、チャシコツ岬をはさんで対称的な位置にあり、地形的にもきわめてよく似た条件のところにある。すなわち、本遺跡もまた、背後にチャシコツ岬につらなる稜線の急斜面を負う、奥行80m程の砂浜の奥の、海拔10m程の僅かな平坦地に残されていたようである。しかし、現状では、前記チャシコツ岬の切通にむかってゆるく登る国道の路盤の土盛りのために、遺跡はほとんど昔日の面影をとどめていない。河野広道氏によると、本遺跡には『10数個の大形堅穴群が』あったと書かれている⁵⁸が、現状では、そういわれればそれかもしれないと考えられないわけではない不明瞭な凹所が1、2みられるだけであって、それがかつての堅穴の跡だと断ずることはとても

できそうもない。この付近では、現在、遺物も全く採集できないので、結局、この地点を遺跡として確認することは、少なくとも現状では、できないことになる。しかし、以下に述べるように、いくつかの問題が残ってはいるが、河野氏の記載から考えて、ここにオホーツク文化にかかる遺跡があったことは、疑いを容れないところであろう。おそらく、現国道の路盤の盛土の下およびその周辺には、なお包含層・遺構が残されているものと思われる。

河野氏は1949年に本遺跡の堅穴のひとつ『ウトロチャシコツ下堅穴第一号』を発掘調査されておられるが、その結果について、別の個所で『この堅穴の南半部には七層の床面が認められた』『このことは、この堅穴住居趾が少くとも時を異にして七回住居として利用されたものであることを物語っている』『オホーツク式土器期に属するものは第二層から第六層までの五層からなっているが、その各層がそれぞれ住居趾の床面であったことは、各層の床面に粘土を敷いてあるので判然と識別することができる』『堅穴の大きさは長形11.2米、短径11米のほぼ円形であるが、これは第二層住居趾の輪郭に相当する』と書かれ、また『この堅穴の中央部には、長径(東西)2米51厘(内径2米)、短径(南北)91厘(内径68厘)の東西に細長い長方形の炉があり、その周囲は石で囲ってあ』ったことまた『堅穴の北壁に沿って』『大形の石で囲った竈(竈?……筆者註)が存在し』たことをも述べておられる⁵⁹。河野氏は、さらに引続いて、各層出土の土器群について、やや詳細な記載をされている。別記されているオホーツク式土器についての解説⁶⁰をも参照すると、ほぼ、その調査の概要をうかがうことができそうである。しかし、そこでは、住居址の輪郭がほぼ円形であると記されていること、長さ2.5mにもおよぶ長大な石囲炉があったとされていること、壁沿いに(造りつけの?)竈があったとされていることなど、現在のわれわれの知見からは、やや疑問とせざるをえない記述がないわけではない。遺憾ながら、付図として簡単な『堅穴住居趾断面図』が示されているのみであって、遺構の詳細は明らかではなく、上の疑問

57) あらためていうまでもないが、これらの資料だけから、本遺跡がいわゆる『トビニタイ文化』の荷負者によっても利用されていたと断言するわけにはゆかない。現状では、オホーツク式土器の中にこうした要素がなかったと断ずることは、なおできないからである。さきに本文中にいったように『刻文系の土器群と貼付文土器群との間の型式論的変遷の実態は、これまでのところ、必ずしも十分に明らかにされているとはいえない』のと同様に、貼付文土器群と「接触様式」「融合型式」あるいは「トビニタイ土器群」と呼びならわされている土器群との間の型式論的変遷の実態もまた、充分明らかにされているとはいえないのである。さらに今後の研究に俟ちたい。

58) 前註2文献34頁。

59) 前註2文献20～22頁。

60) 前註2文献57～60頁。

は、長く疑問のままに残っていたのである。

さいわい、最近になって、宇田川洋氏の編輯によって、河野氏の調査ノートが公刊され⁶¹、やや詳細に当時の調査結果を検討することができるようになった。以下、これを加えて、1949年度の河野氏らの調査結果について、もう一度考えておくことにしよう。

もっとも『河野広道ノート』によっても、上にいう疑問のすべてが氷解するわけでは必ずしもない。たとえば、竪穴住居址の輪郭がほぼ円形であったという記載は、平面図がなく、断面図も部分的なものが示されているのみなので、そう判断されるにいたった根拠・理由がどこにあったのか、遺憾ながら確認することができないのである。いったい、ほぼ円形になるという竪穴住居址の輪郭は、何によって捉えられたのであろうか。竪穴壁の立上りによってなのか、あるいは、粘土床（ないしはいずれかの形で確認する床面）がそこまで広がっていたことによるのであろうか。いずれにせよ、すでに述べたように、現在の知見からみれば、オホーツク文化にかかる円形の竪穴住居址の存在はおおよそ考え難いので、これがなんらかの誤認の結果であることはほぼ承認されてよいであろう⁶²。しかし、竪穴住居址が径11米におよぶ大形のものであったという記載は、現今の知見に一

致し⁶³、ここにオホーツク文化にかかる竪穴住居址があったことは確かなのかもしれない⁶⁴。

上に述べたように、本遺跡にオホーツク文化にかかる竪穴住居址があったことを想定するとしても、河野氏が記載されたように「この竪穴住居址が少くとも時を異にして七回住居として使用されたもの」であったかどうかは、さらに検討してみなければならない問題であろう。

こうした問題に関係して、『河野広道ノート』に示された『ウトロチャシコツ下1号竪穴の断面図』⁶⁵には、疑問とすべき点が少なくない。この『断面図』は、層厚・遺構の大きさなどが数字で書きこまれているので、実測図というよりむしろ概念図と考えたほうがよいと思われるが、それを差引いて考えてもなお、この図から、河野氏が述べられるように「この竪穴住居址が少くとも時を異にして七回住居として使用されたものである」という結論を導くことは、おそらく困難であろうと思われる。河野氏の記載にしたがえば、この竪穴は、オホーツク文化の荷負者によって、第二層から第六層まで、五回にわたって住居として使われた、つまり、ふたたび河野氏の言葉を借りていえば『北海道におけるオホーツク式土器の最も古い形式』⁶⁶の時期から『変化に富んだソーメン状貼附紋を主と』する土器群によって示される時期

61) 前註3引用の文献。

62) オホーツク文化にかかる竪穴住居址の様相をはじめ明らかにしたモヨロ貝塚の発掘調査は、この調査に先立つ1947・1948両年度におこなわれている。すなわち、それが六角形プランを呈し、中央部に石囲炉を、そしてその周辺に粘土床をもつ、やや特異なものであることは、すでに知られていたのである。前註37引用の駒井氏他文献によれば、10号竪穴が発掘されたモヨロ貝塚の1948年度の調査には、河野広道・佐藤達夫両氏も参加していたのであって（もっとも、河野氏が実際どれだけこの調査に参画されたか、全く疑問がないわけではないが）両氏らがそれを知られなかったとは考え難い。まして、モヨロ貝塚の調査結果は、すでに1948年に児玉作左衛門氏および名取武光氏によって下記の文献中に紹介されており、それはいわば周知のことだった筈である。それにもかかわらず、『斜里町史先史時代史』中にこうした記載がおこなわれたことは、むしろ、大変奇妙なことに思われる。

児玉作左衛門『モヨロ貝塚』北海道原始文化研究会、1948。

名取武光『モヨロ遺跡と考古学』札幌講談社、1948。

63) たとえば、下記文献等を参照されたい。

大井晴男『オホーツク文化の竪穴住居址——環オホーツク海海洋漁撈・狩猟民文化の成立過程についての一仮説——』『三上次男博士頌寿記念東洋史・考古学論集』三上次男博士頌寿記念論集編集委員会、1979。

64) 筆者は、かつて前註22論文の註45)に「本遺跡に竪穴住居址が作られていたかどうか疑問である」と書いたが、あるいは早計であったかもしれないと考えている。以下、本文に述べるところを、現時点での筆者の見解と御理解戴きたい。なお、この問題については、金盛典夫氏の御注意を戴いた。明記して御礼申上げる。

65) 前註3引用の文献158頁、第60図下右。

66) これは、河野氏のいわれる第六層の土器群を指しているものと思われるが、現在の知見からみれば、必ずしもそのとおりではない。北海道北部には、より古い時期からオホーツク文化が盛行していたことがすでに明らかにされている。

下記文献等を参照されたい。

大場利夫・大井晴男編『オホーツク文化の研究3、香深井遺跡 下』東京大学出版会、1981（特にその第2章第5節III）。

まで、多分、数百年にわたって⁶⁷⁾、それぞれ中断をはさみながら、繰返し住居として使われたことになろう。それらの中断が時間的にある程度以上長かった場合、放棄されていた堅穴内には何程かの土層が堆積した筈であって、こうした状態にある放棄された堅穴に新しく堅穴住居が作られる場合、一般には、香深井A遺跡1号d～a堅穴の場合⁶⁸⁾にみるように、こうした堆積層の上に（場合によっては一部これを削って）作られるようである。中断が時間的に短かった場合には、トコロチャシ1号外側堅穴の場合⁶⁹⁾のように全面にわたって前の床面を利用する場合と、オンネモト遺跡II号堅穴の場合⁷⁰⁾のように全面に貼床して新しい住居を作る場合とがあるらしい。これらの事例から考えると、問題の『断面図』は、はなはだ理解し難いものになってしまいそうである。すなわち、この堅穴の『断面図』の西寄りの部分には各床面の間に10～20cmの間層がはさまれているにもかかわらず、堅穴中央部近くでは、それらは同一の床面に収斂してしまっているのである。こうした断面の状況を、河野氏がいわれるように『この部分の床面は、第三層以下第六層まで同じ高さになっている』と理解するのはおそらく困難であって、強いて考えるとすれば、より新しい住居が、古い住居の中央部のみをその粘土床まで削り、周辺部では（埋土をそのままに）新しく粘土を敷いて、作られたと考えられねばならないことになろうか。これまでのところ、そうした類例は全く知られていないので、むしろこの『断面図』は、第二層の床面が、あるいは後に述べるように第三層の床面もまた、第四～六層を切って、作られていたものと考えたほうがよさそうに思われる。そう考える

場合、第四～六層床面に関しては堅穴の壁の立上りは確認されていないので、第四～六層の粘土貼りは、堅穴住居に関わるものではなかった可能性がありそうである⁷¹⁾。実際、『断面図』によると、第四・五層の拵りは、第三層床面にまで達していないようであって、上の想定を裏付けるひとつの材料になるかもしれない。

同様に、長さ2mを超える石囲炉⁷²⁾もまた、そうした類例は知られておらず、問題を残しているようである。まして、河野氏の述べられるように、『炉の西半部の外周の石は第三層の床面に接しておかれ』『これに対して炉の東半部の外周の石は第三層床面より14cm高く浮んで』いたとすれば、疑問はさらに大きくなる。実際は、これはひとつの長大な石囲炉ではなかった、つまり、河野氏がそう理解されたように『東半部は第二層の住人によって拵られた部分』だったのではなく、ふたつの石囲炉がたまたまこうした位置に相接して残されていたのではあるまいか。すなわち、その西半部は第三層床面に伴う、一方、その東半部は第二層床面に伴う、それぞれ別々の石囲炉だったと考えるわけである。そう考える場合、東半部の石囲炉に続く西側には、本来、西半部の・第三層床面に伴う石囲炉を覆って、第二層の床面がさらに拵がっていたことを想定することになる。発掘調査の時点で、この部分の第二層床面がうまく確認できなかったために、あるいは、それが攪乱等によってすでに失われていたために、第三層床面に伴う石囲炉が露出され、それがたまたま第二層床面に伴うそれとつながりそうな位置にあったために、一連の長大な石囲炉として捉えられることになったのではあるまいか。さきにいう『断面図』の西半部の石囲炉の部分、およびそれに続くより西側の部分で、第二層の床面が不自然に凹部になっているのは、あるいはこうした理由によるものではないかと考えている。

さらにもうひとつの疑問点である壁沿いの（造りつけの？）竈については、『河野広道ノート』

67) 河野氏は、前註2文献の中で、北海道のオホーツク文化の時間的位置を『奈良朝頃』から『鎌倉期もしくは鎌倉期を距ること遠からざる頃』までと書いておられる。つまり、河野氏は、本遺跡のこの堅穴が、ほぼそうした時間的範囲のうちで、時期を異にして、繰返し使用されていたことを想定されたことになろう。筆者は、その初頭の時期においてもう少し新しかったのではないかと考えるが、いずれにしても、その存続期間が数百年におよんだことは想定されてよいと思われる。

68) 前註25引用の文献。

69) 前註1引用の駒井氏編文献。

70) 国分直一他『オンネモト遺跡』東京教育大学文学部、1974。

71) 堅穴住居に関わるものではない粘土貼りは、たとえばオンコロマナイ貝塚等にその類例が知られている。

下記の報告書を参照されたい。

大場利夫・大井晴男編『オホーツク文化の研究1、オンコロマナイ貝塚』東京大学出版会、1973。

72) 前註3引用の文献158頁、第60図下左。

所収の図によってみると⁷³、それが擦文文化にかかる竪穴住居址に一般にみられる竈とは別のものであることが明らかである。それが「壁に沿うて」であったという記載も、『第六層床面』に続く壁の立上りが確認されているわけではない以上、その保証はないといわざるをえない。むしろ、前述の図によってみるかぎり、この遺構は、オンコロマナイ貝塚および香深井A遺跡で、筆者らが「炭・礫のつまったピット」という呼称で報告した例に類似するものように思われる⁷⁴。注意すべきことは、香深井A遺跡におけるこれらの類例が、1号d竪穴の竪穴外遺構に伴った事例を除いて、竪穴住居址とは無関係な形で認められていることである。上にいう香深井A遺跡1号d竪穴に関して確認された事例にしても、いわば特例であり、しかも竪穴外にある。つまり、これらの類例は、原則として、竪穴住居址に伴う遺構だったとは考え難いといわざるをえないのである⁷⁵。そして、そ

73) 前註3引用の文献158頁、第60図上。

ただし、この図には「西壁、爐、平面図」という註記が付されており、河野氏による記載と一致しない点がある。しかし、『壁に沿うて』あること、『第六層竪穴住民によって築かれたと思われる』こと、『大形の石で囲』ていること、『深さ50cmに達する焼砂の層が見られる』ことなどの諸点で記載と一致するので、この図が河野氏のいわゆる「窯」であると考えて誤りないであろう。

74) 前註25・同66・同71引用の各文献参照。

なお、オンコロマナイ貝塚・香深井A遺跡におけるこれらの遺構は、径40～80cmの規模のものであり、本遺跡の例が長径112cm・短径100cmとされているのと比較すると、その規模において、やや差がある。その点では、なお未報告であるが、やはり筆者らが調査した稚内市抜海砂丘遺跡・声間貝塚・猿払町浜猿払遺跡等で検出されている事例の方が、もっとよく似ているといえるようである。もっとも、本遺跡の例で、焼砂のつまった径52×40cm・深さ50cmに達する「穴」があり、またこれにつながっているかと思われる「孔」が図示されていたりする点では、ここでもたしかにある差がある。これらの「穴」「孔」について、その状態・性格等を確かめる術がないが、その全体の特徴からみて、これらは、抜海砂丘遺跡・声間貝塚・浜猿払遺跡等の例と、またおそらくオンコロマナイ貝塚・香深井A遺跡の事例とも、同じ意味・性格をもった、類似の遺構であると考えられてよいであろう。

75) この点では、オンコロマナイ貝塚はもちろん、前註74にあげた抜海砂丘遺跡・声間貝塚・浜猿払遺跡等の事例も、その例外ではない。これらの遺跡でも、それらはいずれも、竪穴住居址とは無関係な形で発見されているのである。

うであるとすれば、こうした遺構の存在は、そのあった位置・層準には竪穴住居址がなかったことを、すなわち、河野氏のいわゆる「第六層床面」が竪穴住居址の床面ではなかったことを、示唆するものように思われる。

こうした検討の結果は、以下のようにまとめることができようか。すなわち、河野氏によってオホーツク文化にかかる竪穴住居址の床面として記載された『第二層床面』から『第六層床面』にいたる5枚の面のうち、『第四層床面』から『第六層床面』までの3枚に関しては、いずれも竪穴住居址の床面と考えることは困難である。それらは、包含層中に残された、多かれ少なかれ限定的な、生活面（の一部）だったと考えられよう。『第六層床面』に伴うものと考えられた「窯」は、それと直接関係するかどうかはともかく、またその意味・性格等なお不明の点が多いが、竪穴住居とは関わらない、独立した遺構だったと思われる。一方、おそらく調査が不十分だったためにその詳細は明らかにされていないが、「第二層床面」および「第三層床面」は、粘土床の拡がり・それぞれに伴うものと思われる石囲炉の存在など、さらにそこに地表面から確認できる竪穴状の凹部があったらしいことをも考えあわせて、多分、それぞれ竪穴住居址の床面だったと考えてよいのであろう。

ふたたび河野氏の記載に戻って考えれば、『第二層床面』は『変化に富んだソーメン状貼附紋を主とする土器群を伴ったようであり⁷⁶、一方、『第三層床面』は『舟窩状刻紋・貼附擬繩紋・ソーメン状貼附紋の三種』によってなる土器群を伴ったという⁷⁷。この場合、特に『第三層床面』の土器群が、たしかに一群の・同時期的なものであ

76) 前註3引用の文献に宇田川氏がいわゆるように、おそらく、同文献162頁の第63図に示されるそれが「第二層床面」に伴った土器群であろうと思われる。

77) 前註3引用の文献160頁の第61図9～12には「西3層」出土の土器群が、同じく161頁の第62図6・7には「東3層」出土の土器群が図示されているが、これらが「第三層床面」に伴った土器群であろうか。しかし、たとえば、第62図6では、その器形でもまた文様でも、擦文式土器の影響を認めることができるようになって、つまり、この土器は、まさにいわゆる「接触様式」「融合型式」の土器と呼ばれてよい資料であると思われる。こうした土器が、たしかに「第三層床面」の土器群、すなわち第61図9～12などに伴ったのかどうか、疑いなきをえない。

たかどうか、確証があるわけではないが、いずれにせよ、河野氏がいわれるように、そこに『ソーマン状貼附紋』をもつものが含まれていたとすれば、それは貼付文土器群の成立以後に位置づけられる、すなわち、『第三層床面』からその存在が想定される堅穴住居址は、筆者のいう『道東型のオホーツク文化』の成立以降に本遺跡に作られ・残されたものと考えられてよいであろう。そして、それを認めるとすれば、『第二層床面』からその存在をうかがえる堅穴住居址は、層位的にもまた共伴した土器群から考えても、間違いなく『道東型のオホーツク文化』の荷負者によって残されたものとみてよいと思われる。これに対して、第六層出土の土器群の文様は『舟窩状の刻紋・櫛目様型紋・沈線紋の三種』であり、また第五・四層のそれは『舟窩状刻紋・爪形紋・太い擬縄紋の貼附紋を口縁部の外周に周らせたものの三種』⁷⁸⁾ であって、おそらく、それらは貼付文土器群成立以前に位置づけられるかと思われる。上にみたように、それらが堅穴住居址を伴っていないかと思われることは、刻文系土器群の製作・使用者が集落立地としてこうした地形の場所を選択していなかったという所見⁷⁹⁾ と矛盾しないようである。

結局、なお多くの点で疑問を残し、不明確な部分が少なくないが、これまでに知られるところから考えれば、本遺跡は、オホーツク文化の荷負者に関して、まずキャンプサイトとしてあり、ついで『道東型のオホーツク文化』の成立以後に、そのグループによって堅穴住居が作られ・集落として利用されるようになったものと考えておきたい。

7. 禪龍寺遺跡

知床岬からウトロ周辺遺跡群の位置するあたりにかけて、あるいはさらにもう少し西にまでおよんで、脊稜山脈が海にせまり、山地は多くの場所

で直接懸崖となって海に落ちていることはすでに述べた。こうした峻峻な海岸線は、しかし、日ノ出をすぎるあたりから、その相貌をあらためる。脊稜山脈は次第に海岸線から遠ざかり、峰浜・朱円から斜里市街にかけて、さらにそこから止別・浜小清水をへて網走市街にいたるまで、広い海岸平野が広がるようになる。海岸線には長大な海岸砂丘が発達し、その背後には、トーツル沼・ニクル沼・濤沸湖・藻琴湖などの湖沼を残して、沖積原が広がり、さらにその奥には、いくつかの河川によって開析された、軽石・火山灰などの火山性堆積物をのせる段丘地形があって、ようやく山地に達するのであり、その景観は、日ノ出以東のそれとは、いちじるしく異なったものになるのである。その差異は、おそらく、単なる景観のちがいにとどまらず、環境的条件においても、大きなちがいがあったものと思われる。そして、こうした差異は、オホーツク文化の荷負者達にとっても、無視できない意味をもっていたことが想定されてよいのではあるまいか。

第1図にも明らかなように、ウトロ付近の遺跡群から西には、しばらくの間、オホーツク文化にかかる遺跡は確認されていない。次にそれが確認されるのは、上述の海岸平野に入って、知床博物館および町民公園のすぐ北、斜里市街をのせる砂丘の海寄りの裾近くに位置する禪龍寺遺跡である。前記ウトロ付近の遺跡群からは、海岸線沿いに30 km強の距離にある。

現在、斜里市街の西で海に注いでいる斜里川は、かつて斜里市街をのせる砂丘の北・海側をめぐるように流れ、現川口より1 km程東寄りて海に注いでいたらしい⁸⁰⁾ が、禪龍寺遺跡は、おそらくこの旧斜里川に接して、曲流する川に張りだすように広がる砂丘裾の小平坦部に残されたようである。

78) 前註3引用の文献160頁の第61図には、『西5層』『西4層』の出土土器が図示されているが、これらのうちには『太い擬縄紋の貼附紋を口縁部の外周に周らせたもの』に相当する例は、含まれていないように思われる。たまたま図示された資料の中に含まれていなかったのか、あるいは、同図5・8のような、口縁部肥厚帯下縁に刻文・指圧式浮文を施した例を指してこう呼ばれたのか、いずれとも確認できないが、これまでのオホーツク土器のうちにそうした例を知らないで、一応、後者、同図5・8のような例を指していたものと考えておくことにする。

79) 前註22文献。

80) 下記文献の268頁、第35図の『(明治)26年』(1893年)の『市街地区劃図』には、ほぼそうした斜里川の状況をうかがうことができようである。なお、1925年(大正14年)陸地測量部発行の仮製1/50000北海道地形図の斜里図幅では、川口の位置は現在の位置に近いが、旧川道がより東・東4線近くにまで延びているのを見ることができ。また、1960年国土地理院発行1/25000地形図の斜里図幅にも、痕跡的な形で、この川道の一部が認められるようである。

斜里町史編纂委員会編『斜里町史』斜里町役場、1955。

遺跡の現状は、宅地および耕地になっており、少なくとも表面からは遺構の存在をうかがわせるような痕跡もなく、また遺物の散布も認められない。しかし、これまでの記録等からみて、ここにオホーツク文化にかかる遺跡がある(あるいは、かつてあった)ことは、おそらく確かであろうと思われる。

河野広道氏は「斜里町史先史時代史」の中で、この禅龍寺遺跡を指すものと思われる『29 競馬場西端』遺跡⁸¹に関して『包含層は三層を区別し得るが、第一層と第二層とはオホーツク式土器を、……(中略)……出土する』ことを記載しておられる⁸²。河野氏が、どんな資料によってこうした記

81) この点に関して、高桑華夷治・金盛典夫両氏の御教示にあずかった。明記して御礼申上げる。

82) この引用文に(中略)とした部分は「第三層は擦紋土器と後北C・D式を」という文章である。河野広道氏のこうした記載は、本遺跡で「オホーツク式土器」が「擦紋土器」よりも層位的に上位にある、つまり、より新しいことを述べておられるように読める。そして、それは、筆者が下記の論文「擦文文化とオホーツク文化の関係について」の中で述べたところ、つまり、この斜里町管内を含んで、道東部一帯では、オホーツク文化がより古く、遅れて・新しく擦文文化の荷負者があらわれたとする主張とは、矛盾するもののようにみえる。しかし、大きな流れとしてはそうであっても、道東部でその地域のオホーツク文化に先立つ擦文文化が全くなかったと考えるわけではないことは、同じく筆者が下記の論文「北海道東部における古式の擦文式土器について」の中に述べたとおりである。筆者はまた、こうした河野氏の記載について、かつて、下記の論文「礼文島元地遺跡のオホーツク式土器について」の中で、追記として、「そのオホーツク式土器・擦文式土器がそれぞれどんなものであったか、全く知ることができない」ことを理由に結論を留保しながら、「氏の述べられるような層位的関係はありえないことではないと思われる」と書いたことがあるが、それもまた、こうした見とおしにもとづくものだったのである。後の第15図に示す知床博物館所蔵の資料によってみると、本遺跡出土のオホーツク式土器は、刻文系のそれと貼付文土器群の両者を含むものようである。一方、知床博物館には同じく本遺跡出土とされる擦文式土器の器形を復しうる口縁部資料が所蔵されているが、この資料は、筆者が前引の「北海道東部における……」に述べた「古式の擦文式土器」に相当するものであって、第15図に示すオホーツク式土器の型式論的位置を考えあわせれば、河野氏によって記載されたような層位的関係は、「ありえないことではない」と思われる。しかし、また一方で、1973・1974両年に本遺跡で発掘調査を実施された石附喜三男氏によると、オホーツク式土器は出土せず、続縄文式土器とともに、この地域に一般的な、つまり、

載をされたのか、現時点で確認する方法がないが、さいわい、小林良栄氏によって蒐集された本遺跡出土のオホーツク式土器若干が知床博物館に所蔵されているので、ここに図示しておくことにしよう(第15図)⁸³。

第15図に明らかなように、本遺跡出土のオホーツク式土器には、同図1~8にみられるような型押文・刻文・爪形文などをもつものと、同図9~13にみるような貼付文をもつものの両者が含まれるらしい。すでにいくつかの遺跡の土器群について述べてきたように、従来の知見からみて、これらのオホーツク式土器があげてひとつの土器群を構成すると考えることは、多分、困難であろう。つまり、これらの両者は、それぞれに異なった土器群だったのであり、おそらく、それぞれに時期を異にして、本遺跡に残されたものと考えられなければならないまい。そして、もしそう考えるとすれば、もちろん、そこでは前者・刻文系の土器群が古く、後者・貼付文系の土器群がより新しかったものと考えられるが、その両者が、本遺跡に、それぞれどのような形で残されたかが、さらに問題とされなければ

擦文文化の後半期に当てられる土器群と、それを伴う竪穴住居址2例が確認されたという。もし河野氏の記載された「擦紋土器」がこうした類のものであったとすれば、その後の知見からみて、河野氏によって記載された層位的関係は、むしろ理解し難いものになろう。そのいずれとも確定できないのは遺憾であるが、ここでは、これまでに知られる資料・データから考えて、本遺跡には、続縄文土器・古式の擦文式土器・オホーツク式土器・後半期に当てられる擦文式土器のそれぞれの製作・使用者がおそらく時期を異にして、それぞれに足跡を残したものと考えておきたい。多分、それらは位置的にも多少ともズレていたのであって、ある場所では河野氏によって記載されたような層位的関係が観察され、ある場所では石附氏の調査のような結果がえられるのであろう。

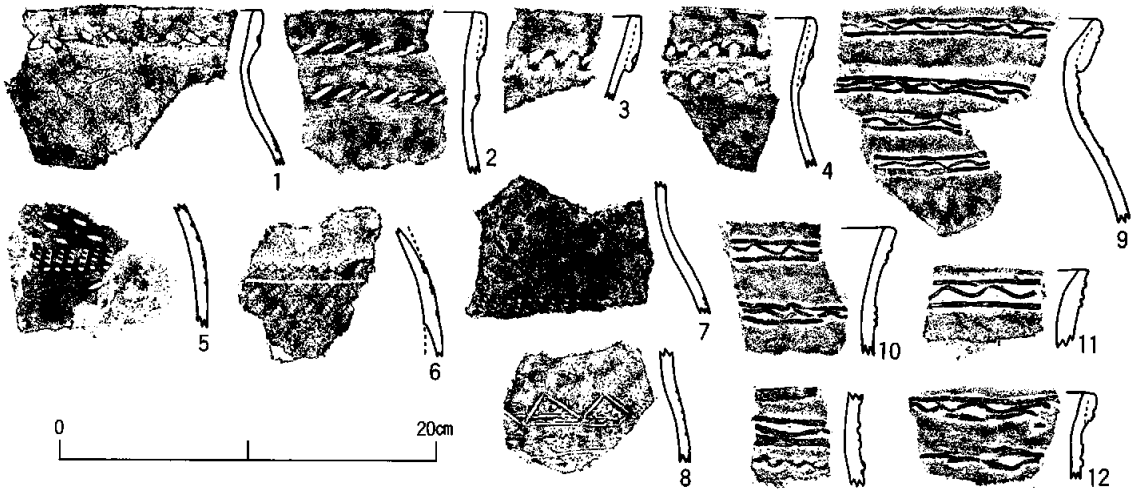
大井晴男「擦文文化とオホーツク文化の関係について」『北方文化研究』第4号、1970。

大井晴男「北海道東部における古式の擦文式土器について——擦文文化とオホーツク文化の関係について、補論1——」東京大学文学部考古学研究室編『常呂』東京大学文学部、の第7章第2節、1972。

大井晴男「礼文島元地遺跡のオホーツク式土器について——擦文文化とオホーツク文化の関係について、補論2——」『北方文化研究』第6号、1972。

なお、本遺跡の調査結果について御教示を戴いた石附喜三男氏に、衷心からの御礼を申上げる次第である。

83) 資料の利用を許可された知床博物館に御礼申上げる。



第15図 禅龍寺遺跡出土のオホーツク式土器

ばならないのであろう。もっと正確に言えば、刻文系の土器群の製作・使用者達は、そして貼付文土器群の製作・使用者達は、それぞれにどんな形で本遺跡を利用したのかが、さらに考えなければならぬ問題として残されている筈なのである。

遺憾ながら、本遺跡に関して、そうした問題に答えるための資料・データは、全くないに等しいようである。すでに述べたように、本遺跡では、現状で、地表面から遺構などの存否をうかがうことはできなかったのであり、また、1973・1974両年におこなわれた石附喜三男氏らの発掘調査によっても、ことオホーツク文化に関しては、何らの資料・データもえられてはいないのである⁸⁴。まして、本遺跡およびその周辺の地形・環境が、オホーツク文化の荷負者によって集落が作られてもよい条件をそなえている⁸⁵とすれば、なおさら、容易には答え難い問題だといわなければならないようである。こうした問題についてさらに考えるとすれば、結局、本遺跡に関する資料・データだけでなく、周辺の関係するであろう遺跡群との関連において、考えられなければならないものと思われる。ここでは、他の例にならって、本遺跡に関する直接の資料・データの記載にとどめ、こうした問題については、後にあらためて考えてみることにしたい。

84) 前註82を参照されたい。

85) 前註22文献参照。

8. ウエンベツ河口遺跡

本遺跡は、斜里川河口左岸に、そこから海岸沿いに西にのびる砂丘の内陸側に、位置している。正確に言えば、斜里川河口から500m程溯った地点で、砂丘列の内側を流れてきた宇遠別川が西から合流するが、本遺跡はこの合流点からさらに宇遠別川を400m程溯った南側・右岸の低い砂丘上に立地しているのである。宇遠別川は、この付近で砂丘列の間を貫流する形になっているが、北・海側の海拔18.5mの三角点のある砂丘主体部から切離されて、南側・右岸にも、それぞれ独立した小高い砂山が点在している。本遺跡は、そうした砂山のひとつ、最も川寄りの・最も低い砂山にのっているのである。もう少し川から離れた・南寄りに点在する、もう少し高い砂山の上には、ピラガ丘遺跡第I地点・同第II地点・同第III地点・須藤遺跡などの『トビニタイ文化』にかかる竪穴住居址を残す集落遺跡群が知られている⁸⁶。

こうした地形から考えれば、この付近で斜里川

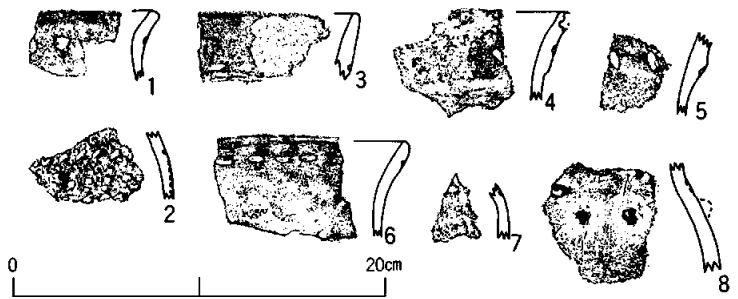
86) 前註1引用の米村氏、1970、米村氏他、1972、金盛氏、1976、金盛氏他、1981、各報告書。

なお、すでに本文にふれたように、前註2文献にいう『32 黒田公園』[34 栄町神社の小丘]もまた、これらに続く、同趣の遺跡だったらしい。すなわち、ピラガ丘遺跡から『34 栄町神社の小丘』にいたる『トビニタイ文化』にかかる一連の集落遺跡群は、さらにもう少し続くのかもしれないが、一群をなすものだったのではないかと考えられる。

はかつて現在より西寄りを流れていたことがあり、砂丘にぶつかって流路を東に転じ、砂丘列の中を貫流して前記禪龍寺遺跡あたりにまで達し、そのあたりで海に注いでいたのではないかと考えられる。確認はできないが、オホーツク文化の荷負者がこの地域にあった時期には、斜里川はそうした流路をとっており、つまり、本遺跡は、河口にあった禪龍寺遺跡から1 km強上流に溯ったところに位置していたのではあるまいか⁸⁷。

それはともかく、遺跡の現状は、本遺跡ののる低い砂山にかかって釧網本線が走っており、また線路の南側にはこれに並行するように道路が作られ、さらにその南では近時の砂採りによって砂山は全く削平されてしまっている、つまり、遺跡はほとんど完全に破壊されてしまっているようである。現在、線路の北側の僅かに高くなった砂丘の残存部の北東側の斜面から耕地になっているその裾にかけて、少量の土器片・石片等の散布があり、また線路の南側下を走る道路の線路側の法面に、やはり僅かな土器片および焼けたやや大きな角礫・炭等が認められることで、かろうじて遺跡として確認することができる。

かつて、1950年頃、砂山はほぼ線路に直交する方向に100m程のびていたという⁸⁸。当時、この砂山では、多くの土器等の遺物を採集することができたらしい。河村氏の記憶では、土器のうちでは、続縄文期の土器が最も多く、オホーツク式土



第16図 ウエンベツ河口遺跡出土のオホーツク式土器

器も採集できたとのことである。そのうちには貼付文をもつものも含まれていたという。竪穴は、少なくとも表面から確認しうる形では、みられなかったらしい。

すでに述べたように、本遺跡で、筆者らは、僅かな遺物を採集しえているにすぎない。しかし、それらは、第16図に示すように、いずれもオホーツク式土器であり、しかも、そのうちには貼付文をもつ例は含まれていなかった。河村氏の記憶とのズレが、どういう理由によるものか、現時点では明らかでない。あるいは、地点によって多少のズレがあるのであろうか。いずれにせよ、筆者らの採集資料からみて、ここにオホーツク文化にかかる遺跡が残されていたこと、そしてそれが、少なくともその一部では、刻文系の土器群の製作・使用者達によって残されたものであったことはたしかであると考えられる。そうであるとすれば、さきに禪龍寺遺跡についてもいったように、本遺跡および周辺の地形・環境が、オホーツク文化の荷負者によって集落が作られてもよい条件をそなえているとすれば、ここでは、刻文系の土器群の製作・使用者達にかかる集落遺跡が考えられてよいのかもしれない。あるいは、道路の法面で採集された焼けた角礫は、炉址を構成していたものひとつだったかもしれないのである。

結局、確言できないことを遺憾とするが、本遺跡にオホーツク文化の荷負者、それも刻文系の土器群の製作・使用者によって竪穴住居址が残された、つまり、そのグループの集落遺跡だった可能性があるのかもしれない。禪龍寺遺跡の場合と同様に、ここでは直接の資料・データの記載にとどめて、竪穴住居址の有無、つまり、遺跡の意味・

87) おそらく、『トピニタイ文化』の荷負者達によって前記ピラガ丘遺跡他に集落が営まれていた時期にも、斜里川はそうした流路をとっていたのではないかとと思われる。そして、こうした想定が誤っていないとすれば、ここにみられる『トピニタイ文化』にかかる集落遺跡群のあり方、あるいはまた擦文文化にかかる遺跡群のあり方と対比してみると、きわめて興味深いものであるといえそうである。あらためて検討・討論してみる機会があろうと考えている。

88) 河村淳史氏の御教示による。

なお、河村氏には、金盛氏とともに現地に御足労戴き、種々御教示を戴いた。以下、この部分の記載は、いずれも河村氏の御教示に負うものである。明記して御礼申上げる。

性格については、後にあらためて考えてみることにしよう。

3

前節に、筆者は、斜里町管内・知床半島北西岸のオホーツク文化にかかる諸遺跡について、それぞれに記載してきた。これまでの記載にも明らかのように、これらの諸遺跡に関するわれわれ考古学研究者の知見は、なお全くかぎられたものでしかないといわざるをえないようである。しかし、それはそれとして、それらのおおまかな概要は、以上の記載にほぼうかかえるのではないかと考えている。だが、おそらく、問題はそれのみかぎられるわけではないであろう。すでに前節のそれぞれの遺跡に関する記載の中でも一部ふれてきたが、これらの諸遺跡は、それぞれ他と無関係に・孤立してあったわけではなく、なんらかの相関的な関係の下にあったかと考えられるからである。つまり、これらのどの遺跡について考えるにせよ、ある遺跡は、隣接する他の遺跡との、あるいは、さらにもっと広く、(もしそうしたものがあつたとすれば) その遺跡を残した人々の属する地域社会——たとえば、筆者がかつて「地域集団」と呼んだそのような——の他の成員によって残されたいくつかの他の遺跡との相関的な関係をも考慮してはじめて、正当に理解し・評価しうるものになるのだろうと思われる⁸⁹⁾。以下、本節では、そう

89) 前註7引用の文献を参照されたい。

なお、すでにその論文にもふれたところであるが、オホーツク文化の荷負者における「地域集団」のあり方には、刻文系の土器群の製作・使用者のそれと貼付文土器群の製作・使用者のそれとの間、ある変化が起っていたようにみえる。筆者が本文に「地域社会」という言葉を使ったのは、そうした変化・変質の可能性を考慮したためである。実は、これまでに知られる資料・データによってどこまでそれを明らかにすることが可能であるか、疑問がないわけではないが、そうした問題こそ、筆者の小論における主要な問題点のひとつなのである。

ついでにいうとすれば、任意のある遺跡を正当に理解し・評価するためには、こうした視点をもってしてもなお充分とはいえないのかもしれない。そこでは、隣接するものを含めた複数の「地域社会」相互の関係が、あるいは、オホーツク文化の荷負者以外の、他のグループのそれとの関係が、さらに考慮される必要があるかもしれないのである。すでに予定した紙数を超過しようとして

した視点をも含めて、前節に記載してきた斜里町管内・知床半島北西岸のオホーツク文化にかかる諸遺跡について、さらに考えてみることにしたい。

筆者は、かつて、北海道におけるオホーツク文化にかかる遺跡について、その分布の偏りから、それらがいくつかの地域的なグループにまとめられることを指摘したことがある⁹⁰⁾。筆者は、それが、そのグループの遺跡群の分布する地域を領域とする「地域集団」の存在を示すものと考えたわけである。そこにはさらに検討を必要とする問題が残っていないわけではないが、さしあたり、筆者の考えるところをここに図示しておくことにしよう(第17図)⁹¹⁾。

いるため、小論でそこまで言及することは困難かもしれないが、ここでは、その可能性があることだけでも、あえて指摘しておくことにしよう。

90) 前註7引用の文献。

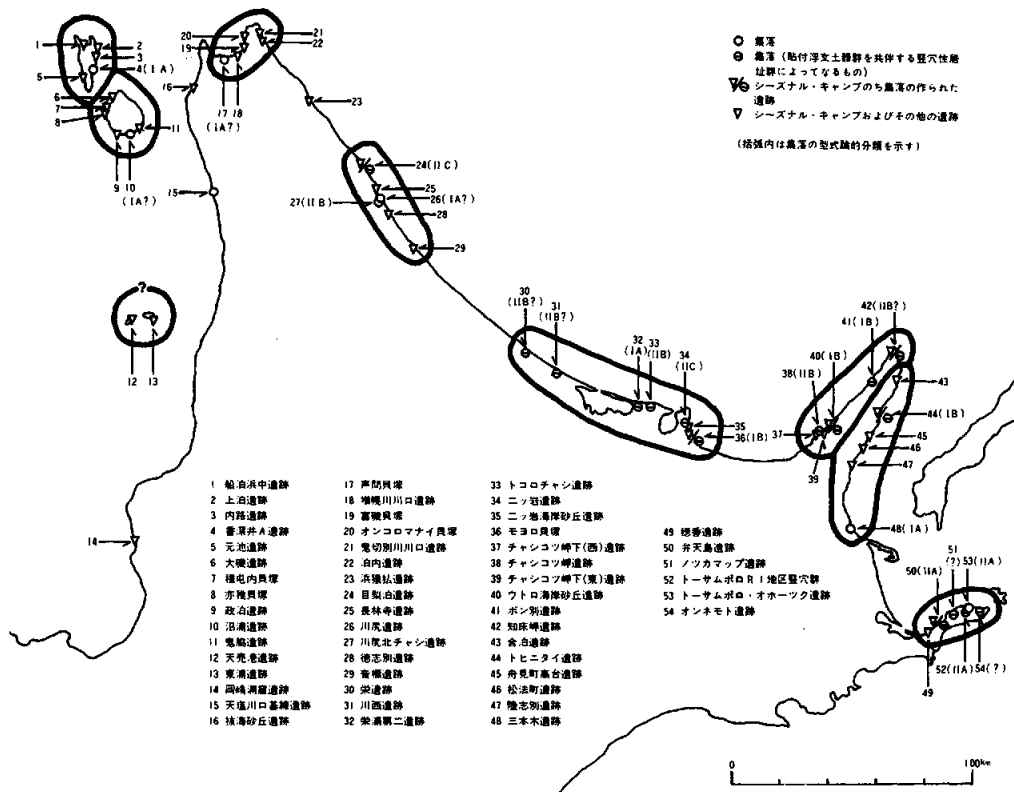
91) 前註22文献の第12図を転載。

この図には、前節に記載した諸遺跡のうち、禅龍寺遺跡およびウエンベツ河口遺跡が示されていない。前節にも述べたように、遺跡の状況がなお充分明らかでないためである。もちろん、以下、小論では、これらをも加えて考えてゆくことにする。また、同じくチャシコツ岬下B遺跡(図では「チャシコツ岬下(西)遺跡」)については、この図では、堅穴住居址を残さない「シーズナル・キャンプ」としてのみ示しているが、すでに前節に述べたように、現時点では、筆者は、少なくとも貼付文土器群の製作・使用者に関しては、堅穴住居が作られていた、つまり、集落としてあつたものと考えていることを、したがって、その点でこの図は補訂を要することを、付記しておく。

その他にも、その後の調査・研究の進展によって、この図には、補訂を必要とする点がいくつかある。たとえば、知床半島南東岸になるが、図に「シーズナル・キャンプ」として示されている「松法町遺跡」では、その後の発掘調査で、刻文系の土器群を伴う堅穴住居址と貼付文土器群を伴う堅穴住居址の両者あわせて13個が確認されている。つまり「松法町遺跡」は、集落と考えなければならないわけである。さらに、最近下記文献によって紹介された網走市能取西岸遺跡も筆者らの知らなかった新発見の集落遺跡であつて、これもまた図に加える必要がある。こうした補訂によって、関連する「地域集団」のあり方については、当然、再考を要することになる筈である。しかし、紙幅の関係もあり、詳細はあらためて論ずることとし、ここにはふれないことにしたい。

右代啓視・西本豊弘「網走市能取西岸遺跡について」『北海道考古学』第19輯、1983。

なお「松法町遺跡」の調査結果については、羅臼町教



第17図 北海道におけるオホーツク文化関係遺跡の分布と想定される『地域集団』

実のところ、第17図で、筆者は、知床半島北西岸のオホーツク文化にかかる諸遺跡を一群のものとして、つまり、一『地域集団』の存在を示すものとして図示しているが、そこには、さきにも「検討を必要とする問題」以前に、確かにそれらが一『地域集団』にかかる・一群のものとして捉えることができるのかどうかを、まず考えてみる必要があるかもしれない。

たとえば、前節に筆者が記載した禅龍寺遺跡・ウエンベツ河口遺跡の両遺跡は、第17図には示されていないのだが、実は、これらふたつの遺跡は、まさに、前節に記載したウトロ付近の遺跡群と網走付近の遺跡群——モヨロ貝塚⁹²・ニツ岩海岸砂丘遺跡⁹³・ニツ岩遺跡⁹⁴——とのほぼ中間に位置

しているのである。すなわち、さきにも述べたように、ウトロ付近の遺跡群から斜里川河口の禅龍寺遺跡・ウエンベツ河口遺跡まで30km強の距離があるが、両遺跡はまたモヨロ貝塚からもその距離35km程のところにある、つまり、遺跡分布の疎密を基準として考える、いいかえれば、各遺跡間の距離によって判断するかがり、禅龍寺遺跡・ウエンベツ河口遺跡は、ウトロ付近の遺跡群のグループに加えることも、網走付近の遺跡群のグループに加えることも、いずれも不可能ではない・いずれとも断定し難いことになりそうである。加えて、状況は全く同じとはいえないにしても、第17図にみられるように、宗谷湾周辺の『地域集団』と枝幸町周辺の『地域集団』との中間に位置する猿払町浜猿払遺跡のような例⁹⁵もあって、にわかによ

育委員会涌坂周一氏に御教示戴いた。明記して御礼申上げる次第である。

92) 前註37引用の米村氏、1950、駒井氏他、1964、各文献等。

93) 北海道大学北方文化研究施設の調査による。

94) 平川善祥・野村崇編『ニツ岩』(北海道開拓記念館研究報告 第7号)北海道開拓記念館、1982。

の帰属を云々することはできないのかもしれない。しかし、禅龍寺遺跡・ウエンベツ河口遺跡については、一応、竪穴住居址の存在が想定できるので、それを欠くものと考えられる浜猿払遺跡の場合と同一視するわけにはいかないように思われる。強いていえば、網走付近の遺跡群の場合、さらにそれらからそれほど離れることなく、5～10km前後の間隔で、能取西岸遺跡⁹⁶・トコロチャシ遺跡・栄浦第二遺跡⁹⁷の諸遺跡が続いているので、それだけ30km以上離れた斜里川河口の禅龍寺遺跡・ウエンベツ河口遺跡を、同じグループに加えることは不自然かもしれないという理由で、ここでは、やはりこれらを知床半島北西岸のグループに加えられるものと、そのグループの西端に位置するものと、仮に想定しておくことにしよう。

類似の疑問は、このグループの東端についてもないわけではない。第1図にもみられるように、半島先端に位置する知床岬遺跡に続いて知られる遺跡は、半島を根室水道側にまわり込んで南東岸の、先端から20km弱のところにある合泊遺跡⁹⁸である。ここでも、知床岬遺跡と合泊遺跡との間の距離は、同じ知床岬遺跡とポンベツ遺跡との間の距離にほとんど等しいのであって、各遺跡間の距離によって判断するかぎり、合泊遺跡のみを別のグループに属するものと考えた根拠はないことになろう。しかし、この場合も、貼付文土器群を伴う竪穴住居址を残す集落遺跡についてみると、合泊遺跡には竪穴住居址は知られておらず、半島南東岸では、合泊遺跡から海岸線沿いにさらに17km離れた、半島先端からは35km以上の距離にある、トビニタイ遺跡⁹⁹までそれを確認することができないのである。つまり、貼付文土器群の製作・使用者に関するかぎり、半島北西岸のグループと南東岸のグループが、それぞれ別の『地域集団』を作っていたことは、充分考えられるところである。筆者がさきに注意したように、刻文系の土器群の

製作・使用者の『地域集団』の領域・範囲は、ほぼそのままの形で貼付文土器群の製作・使用者に引継がれたらしい¹⁰⁰ので、後者においてそれが認められるとすれば、前者・刻文系の土器群の製作・使用者についても、それは同様だった可能性が大きいものと考えてよいであろう。かくて、筆者はこのグループの遺跡の分布の東端は、やはり知床岬遺跡にあったものと考えようとするのである。

筆者は、上に述べてきたような論理によって、こうした疑問に明快に答えたと考えているわけでは必ずしもない。というよりは、上述の論理が、むしろ、ある意味では、牽強付会の説といわれてもしかたがない側面をももっていることを、みずから認めないわけにはいかないのである。それは、ひとつには、筆者が、さきにいった「検討を必要とする問題」を含めて、現時点で考えていることを、必ずしも充分に説明しえていないことにもよるのであろう。したがって、ここでは、筆者の論理がこれらの疑問に答えるためになお不十分であることを認めた上で、仮説的に、知床半島北西岸の諸遺跡が一群の・一『地域集団』によって残されたものであることを想定して、議論を進めておくことにしたい。そうした議論の上で、後に、あらためてこうした疑問に立戻す機会があろうと考えている。

さて、この斜里町管内・知床半島北西岸にあらわれた最初のオホーツク文化の荷負者が、刻文系の土器群の製作・使用者達であったことは、前節の記載にすでに明らかであろう¹⁰¹。これまでに確

100) 前註7引用の文献。

101) 前節に資料を図示して記載したように、チャシコツ岬下A遺跡では、円形刺突文をもつ資料が1例だけ知られている。この資料が、たとえば下記の大沼・本田両氏文献にいう羅臼町辻中遺跡での事例のように、刻文系の土器群に伴うものではなく、単独にあった、つまり、同じく下記の北地文化研究会文献が弁天島西貝塚の『貝層下の竪穴とその土器』についていうように、『道北部の突瘤文期に並行する』ものとも考えることも、あるいは全く不可能ではないのかもしれない。しかし、本遺跡におけるこうした資料が、知られる口縁部資料79例の中の1例のみにとどまることは、注意を惹く。いったい、道東部におけるこの趣の資料の例は、北地文化研究会文献がいうモヨロ貝塚・三本木遺跡の場合を含めて、少数にとどまるのが一般のようである。むしろ、それらは、上記した辻中遺跡のような(あるいは弁天島西貝塚貝層下竪穴の例も加えられるのかもしれないが)例外的な事例を除

95) こうした例については、前註7引用の文献の註57)にふれたことがある。御参照願ければ幸いである。

96) 前註91引用の右代・西本両氏文献。

97) 東京大学文学部考古学研究室編『常呂』東京大学文学部、1972。

98) 沢四郎他『羅臼』(羅臼町文化財報告1)羅臼町教育委員会、1971。

99) 前註1引用の駒井氏編文献。

認されるかぎり、彼等は、知床岬遺跡・ポンベツ遺跡・ウトロ遺跡・チャシコツ岬下A遺跡・チャシコツ岬下B遺跡・禪龍寺遺跡・ウエンベツ河口遺跡に、その足跡を残している。

前節にみてきたように、そのいずれについてもわれわれの知見はなお全く不十分であり、確信をもっていうことはできないのだが、少なくともチャシコツ岬下A遺跡・チャシコツ岬下B遺跡の両遺跡に関しては、刻文系の土器群の製作・使用者のキャンプサイトとしてあったことは、ほぼたしかであるといつてよいと思われる。これに近いウトロ遺跡については、これも前節にふれたように、やはりキャンプサイトであった可能性が考えられてよいと思われるが、これまでの発掘調査の結果、特に河野氏らの調査区が墓域に当たっているらしいこと、およびチャシコツ岬下A遺跡・チャシコツ岬下B遺跡との位置的関係から考えて、あるいは再考の余地があるかもしれない。後にさらに考えてみることにしよう。一方、知床岬遺跡・ポンベツ遺跡についても、筆者は、前節で、刻文系の土器群の製作・使用者達に関してキャンプサイトとしてあったことを考えたのだが、そしてたしかにそう考えてよいと思われるが、両遺跡の刻文系の土器の資料が数量的にかぎられているらしいことはやや気になるところである。これらについても、後にさらに考えてみることにしよう。さて以上にふれてきた諸遺跡が、いずれもキャンプサイトを考えさせるものであったのに対して、禪龍寺遺跡およびウエンベツ河口遺跡が、これまでに

いて、他の多数の刻文系の土器群に共伴したものと考えた方がよさそうである。また、かりに辻中遺跡のような例、つまり、時間的により遡りうる例のあることを認めるとしても、それらは、けっして定着的な形であったのではなく、全く一時的・例外的な形であったものと考えてよいであろう。結局、本文にもいうように、斜里町管内・知床半島北西岸のそれを含めて、道東部にあらわれた最初のオホーツク文化の荷負者は、筆者が前註66引用の文献にすでに指摘しているが、刻文系の土器群の製作・使用者達であったといつてよいと思われる。

大沼忠春・本田克代「羅臼町出土のオホーツク式土器について」『北海道考古学』第6輯、1970。

北地文化研究会「根室市弁天島西貝塚竪穴調査報告」『北海道考古学』第15輯、1979。

なお、筆者は前註35引用の文献の註35)に、関係するところのある問題についてふれているので、御参照戴ければ幸甚である。

知られるかぎりではそこに竪穴があったかどうか不明とせざるをえないが、少なくともそれらの遺跡立地に関しては、刻文系の土器群の製作・使用者達の集落遺跡が残されてもよい条件をそなえていることは、注意に値しよう。しかも、ウエンベツ河口遺跡では刻文系の土器のみが、禪龍寺遺跡でも相対的に多数の刻文系の土器が、知られているのである。あるいは、ここには刻文系の土器群の製作・使用者達にかかる集落遺跡が残されていたのではあるまいか。

これも前節に注意したように、ウエンベツ河口遺跡と禪龍寺遺跡とは同じ斜里川の河口付近にあって、前者がやや上流に、後者がその河口部に、僅か1km強の距離をおいているにすぎない。上にいうようにこれらの2遺跡をともに集落遺跡であったと考えるにしろ、あるいは、そのいずれかひとつが集落であり・他がキャンプサイトであったと考えるにしろ、両者が同時にあったとすれば、その意味はきわめて理解し難いものになってしまうであろう。それを集落と考えるにしろキャンプサイトと考えるにしろ、これらの2遺跡にあった人間集団の生活活動の範囲は、地域的に全く重なってしまうにちがいない。つまり、どんな形にせよ、ウエンベツ河口遺跡と禪龍寺遺跡とが同時にオホーツク文化の荷負者達の生活の場としてあったことはなく¹⁰²⁾、両者は時期を異にして形成されたものと考えられるべきであろう。おそらく、これらの2遺跡はともに集落だったのであり、まず、いずれか一方が集落としてあり、ついで、それが移転する形で、他に集落が形成されたのであろう。ただし、そう考える場合、そのどちらが古

102) もしウエンベツ河口遺跡と禪龍寺遺跡が、異なるふたつのグループによって残されたとすれば、そのかぎりではないかもしれない。しかし、少なくともこれまでの知見によるかぎり、一『地域集団』が複数のグループによって構成されていたと考えられる事例は知られていない。前註7引用の文献および同22文献を参照されたい。

なお、両遺跡のいずれかが、「生活の場」ではなく、たとえば禪龍寺遺跡がウエンベツ河口遺跡を残した人々の墓域であったとすれば、ないしはその逆であっても、もちろん、両者が共存した可能性はありえよう。ここでも、しかし、ウエンベツ河口遺跡でもまた禪龍寺遺跡でも、それが墓域であったことを想定させる資料・データは全くないのであり、現状では、そうした可能性を考える必要はないであろう。

くどちらがより新しかったのかは、少なくともこれまでの資料・データからは、判断することは困難である。結論を留保しておくことにしたい。

筆者は、少なくとも道北部に関しては、一『地域集団』の存在を示す・ひとつの集落遺跡と複数のキャンプサイトによってなる・一群のものであることの明らかな遺跡群が、いくつか認められることを繰返し指摘している¹⁰³。筆者は、さらに、特に刻文系の土器群の製作・使用者に関しては、道東部でも、同じようなセツルメントパターンをもち・まとまりを示す遺跡群が指摘できるであろうことをも、知床半島南東岸の遺跡群¹⁰⁴等を例にとって、考えてきたのである。そして、それに関連して知床半島北西岸の遺跡群についても、「集落こそ確認されていないが」と前置きした上で、類似の遺跡群・セツルメントパターンの存在を想定できるだろうことを述べた¹⁰⁵。上にいうように、もし、禪龍寺遺跡・ウエンベツ河口遺跡が、刻文系の土器群の製作・使用者によって残された集落遺跡であったと考えることができれば、問題は一挙に前進することになる。すなわち、刻文系の土器群の製作・使用者に関して、禪龍寺遺跡・ウエンベツ河口遺跡はまさに集落としてあったのであり、知床半島北西岸の遺跡群は、禪龍寺遺跡・ウエンベツ河口遺跡を中核的・定着的な集落とし、加えてこれに対応する(いくつかの)キャンプサイトからなる、一『地域集団』によって残された・一群の遺跡群として捉えることが可能になると思われるからである。そこに想定される一遺跡群のあり方・セツルメントパターンは、知床半島南東岸のそれに類するものようである。特にウエンベツ河口遺跡の立地条件は、堅穴が確認されてい

ない、つまり、集落遺跡としての構成は明らかではないが、知床半島南東岸の『地域集団』の集落遺跡だったと考えられる標津町三本木遺跡のそれ¹⁰⁶とよく似ている。さらに加えて、海岸線に峻険な地形の続く半島部にはキャンプサイトが点在し、半島部を離れ・広い海岸平野の開ける地域に入っ、やや大きな河川の河口部に、集落遺跡が残されることでも、知床半島北西岸の遺跡群のあり方は、同南東岸の遺跡群のそれと軌を一にすると見えそうである。結局、少なくとも刻文系の土器群の製作・使用者達に関するかぎり、知床半島北西岸と同南東岸にはそれぞれに同趣の「地域集団」があり、類似のセツルメントパターンをもって、相似た形の遺跡群を残したものと考えることができるのではあるまいか。

こうした理解を認めるとしても、しかし、知床半島北西岸のオホーツク文化にかかる遺跡群、就中、刻文系土器群の製作・使用者達のそれらについて、さらに問題がないわけではむろんない。

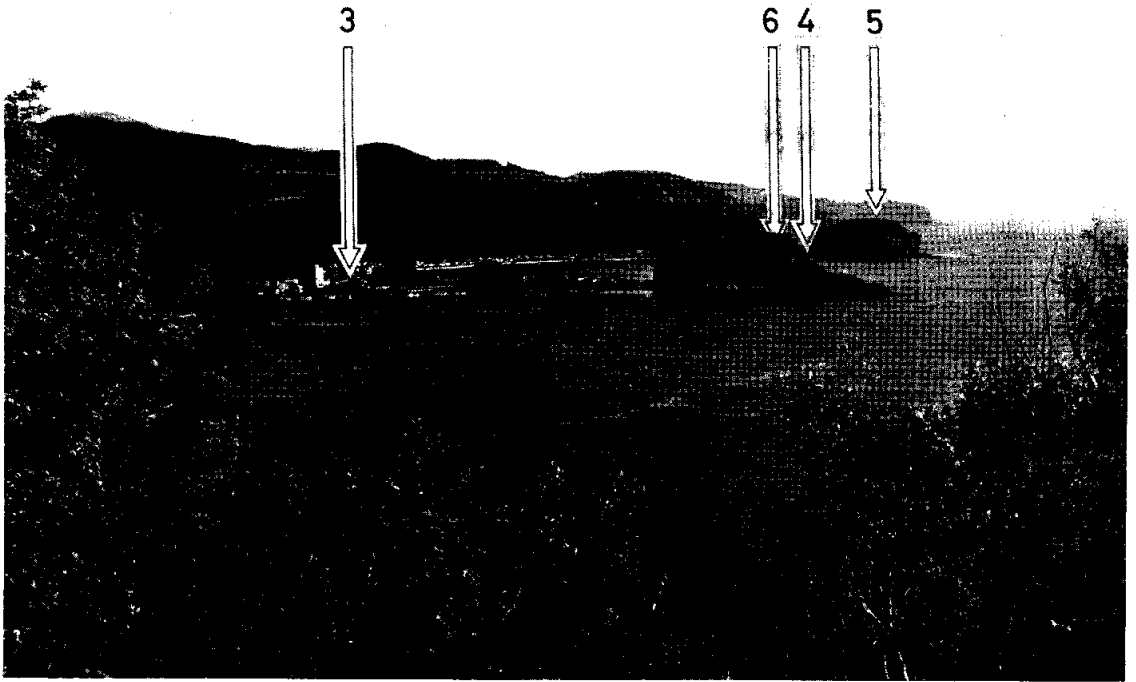
たとえば、近接した位置にある複数の遺跡相互の関係の問題は、すでに前節にも注意したが、ウトロ付近の諸遺跡についても考えられなければならないであろう。すなわち、ウトロ付近では、ウトロ市街からチャシコツ岬あたりにかけて、僅か2km程の間にウトロ遺跡・チャシコツ岬下A遺跡・チャシコツ岬上遺跡・チャシコツ岬下B遺跡の4遺跡が知られているのである。これらの4遺跡は、まさに指呼の間にある(第18図)のであって、そこにあったオホーツク文化の荷負者達について、その沿岸の漁猟場を考えるにせよ、それがどの程度の意味をもっていたか疑問がないわけではないが、陸上の狩猟・採集の場を考えるにせよ、それらが重複せざるをえないことは明らかであろうと思われる。ここではまず刻文系の土器群の製作・使用者達について考えているのだが、さきに述べたように、筆者は、これら4遺跡のうちウトロ遺跡・チャシコツ岬下A遺跡・チャシコツ岬下B遺跡の3遺跡について、いずれもキャンプサイトだったものと考えた。もしそれが誤っていないとすれば、ふたたび、これらの3遺跡は、同時に共存していたとは考え難いことになる。これだけ至近の間で、かつほとんど類似の地形的条件にあり

103) 前註7引用の文献、および前註22文献等。

104) 知床半島南東岸に想定される『地域集団』・その遺跡群については、「松法町遺跡」が集落としてあったことが確認された結果として、こうした問題に関して再考を必要とするであろうことは、前註91にふれたとおりである。しかし、筆者は、それらが、おそらく標津町三本木遺跡までを含めて、一『地域集団』の存在を示すものであると考えることは、なお可能な想定だろうと思っている。再考を要するのは、そうした『地域集団』のあり方・構成ないしその変化・変遷に関してである。前註91にもいうように、「松法町遺跡」の発掘調査報告が公表された後に、再論する機会があらうと考えている。

105) 前註22文献。

106) 前註22文献の第4図参照。



第18図 東・ブユニ岬方面から望むウトロ付近の遺跡群。3.ウトロ遺跡 4.チャシコツ岬下A遺跡
5.チャシコツ岬上遺跡 6.チャシコツ岬下B遺跡(稜線の向側)

ながら、しかも実に3地点にわたって、そのキャンプサイトが移されなければならなかった¹⁰⁷理由

107) これまでの知見のかぎりでは、複数のキャンプサイトがこれだけ近接した位置に確認される事例は知られていない。すなわち、通例キャンプサイトは、ある漁・猟・採集場を含む地理的範囲の中で、特定の地点にあって、ほとんど移動しないのが一般である。もしこうした理解を認めるとすれば、したがって、この場合、そうしたキャンプサイトの移動を必要とする理由が、当然、問われなければならないことになる。そして、こうした間に答えないかぎり、これらの遺跡を正当に理解し・評価しえたとはいえない筈である。本文にもいうとおり、遺憾ながら、資料・データの現状では、これらの諸遺跡について、われわれはこうした間に明快に答えることはできそうにもない。さらに後考に俟ちたい。

ちなみに、さきにふれた網走付近の遺跡群——モヨロ貝塚・二ツ岩海岸砂丘遺跡・二ツ岩遺跡——のあり方は、ウトロ付近の遺跡群が知床半島の脊稜山脈を背後に負う峻険な海岸線にへばりつくような形であるのに対して、この場合、網走川河口の沖積平野およびその背後の低く・ゆるやかな丘陵によってなる広闊な地形の中にあることを除けば、その遺跡相互の位置的關係でも、それぞれの遺跡の地形的条件でも、ウトロ付近の遺跡群のそれと、

がどこにあったのか、また、そのどれがより早く形成されどれがより新しかったのか、明らかであるとはいえないが、いずれにしてもこれらの3遺跡は、おそらく中断を含まない形で、時期を異にしてあったものと考えてよいのであろう¹⁰⁸。

きわめてよく似ているようである。こうした類似は、上にも述べたように、そのよってきた理由は明らかでないにせよ、注意に値するものように思われる。同時にそれは、刻文系の土器群の製作・使用者達におけるモヨロ貝塚——それを集落と考えるにせよキャンプサイトと考えるにせよ——と二ツ岩海岸砂丘遺跡との関係について、さらに考慮の余地のあることを示唆するものようである。

前註7引用の文献および同22文献を参照されたい。

108) あるいは、これらの3遺跡が、ひとつずつ順次形成されていったと考えなければならない理由はないかもしれない。これらのうちの任意の1遺跡に関して、いったんその形成が中断されて、人々が他の2遺跡のいずれかに移り、ある時間的間隔をおいて、ふたたび人々が戻ってきて、遺跡の形成が再開される、そうした経過を想定することも不可能ではないであろう。さらに錯綜した・複雑な経過を考えなければならない場合も、考えられないわけではあるまい。本文にいうところは、そうした可能

もつとも、筆者は、前節で、ウトロ遺跡に関して、そこに墓域があった可能性を指摘した。さらに加えて、筆者は、ウトロ遺跡におけるこれまでの発掘調査が、刻文系の土器群の製作・使用者の想定されるキャンプサイトの主要な部分に当たっていないらしいことにも注意した。実際上、これらの3遺跡が同一の集団によって・同趣のキャンプサイトとして残されたと考えることは、それらがそれぞれにかなりの規模をもっているらしいことからみて、あるいは困難なのかもしれない。つまり、こうした状況は、本遺跡が、実はキャンプサイトではなく、チャシコツ岬下A遺跡・チャシコツ岬下B遺跡をキャンプサイトとして利用していたグループの墓域だったのかもしれない、そうした可能性を示唆するものようでもある。そうであるとすれば、当然、ウトロ遺跡はチャシコツ岬下A遺跡あるいはチャシコツ岬下B遺跡と、ないしその両者と、並行して形成されていってよいことになろう。しかし、これまでの関連する資料・データは、遺憾ながら、こうした可能性を検証するためには、全く不十分であるといわざるをえないようである。さらに今後の検討にゆだねることにしよう。

上にも注意したように、ウトロ遺跡・チャシコツ岬下A遺跡・チャシコツ岬下B遺跡は、刻文系の土器群の製作・使用者達について、それぞれにかなりの規模の遺跡だったようである。そこでは、さきの第9～10図・第12～13図にみられるように、またこれもすでにみた『10 ウトロチャシコツ岬西側平地』についての河野広道氏の記載にうかがえるように、比較的多数の刻文系の土器が発見されているのである。こうした例と対比してみる時、筆者はさきにそこにも刻文系の土器群の製作・使用者のキャンプサイトがあったことを考えたのだが、知床岬遺跡およびボンベツ遺跡における資料・特に土器群のあり方は、やや気になる。すなわち、後者では土器1片が確認されているのみであり、前者・知床岬遺跡でも、第3～5図にみられるように、貼付文土器群がその主体を占め、刻文系の土器は比較的少数が発見されているにすぎない。もちろん、こうした状況が偶然であった、たとえば発掘区が刻文系の土器群の主要な分布域を外

ていたことの結果であった可能性を、全く否定してしまうことはできないであろう。しかし、少なくとも現状から考えるかぎり、これらの2遺跡が、刻文系の土器群の製作・使用者達に関して、ウトロ遺跡等との対比において、相対的に小規模な遺跡であったことは考えられてよいと思われる。同じキャンプサイトについてその遺跡としての規模の大小をいうとすれば、それは、おそらく、その遺跡の形成にあずかった集団の規模の大小によるのではなく¹⁰⁹、むしろ、そのキャンプサイトの利用された時間の長短にその理由が求められるのではあるまいか。つまり、知床岬遺跡・ボンベツ遺跡で刻文系の土器群の製作・使用者達にかかわる資料が相対的に少ないのは、両遺跡が彼等によってキャンプサイトとして利用された期間が、ウトロ遺跡等との比較において、相対的に短かったことの結果だったのではないかと考えられる。そして、それは、両遺跡が、ウトロ遺跡等よりも新しく・より遅れて、キャンプサイトとして利用されはじめた¹¹⁰ことを示唆するかと思われる。

以上に検討してきたところによって考えれば、知床半島北西岸に刻文系の土器群の製作・使用者達の『地域集団』があったことは、ほぼ明らかであるといつてよさそうである。その『地域集団』は、禅龍寺遺跡あるいはウエンベツ河口遺跡に中核的・定着的な集落を作り、半島部にいくつかの季節的なキャンプサイトをもって、斜里川河口付近までを含む知床半島北西岸をその集団領域として、あったのであろう。キャンプサイトとしてまずあったのは、チャシコツ岬下A遺跡あるいはチャシコツ岬下B遺跡——あるいはウトロ遺跡をも含めて——のうちのいずれかひとつだったと思われる。すなわち、知床半島北西岸の『地域集団』

109) いずれかのあるキャンプサイトを利用する集団の規模は、そのもっていた意味から考えて、ほぼ一定していたものと推定してよいのではないかと考えている。その集団がある規模を超えた場合、それは分裂して新しいキャンプサイトが形成されることになる、つまり、キャンプサイトは、それを利用する集団の規模に関して、ほぼ一定の枠をもっていたと考えてよさそうである。

前註66引用の文献(特にその第2章第5節II)参照。

110) ただし、ボンベツ遺跡に関して、そこに刻文系の土器群の製作・使用者のキャンプサイトがあったかどうか、なお疑問がないわけではないことは、すでに前節に述べたとおりである。

性をも含めての発言である。

は、ウエンベツ河口遺跡あるいは禅龍寺遺跡にあった集落と、ウトロ付近のいずれかの遺跡にあったただひとつのキャンプサイトという形で、まず出発したのであろう。それは、ある時間の後に、ウトロ付近のそれとともに、知床岬遺跡(あるいはポンベツ遺跡も?)を加えて、複数のキャンプサイトをもつ形に成長したのではなかったか。そして、そうした変化は、おそらく、この『地域集団』の成員の数的な増大に由来するもの・その結果だったのではないかと考えられる。

ちなみにいえば、もしこうした知床半島北西岸の『地域集団』の成長・変化を考える場合、少なくともその当初の時期には知床岬遺跡・ポンベツ遺跡は存在しなかった筈であって、知床半島北西岸と同南東岸のふたつの『地域集団』にかかる遺跡群の分布の間には、明らかな空隙があったと考えられよう。より新しい時期に、キャンプサイトとしての知床岬遺跡(およびポンベツ遺跡も?)が成立した後にも、結果として遺跡分布の空隙が認め難くなるとしても、これらふたつの『地域集団』は、それぞれに異なるものとしてありつづけた筈である。これもまた、さきに述べた知床半島北西岸の諸遺跡を一群の・一『地域集団』のものとして捉えることの妥当性を裏づける材料のひとつとしうるかと思われる。

さて、筆者が、道北部のオホーツク文化の荷負者達について、こうした『地域集団』のあり方・セツルメントパターンを考えたのは、すでに繰返し論じているように、彼等の生業が漁撈を中核としており、しかも、そこには、冬を中心とする時期のホッケ・タラ・ニシン等の産卵群を対象としたきわめて生産性の高い漁撈と、夏を中心とする時期のカサゴ・カレイ・カジカ等を対象とする相対的に生産性の低い漁撈といった、明らかな季節的アンバランスがあること、そういった生業の構造をその論拠としていたのである¹¹¹⁾。それでは、ここに類似の『地域集団』のあり方・セツルメントパターンを考えた知床半島北西岸において、同じ状況を考えることができるであろうか。

こうした問題について考える際に、その直接的な資料となるべき遺跡における動物遺存体についての記載・研究は、この地域の遺跡群に関しては、

ほとんどおこなわれていない¹¹²⁾ ために、具体的な資料にもとづいて論議することができないのは遺憾であるといわざるをえない。しかし、それについて考えるための材料が全くないわけではなさそうである。周知のように、この地域・知床半島付近では、冬期に長期間流氷が接岸して海が閉ざされる。1970/71~1979/80年の観測結果による「10年平均半旬別氷縁図」では、知床半島付近で、その期間は一月下旬から三月下旬におよんでいる¹¹³⁾。もちろん、流氷の状況は、年毎にかなり大きな変異があり、一概にはいえないのであろうが、また、オホーツク文化の荷負者達がこの地域にあった時期に、流氷の状況が現状と同様であったと断ずることもできないが、当時も、ほぼこの位の期間、海が閉ざされるのがむしろ普通であったと考えて大過ないのではあるまいか¹¹⁴⁾。そして、そうであるとすれば、道北部のオホーツク文化の荷負者において、その『地域集団』のあり方・セツルメントパターンを支えていた生業大系・生産構造は、当然、この地域では維持できなかった筈である。すなわち、ここでは、冬期に集落に集まったこの『地域集団』の全成員を支えるべき生産性の高い漁撈は、少なくとも流氷の接岸する一月下旬~三月下旬には、全く期待できないからである。

それにもかかわらず、すでにみてきたように、知床半島北西岸では、道北部のそれに類似の『地域集団』のあり方・セツルメントパターンを認めることができたのである。しかも、そうした『地域集団』のあり方・セツルメントパターンを支えるものとしてあった生業大系・生産構造が、道北部におけるそれと異なっていた¹¹⁵⁾ とすれば、形の

112) 下記の文献におけるウトロ遺跡の発掘資料に関する記載が、おそらく唯一のものかと思われる。しかし、ここでも、ほとんど種名の記載にのみとどまり、こうした問題を考えるための積極的な材料にはなりそうもない。こうした不完全な記載の責は、それを同定・記載された直良信夫氏よりも、まず、筆者を含めて、その発掘調査に当たった当事者に、その配慮がなかったことであろう。

直良信夫「トコロ、ウトロ、トビニタイ各遺跡発掘の自然遺物」前註1引用の駒井氏編文献に附録1として所収、1964。

113) 気象庁海洋気象部『海水統計資料集』1982。

114) 前註66引用の文献、第2章第5節Ⅲの註27) 参照。

115) 筆者は、かつて前註7引用の論文で、道東部のオホーツク文化の荷負者に関して『クマ・シカを中心とする陸

111) 前註7・同66引用の文献等を参照されたい。

上では類似のものであったとしても、その内実で、そこにあった『地域集団』が、道北部のそれと同様なものであったといってしまうわけにはいかないかもしれない。むしろ、そうした生業大系・生産構造の変化に応ずる形で、この場合知床半島北西岸の『地域集団』には、なお顕在化してはいなかったとしても、ある変質が起っていた、ないしは、そうした生業大系・生産構造との関係で、その『地域集団』のうちには、矛盾が蓄積しつつあったことが想定されてよいのではあるまいか。

具体的にはそれを明らかにすることはできないのだが、しかし、そこにあった生業大系・生産構造は、この地域の自然環境によく適合していたものと考えられる。筆者は、さきに、この『地域集団』の成員の数的な増大傾向を考えたが、それは、そうした条件の下に、はじめて可能になった筈である。そして、また、そうした条件が、生業大系・生産構造と『地域集団』のあり方との間にあったと推定される矛盾にもかかわらず、少なくともある期間、形の上では類似の『地域集団』を維持することを可能にしたのであろうと思われる¹¹⁶。

だが、そうした矛盾の蓄積と、それに加えて想定される『地域集団』の成員の数の増大とは、遂にこうした『地域集団』のあり方に变革をもたらすことになる¹¹⁷。そして、その結果が『道東型の

オホーツク文化』の成立だったのであり、そこでの新しい『地域集団』のあり方・セツルメントパターンの成立だったのであろう。

確認しうるそうした「変革」の最初のあらわれは、ウトロ遺跡における藤本強氏のいわゆる『オホーツク土器c群』にかかる竪穴住居址の存在であろう。筆者は、すでに、刻文系の土器群の製作・使用者達について、ウトロ遺跡がキャンプサイトあるいはそれにかかわる墓域であったことを想定してきた。つまり、そこには、刻文系の土器群の製作・使用者にかかる竪穴住居址は残されなかったものと考えたわけである。『オホーツク土器c群』にかかる竪穴住居址は、すでにみたように、単独であったのか、あるいは群在したものひとつがたまたま確認されたのか、明らかであるとはいえない。しかし、この場合、竪穴住居址が残されていたことは疑う余地がない、つまり、ウトロ遺跡が集落¹¹⁸であったことは明らかなのであって、そこにセツルメントパターンのある変化があったこと¹¹⁹、したがってまた、そこにあった『地域集

地域集団のあり方の変化・地域集団の変質をもたらすことになった」と書いたが、正確には、それに加えて人口の増大も、相乗的に、それにかかわっていたものと考えられるべきであろう。ここに補訂しておくこととしたい。

118) 竪穴住居がただ一軒だけあったと考えるとすれば、ここで「集落」という言葉をつかうことには、あるいは問題があるのかもしれない。この場合、そうした問題は別にして、多かれ少なかれ一時的なものであったキャンプサイトに対するものとして、定住的な居住の場を指して「集落」と呼んでおくことにする。

119) 正確にいえば、ウトロ遺跡にこの竪穴住居があったまさにその時に、知床半島北西岸の遺跡群の他のいずれかの地点、たとえば禪龍寺遺跡あるいはウエンベツ河口遺跡に、オホーツク文化の荷負者達の竪穴住居があり・集落があったかどうか、確認されているわけではない。そうである以上、ここでは、禪龍寺遺跡あるいはウエンベツ河口遺跡にあった中核的・定着的な集落がウトロ遺跡に移っていたこと、つまり、集落の位置は変ってもセツルメントパターンそのものは変っていない可能性も、考えられてもよいのかもしれない。しかし、すでにふれたこの『地域集団』の成員の増大傾向、および以下に述べる貼付文土器の製作・使用者の竪穴住居址の数的な増加等を考えあわせると、後にもいうように、たしかに禪龍寺遺跡・ウエンベツ河口遺跡は貼付文土器の製作・使用者によって集落としては利用されてはいなかったのだが、ここでは、やはり、セツルメントパターンの変化・具体的には一『地域集団』が同時に複数の集落を持つよ

獣狩猟が「道北部における冬期の漁撈に代るべき生業の一端をなしていた」可能性を示唆したが、そしてそれはそれなりに不可能な想定ではないと思われるが、十分な資料的裏づけを欠く現状では、あるいは尚早であったかもしれないと考えている。ここでは、一応、撤回しておくことにしたい。むしろ、道東部におけるオホーツク文化の荷負者の生業大系・生産構造が具体的にどんなものであったのかは、少なくとも調査・研究の現状では明らかであるとはいえないといった方が正確であろう。ちなみに、筆者は、おそらく、以下に考えようとする『道東型のオホーツク文化』の成立・発展の解明のためには、それらを明らかにすることが必須の要件になるだろうと考えている。今後の調査・研究の進展を期待したい。

116) 筆者は、前註7引用の論文で、こうした現象について「前代の遺制」として、同様な地域集団のあり方・セツルメント＝パターンが踏襲されていた」と書いたが、おそらく、それはそのとおりだろうと思われる。そして、それを支えていたもの・それを可能にしたものが、自然環境によく適合した生業大系・生産構造であり、その生産性の高きだったと考えられよう。

117) 前註22文献で、筆者は「そうした矛盾が、結果として

団』のあり方にある「変革」が起っていたことは、当然、考えられてよいものと思われる。

筆者がすでに繰り返し注意している道東部における貼付文土器群の製作・使用者達のセツルメントパターン・その『地域集団』のあり方、つまり、『道東型のオホーツク文化』にかかるそれ¹²⁰は、まさに、こうした「変革」の延長上にあったものと考えられる。すなわち、貼付文土器群の製作・使用者達の、竪穴住居址を残す、集落遺跡は、一『地域集団』の集団領域の中に、複数の同時に併存するようになるのである。知床半島北東岸の場合、そこでは、知床岬遺跡・ポンベツ遺跡・ウトロ付近の遺跡群——ウトロ遺跡・チャシコツ岬上遺跡・チャシコツ岬下B遺跡——をあげることができよう¹²¹。

さきにみたように、知床岬遺跡では、28個のオホーツク文化にかかる竪穴住居址かと推定される竪穴があった。また、ポンベツ遺跡では、下段に13個・上段のテラス状の平坦部に10個の竪穴が確認されている。もし、筆者が考えたとおりだとすれば、本遺跡では、合計して23個のオホーツク文化にかかる竪穴住居址があったことになる。ウトロ付近の遺跡群については、ウトロ遺跡では、前記『オホーツク土器c群』を伴出した竪穴住居址以外にも、典型的な貼付文土器群の製作・使用者達にかかる竪穴住居址が遺存する(した?)可能性があるが、その数等は不明であり、一方、チャシコツ岬上遺跡では、貼付文土器群の製作・使用者達の竪穴住居址かと推定される大きく・深い

うになることを考えたほうがよさそうに思われる。ここでは、したがって、禪龍寺遺跡あるいはウエンベツ河口遺跡にも、ウトロ遺跡の『オホーツク土器c群』を伴った竪穴住居と時間的に重なる形で、竪穴住居があったことを考えようとするのである。こうした想定が的を射ているかどうか、今後の調査・研究に俟つ必要があろう。

120) 前註7引用の文献および前註22文献。

121) ここでも、正確に言えば、これらの各遺跡が時間的に併行する形で形成されていった、各遺跡に同時に竪穴住居(群)があったことが、疑問の余地がないほど明らかに、確認できるわけではない。しかし、以下に述べる各遺跡の竪穴群の規模の問題等を含めて、そう考えた場合、この地域の遺跡群の総体をよく説明できることは、おそらく、そのとおりであろう。ないしは、そう考えるために不都合な資料・データは、少なくとも、なさそうである。こうした想定の妥当性の検証も、また、今後に残された問題であろう。

竪穴が、総数30個の半ば・15、6個を算し、また、チャシコツ岬下B遺跡では、河野広道氏の記載された『10数個の大形竪穴群』が、すでにみたように、いずれも貼付文土器群の製作・使用者達にかかる竪穴住居址だったかと考えられる。結局、ウトロ付近の遺跡群では、おそらく、合計30個を前後する貼付文土器群の製作・使用者達にかかる竪穴住居址があったものとみてよいであろう。こうした3地点・合計30個前後の竪穴からなるウトロ付近の集落遺跡相互の関係は、すでに同じウトロ付近の刻文系の土器群の製作・使用者達の複数のキャンプサイトについて考えたと同様に、多分、同時に・併行的にあったのではなく、時期を異にしてあった、ここでもそのどれが古く・そのどれが新しかったのかは明らかではない¹²²が、3遺跡が、その間を(世代の交替はあっても)ひとつの集団が順次移動する形で、中断を含まずに、引続いて集落としてあり続けたものと考えられよう¹²³。さらに、もしこうした想定を認めるとすれば、上

122) これらの3遺跡のうちでは、さきに想定したように、そこにいわゆる『トビニタイ文化』にかかる竪穴住居址群が残されているとすれば、そしてそれらが同地点に残されていると思われる貼付文土器群の製作・使用者にかかる竪穴住居址群に引続いて残されたものと考えれば、チャシコツ岬上遺跡が最も新しかったものとみることができのかもしれない。さらに、上記の推定を認めるとすれば、同じくいわゆる『トビニタイ文化』にかかる集落遺跡であるウトロ滝ノ上遺跡は、チャシコツ岬上遺跡に遅れて、おそらくは後者にあった集団が移動する形で、成立したものと考えられることになる。

前註1 駒井氏編文献参照。

123) 筆者はさきに、前註107で、網走付近のオホーツク文化にかかる遺跡群のあり方が、その遺跡相互の位置の関係でも、それぞれの遺跡の地形的条件でも、ここに取りあげているウトロ付近の関係遺跡群のそれと、きわめてよく似ていることに注意した。そうした類似から考えれば、網走付近の貼付文土器群の製作・使用者達にかかるふたつの集落遺跡——モヨロ貝塚と二ツ岩遺跡——の相互の関係も、ウトロ付近のそれらについて考えてきたのと同様であった可能性がある。つまり、両者は、同じ集団の・時期を異にしてあった、ふたつの集落遺跡であったと考えられよう。その場合、前註122に述べた想定を認めるとすれば、まずモヨロ貝塚に集落があり、後に、その集団が移動する形で、二ツ岩遺跡の集落が営まれたことになる。モヨロ貝塚10号竪穴に共伴した遺物群と二ツ岩遺跡1～3号住居址に共伴した遺物群と、就中、それぞれに共伴した土器群を比較してみると、もちろん、筆

記したポンベツ遺跡における、下段の竪穴群と上段のテラス状の平坦部のそれともまた、同じ集団の・時期を異にした、類似の集落のあり方だったと考えられることになろう¹²⁴。

結局、貼付文土器群の製作・使用者達の、つまり『道東型のオホーツク文化』にかかる集落は、知床半島北西岸に想定される『地域集団』に関して、半島先端部・ルシャ付近・ウトロ付近の3地点に、それぞれにあったものと考えられることになる。それぞれが、おそらく、ある期間——多分、貼付文土器群が製作・使用されていた期間を通じて——併存していたであろうことは、すでに述べた。この場合、それらの3地点が、ほぼ等間隔に、たがい20km前後の距離にあることは、あらためて注意されてよいであろう。

こうした位置的関係にある3地点に知られてい

者が繰返し説いているように、それだけで両者の時間的関係を判断するわけにはいかないが、少なくとも上という想定と矛盾するものではないとはいえそうである。

前註37引用の駒井氏他文献、および前註94文献参照。

なお、野村崇・平川善祥両氏は、こうした問題に関して、前註94文献で、ニツ岩遺跡について『利器もしくは漁撈道具を必要としなかった性格をもった遺跡と理解しなければならない』と述べておられるが、同じ難い。竪穴住居址内には、一般に、そこで使われていた什器・道具類のすべてが遺存するわけではないのであって、たまたまそこに『利器もしくは漁撈道具』が発見されなかったとしても、それはただちに『利器もしくは漁撈道具を必要としなかった』ことを意味するわけではあるまい。遺跡の意味・性格に関する問題は、もう少し広いコンテキストの中で考えられるべきものであろう。

124) 前註123にみた網走付近の遺跡群——モヨロ貝塚とニツ岩遺跡——でもそうであったが、オホーツク文化にかかる集落の場合、ある時期以降、その立地として、海浜を離れて、やや高い台地あるいは丘陵上を選択するようになる傾向がうかがえるらしい。たとえば、前註91にふれた『松法町遺跡』に対するオタフク岩遺跡(あるいは、前註98文献に報告されたように、オタフク岩遺跡は『トビニタイ文化』にかかる集落であり、例として適当でないという意見がありうるかもしれない)も類例としうるかと思われる。確証はないが、前註122にいうチャシコツ岬上遺跡の場合も、そうした一例とすることができるかもしれない。そして、それを認めるとすれば、ポンベツ遺跡の場合、下段の竪穴群が古く、上段のテラス状の平坦部に残る竪穴群が新しく、つまり、集落が下段から上段に移ったのだと考えることができるかもしれない。あらためていうまでもないが、こうした想定は当然否も、さらに今後の調査・研究に俟つ必要があろう。

る集落遺跡に残されたオホーツク文化にかかる住居址かと推定される竪穴群が、ほぼ等しい規模であること、すなわち、半島先端部における知床岬遺跡のそれが28個、ルシャ付近におけるポンベツ遺跡の下段の竪穴群と上段の竪穴群とをあわせて23個、ウトロ付近におけるウトロ遺跡・チャシコツ岬上遺跡・チャシコツ岬下B遺跡の3遺跡のそれらが合計30個前後と、やや相似た数の竪穴を残していたことは、あるいは、偶然ではなかったのではあるまいか。筆者は、すでに、これらの各地点に『貼付文土器群が製作・使用されていた期間を通じて』集落が営まれたことを考えた。つまり、各地点で集落の営まれていた期間は、ほぼ等しかったと考えたわけである。そして、そうであるとすれば、各地点の集落遺跡(群)に残る竪穴群の数が相似たものであることは、ある時点にそこにあった竪穴住居の数がほぼ相似たものであった¹²⁵ことを、したがってまた、その集落にあった集団の規模がほぼ相似たものであったことを、示しているのではないかと考えられる。

こうした半島先端部・ルシャ付近・ウトロ付近における貼付文土器群の製作・使用者にかかる集

125) こうした推定は、当然、貼付文土器群を伴う竪穴住居址が、原則として、重複して作られなかったことを前提としないかぎり成立しない筈である。だが、実際には、トコロチャシ1号竪穴・モヨロ貝塚10号竪穴・オンネモト遺跡II号竪穴等、重複する竪穴住居址の事例が知られている。筆者自身、小論で、河野氏の調査された『ウトロチャシコツ下1号竪穴』について、それが重複していたことを想定してもいるのである。しかし、前田潮氏もトーサムボロのそうした事例にふれておられる(大井晴男編『シンポジウム オホーツク文化の諸問題』学生社、1982、中の前田氏の発言)が、貼付文土器群を伴う竪穴住居址の場合、むしろ、重複しない例のほうが多いようである。少なくとも、香深井A遺跡1号a~d竪穴のような形で、多くの竪穴住居址が重複する事例はないらしい。ここでは、トコロチャシ1号竪穴の場合は全く同じ床面が使われ、オンネモト遺跡II号竪穴の場合下層床面の上に直接上層床面を貼っているの、それぞれ一種の改築例と考えて、貼付文土器群の製作・使用者達の場合、例外はあるとしても、一般に、重複する形で竪穴住居を作ることはなかったものと考えておきたい。つまり、本文にいうところは、ほぼ承認されてよいと思われる。付加えていえば、これもまたセツルメントパターンの変化のひとつの結果だったものと考えられる。

前註1引用の駒井氏編文献、同37引用の駒井氏他文献、同66引用の文献、および同70文献等参照。

落のあり方に対して、さきに、筆者が、刻文系の土器群の製作・使用者達の集落があったものと考えた禅龍寺遺跡・ウエンベツ河口遺跡では、これまでに知られる資料・データによってみるかぎり、貼付文土器群の製作・使用者達に関しては、その遺跡としての様相は、にわかに曖昧になってしまうようである。禅龍寺遺跡では、かなり新しそうな特徴をもつ貼付文土器¹²⁶のみが知られており、ウエンベツ河口遺跡では、かつて貼付文土器が採集できたという情報はあがるが、現在確認できない。あるいは、こうした状況は、貼付文土器群の製作・使用者が、斜里川河口域を、積極的な形では、すでに利用しなくなっていたことを示すものではあるまいか¹²⁷。

126) 前掲の第15図9～13にみるように、禅龍寺遺跡発見の貼付文土器には、いずれも2本の直線状の貼付文の間に波状の貼付文をはさむ文様単位がみられる。こうした文様単位は、前註34文献には示されていないが、貼付文土器群のうちでも後出の文様単位かと考えられる。

127) すでにみてきたように、禅龍寺遺跡では、典型的な貼付文土器が確認されている。これらは本遺跡でどんなあり方をしていたのであろうか。筆者は、前註7引用の文献で、貼付文土器群の製作・使用者達がキャンプサイトを残していないことを指摘した。その後の新しい資料・データによってみても、こうした指摘は撤回する必要はなさそうである。それでは、禅龍寺遺跡には、そのグループの堅穴住居址があり・集落が残されていたのであろうか。知られる資料・データからみれば、そう考えることもまた、いささか困難のようである。さきにふれた知床半島南東岸の合泊遺跡では、前註7引用の文献および同22文献で、筆者はそれを刻文系の土器群の製作・使用者にかかるキャンプサイトと考えたのだが、前註98文献にみるように、そこには、僅かではあれ、貼付文土器が発見されている。同様に、下記文献に報じられたトーサムボロ・オホーツク堅穴群でも、堅穴住居址・貝塚は刻文系の土器群の製作・使用者達にかかるものらしいが、やはり少数の貼付文土器が発見されている。これらの貼付文土器の意味・性格は残念ながら明らかであるとはいえないが、この禅龍寺遺跡の場合も、一応、これらに類するものと考えておきたい。

北構保男・須見洋「北海道根室半島、トーサムボロ・オホーツク式遺跡調査報告」『上代文化』第24輯、1953。

ちなみに、本文にいう想定を認めるとすれば、遺跡としての禅龍寺遺跡・ウエンベツ河口遺跡の推移は、ふたたび、貼付文土器群の製作・使用者達によっては利用されなくなる三本木遺跡のそれと、軌を一にするものといえそうである。もっとも、知床半島南東岸の『地域集団』の場合、詳細なお明らかでないが、『松法町遺跡』で、

これらの状況によって考えれば、知床半島北西岸におけるオホーツク文化にかかる『地域集団』において、そのあり方の「変革」は、現象的には、かつて集落として利用されていた斜里川河口域が「生活の場」としては放棄され、そこにあった集団は三つのほぼ等規模のグループに分解して、それぞれに、かつてキャンプサイトとして利用されていたウトロ付近・ルシャ付近・半島先端部に、集落を営むという形をとったものと考えられる¹²⁸。もちろん、こうした現象はひとつの結果にすぎなかったのであって、実は、その背後には『地域集団』の分解ないし変質という事象があったものと考えられよう。後にあらためて考えてみることにしよう。

さて、知床半島北西岸の『地域集団』の「変革」をこうした形で捉えるとすると、その結果としての半島先端部・ルシャ付近・ウトロ付近の集落の規模についても、ある程度まで推察することができるかもしれない。すなわち、もともと刻文系の土器群の製作・使用者達の『地域集団』の成員の数を100人前後と考えて¹²⁹、それが半島先端部・ルシャ付近・ウトロ付近に3集落が併存する形に

刻文系の土器群の製作・使用者達にかかる集落がすでに成立していたようであって、それと三本木遺跡との関係は、さらに考えてみる必要があるだろう。そうした点ではある違いがあるとしても、全体として、知床半島北西岸と同南東岸のオホーツク文化にかかる『地域集団』の動向は、明らかな類似をもっているようにみえる。

128) こうした「変革」が、全く突然に・一挙に起ったものではなく、おそらく、ある時間的な経過のうちに・漸移的な形で進行した変化の結果だったろうことは、前註22文献にすでに述べたところである。さきにみた、ウトロ遺跡における『オホーツク土器c群』を伴出した堅穴住居址は、そうした漸移的な経過の一端だったかもしれない。ついでにいえば、こうした「変革」が、ほぼ貼付文土器群の成立と連動するような形で起っていること、しかし、それはいわば偶然にすぎなかった・両者の間には必然的な関連はなかったであろうことも、前註22文献にすでに指摘している。

129) 前註7引用の文献参照。

なお、筆者はさきに、キャンプサイトの消長とからめて、この地域の『地域集団』の成員数が増大していたことを考えた。誤りを恐れずにいえば、最初にこの地域にあらわれたオホーツク文化の荷負者の数、つまり、当初のこの地域の『地域集団』の規模は、おそらく、50人前後だったかと考えている。本文にいった100人という数は、「変革」の起る直前のものと考えて載いてよい。

なった時、過大かもしれないが、かりに、それが倍増して、200人前後になっていた¹³⁰とすれば、これを三等分して、一集落当り70人弱程度の規模が想定されることになろうか。オホーツク文化にかかる一堅穴住居の居住人員は10~30人・平均15.6人と考えられる¹³¹ので、単純に計算して、一集落に4戸くらいの堅穴住居があったことが考えられることになる。もっとも、これは想定しうる最大値に近い¹³²ので、一般には、2~4戸程度が考えられてよいことになろう。

こうした想定の上に、立戻って、知床岬遺跡の堅穴群についてみると、本遺跡で確認できるオホーツク文化にかかる住居址と推定される28個の堅穴は、当然であるが、同時に、一時点に住居としてあったのではないことが想定できることになろう。それらは、ふたたび単純に計算して、7~14回にわたって、おそらく、10回くらいは建替えられていたものと考えられる。つまり、本遺跡における堅穴群の配置は、結果としてできあがったものであって、意識的に企画されたものではなかったであろう。それも、多分、香深井A遺跡について筆者が考えたように、遺跡全体が堅穴住居・そこに住んだ世帯ごとに区画され、その区画の中で転々とその位置を移していたのではなく、2~

4戸の堅穴住居が、一団となって、その位置を移していたのではあるまいか¹³³。つまり、たとえば、はさみ岩湾の東・啓吉湾との間にある突出部上の一団・4個の堅穴、同じくはさみ岩湾の西・文吉湾との間にある突出部上の2個の堅穴は、あるいは、ある一時点で本遺跡にあった集落の形を、そのまま示すものである可能性がある。そして、もしこのように考えることができるとすれば、本遺跡の1962年度調査で確認された墓址についても、堅穴群との重複は、問題にしなくてもすむのかもしれない。この墓址が発見された付近に堅穴住居群が作られた時期には、その墓域は、それがどこにあったかは不明とせざるをえないが、すでに他に移っていたと考えればよいことになろう。

こうした知床岬遺跡の集落に関する想定は、当然、他の貼付文土器群の製作・使用者達の集落——この場合、ルシャ付近のそれおよびウトロ付近のそれ——についても、同様に適用することができるのであろう。実は、さきに筆者はいささか不用意にそういったのだが、ポンベツ遺跡における下段の堅穴群と上段のそれとの関係が、またウトロ遺跡・チャシコツ岬上遺跡・チャシコツ岬下B遺跡におけるそれぞれの堅穴群の関係が、『その間を(世代の交替はあっても)ひとつの集団が順次移動する形で、中断を含まずに、引続いて集落としてあり続けたもの』であったと考えるためには、その背後に、こうした集落の構成についての考定がなければならなかった筈なのである。

さて、筆者は、さきに、なお疑問が残っていることを認めた上で、仮説的に、斜里町管内・知床半島北西岸のオホーツク文化にかかる遺跡群が、一群の・一『地域集団』の存在を示すものであろうことを考えた。そして、刻文系土器群の製作・

130) もちろん、新しいセツルメントパターンが成立した時点で、この『地域集団』が、すでにこうした規模に達していたとは考え難い。多分、その規模はもっと小さかったものと思われる。しかし、成員の増大の傾向はなお続いていたものと考えられるし、少なくとも、ある時点では、この程度の規模に達していたことは考えられてもよいのではあるまいか。

なお、最近、大泰司紀之氏も、下記の文献で『一応の見当をつけるために推定した暫定的な』ものと断った上で、知床半島北西岸の『地域集団』における一時期の人口を200と考えておられる。こうした推定は、小論に筆者がいうところと結果的に一致するが、その細部では、筆者の想定とはある喰いちがいがあろうである。大泰司氏の推定と筆者のそれとのちがいは、氏が斜里(?)に『貼付浮文系土器グループ』の一集落を考えられること、ウトロ遺跡およびチャシコツ岬下B遺跡のふたつの集落の併存を考えられること等である。

大泰司紀之「北方狩猟民の生活カレンダー——オホーツク文化期の狩猟と漁撈——」『考古学ジャーナル』223、1983。

131) 前註63引用の文献。

なお、前註7文献の註6)をも御参照戴きたい。

132) 前註130を参照されたい。

133) こうした想定は、筆者の場合、これらの想定しうる2~4戸の堅穴住居相互の関係を、どう考えるかに関わる問題である。香深井A遺跡の場合、筆者は『世帯は相互にかなりの独立性をもっており、集落全体としての組織原理の枠はあるとしても、基本的には自立的な集団だったと見え』たのであり、上にいう集落の構成は、そうした理解の結果として想定されたものである。筆者は、本遺跡の場合、堅穴住居・そこにあった世帯相互の関係は、香深井A遺跡の場合とは異なり、かなり緊密な連関のもとにあったものと考えようとする。本文にいうところは、そうした理解・考定にもとづく想定である。詳細は、後に、あらためてふれるところがあろう。

使用者達については、そうした捉え方が妥当であろうことをすでに指摘した。それでは、ここにみてきた貼付文土器群の製作・使用者達の場合はどうであろうか。上にいう三つの集落のうち、最も西に位置するウトロ付近のそれから、つぎに認められる貼付文土器群の製作・使用者達の集落・モヨロ貝塚までの間には、実に90km程の空隙がある。同じくその最も東に位置する知床岬遺跡から、半島南東岸の最北の集落・トビニタイ遺跡までは、すでにみたように40km程の距離がある。しかも、トビニタイ遺跡の南には、僅かに8km弱の間隔で、もうひとつの集落・「松法町遺跡」が認められているのである。つまり、相互に20km程の間隔を置いてある知床半島北西岸の3集落が、他とは区別される・一群のものとしてあったことは、この場合、問題なく承認されてよいかと思われる。結局、知床半島北西岸のオホーツク文化にかかる遺跡群は、刻文系の土器群の製作・使用された時期から貼付文土器群の盛行する時期まで、すなわち、この地域にオホーツク文化の荷負者があった期間を通じて、一貫して、一群のものとしてあったことが認められてよさそうである。そこでは、上にみてきたように、その遺跡群のあり方・セツルメントパターンに明らかな変化が起っていたとしても、つまり、それぞれの集落相互の関係にある変化が起っていたとしても、いずれかの形でそれらの成員が、他とは区別される、一「地域集団」としてあり続けたものと考えられよう。

4

最近、大泰司紀之氏は、現在の知床半島の自然生態系・特にその動物群集の調査成果にもとづいて、オホーツク文化のおこなわれた時期の動物群集を復元し、「当時の環境における各狩猟対象動物の収容力やその年周期の移動・回游季節」を考え、その上に立って『オホーツク文化期の狩猟・漁撈活動のおおまかな復原を試みて』おられる¹³⁴。氏の『暫定的結論』は、氏のいわれるとおり、筆者らの『結論と異なるものである』が、また筆者は氏の『暫定的結論』が必ずしもより妥当であると考えerわけでもない¹³⁵が、筆者にとって、多く

の点で、きわめて示唆に富むものであるとってよさそうである。すでに述べたように、ここにとりあげている斜里町管内・知床半島北西岸のオホーツク文化にかかる遺跡に関しては、その生業を考える際に最も直接的な材料となるべき動物遺存体についての記載・研究が不充分であるために、いわば資料・データの不足によって、立入った議論ができないのは遺憾であるが、大泰司氏の試みに便乗して、いささかそうした問題についても考えておくことにしよう。

大泰司氏の『暫定的結論』のひとつの特徴は、「捕鯨やサケ・マス漁の比重が考えられてきた以上に大きいという可能性」を考えられたところにある。

筆者は、オホーツク文化の荷負者達の「捕鯨」・そのもちうる意味については、すでに、両三度にわたって、ふれたことがある¹³⁶。そこで、筆者は、オホーツク文化の荷負者が、積極的な形では「捕鯨」をおこなってはいなかったであろうこと、その生業として「捕鯨」がそれほど大きな意味をもってはいなかったであろうことを述べたのだが、それは、必ずしも動かし難い論拠によるものではなく、むしろ、関係するであろう資料・データの総合的な評価にもとづく、いわば消極的な、推論だったのである。その後、こうした問題に関して、

135)大泰司氏自身、その論文のおわりに「今後さらに、この文化の地政的位置づけや技術体系を含めて検討を行なう必要を」認めておられるのだが、筆者は、前註19文献の註63)にもいうように『集落(もっと一般的には、遺跡……筆者追加)の立地する環境のみを材料として、その集団の生業を考えようとするには、論理的にかなりの無理がある』だろうと考えている。つまり『問題は、その集団が与えられた・あるいは選択した環境を、どの範囲で・どのように利用するかにかかるのであって、それは明らかに集団によって様々でありうる筈であり、この場合、たとえば知床岬遺跡を例にとりていえば、ここに遺跡を残した続縄文文化の荷負者とオホーツク文化の荷負者は「その環境にそれぞれに異なった形で対応し・働きかけていたのであり、まさに「そうしたちがいがこそが、両者の「特徴」「特質」を形作るもの」なのである。われわれは、そこに「続縄文文化」と「オホーツク文化」との差異の一端を、それもきわめて重要な意味をもつ差異の一端を、認めることができる筈なのである。

136)大井晴男「オホーツク文化の船」『北方文化研究』第10号、1976。

および前註25・同66引用の文献。

134)前註130引用の文献。

特に新たな資料・データも提供されていない以上筆者がここでもう一度同じ議論を繰返すことは無意味であろうし、同時に、大泰司氏の推論を積極的に否定することもまたできないのである。ただ、あえて付加しておくとしたら、名取武光氏の報告された『噴火湾アイヌの捕鯨』¹³⁷は、いわば異常ともいえる・しかも必死の“武勇伝”であって、それは、特にイルカ類を超える大型の鯨類を対象とする場合、こうした形の「捕鯨」がいかに困難であるかを、否むしろ、いかに危険を伴うものであるかを、如実に伝えるものであるといつてよいのではあるまいか。筆者は、かつて『オホーツク文化の船』について考えたことがある¹³⁸。そこで、筆者は、オホーツク文化の荷負者達に『数人の漕手を乗せたやや大形の』『板張船』があったことを想定した。また、オホーツク文化の荷負者達が、アイヌ族に比して、より海洋的環境に適応を果していたことも事実であろう。しかし、いかに海洋適応を遂げているようにも、アイヌ族のそれと大差のない、この程度の船によって、イルカ類を超える大型の鯨類を追い・捕えることは、やはりきわめて困難であり・危険だったのではないかと思われる。筆者は、かくて、オホーツク文化の荷負者達の「捕鯨」については、なお積極的に評価するわけにはゆかないのである。

サケ・マス漁についても、それをどう評価するか、具体的・決定的な資料・データに欠ける点では断断である。ただ、この場合は、それらについてどんな漁法を考えるかが、あるいはひとつの鍵を提供するものになりうるかもしれない。たとえば、貼付文土器群の製作・使用者の集落についてみると、知床岬遺跡は、付図1にも明らかなように、付近にサケ・マス類の遡上する河川をもっていない。同様に、ポンベツ遺跡についても、やや離れたルシャ川・テッパンベツ川の方が、サケ・マス類の遡上河川としては資源量が大きかった筈であり、もしオホーツク文化の荷負者がその産卵遡上群の捕獲を主要な生業の一端としていたとすれば、集落としてのポンベツ遺跡の立地は理解し難いものとなる。そうした事情は、チャシコツ

岬上遺跡・チャシコツ岬下B遺跡についても同様である。つまり、これらの集落遺跡の立地から考えるかぎり、オホーツク文化の荷負者達は、河川におけるサケ・マス類の産卵遡上群を対象とする漁撈をおこなっていなかったことを、あるいは、少なくとも、それが主要な生業とはなっていなかったことを、考えざるをえないことになる。そして、そうであるとすれば、『春先のサクラマスから冬期に至るシロザケまで』が『重要な捕獲対象になった』と考えるためには、それらの漁獲は、河川においてではなく、沿岸でおこなわれていたものと考えられなければならないことになる。その場合、考える漁獲方法は、多分、延縄を含む釣漁あるいは網漁のいずれかであろうが、そうした漁法を考える場合、釣漁は当然として、網漁についても、現在使われているような大型の網を考えることはできないと思われる¹³⁹ので、それほど大きな漁獲を考えることは、おそらく、困難であろう。もちろん、これまでに知られるオホーツク文化にかかる諸遺跡の動物遺存体のうちにはサケ・マス類が含まれている¹⁴⁰ので、それらがオホーツク文化の荷負者達によって漁獲されていたことはたしかである。しかし、ここでも、筆者は、彼等の生業の一部としてのサケ・マス漁の比重をそれほど大きなものとするには、同意するわけにゆかないのである¹⁴¹。

139)前註66引用の文献434・435頁、および同458・459頁を参照されたい。

140)金子浩昌「栄浦第二、4、7、8、11、12号竪穴に伴う動物遺骸の概要」前註97報告書に付篇2として所収、1972。

および前註25・同66引用の報告書、同70報告書、同71引用の報告書、同101引用の北地文化研究会報文等。

141)こうした問題に関しては、直接オホーツク文化に関する発言ではないが、下記文献の渡辺誠氏の発言が示唆的であろう。

渡辺誠『縄文時代の漁業』雄山閣、1973(特にその第5章第2節)。

ちなみに、いわゆる「トビニタイ文化」の荷負者達に関しては、あるいは、全く別に考えなければならないかもしれない。たとえば、最近刊行された標津町カリカリウス遺跡の発掘報告書では、きわめて微量のサンプルしかえられなかった12号竪穴住居址を除いて、他の12戸の全ての竪穴住居址のいずれもから、サケ類の遺存体が確認されている。これらの動物遺存体を同定された西本豊弘氏は「当遺跡でサケ類が主要な食料のひとつとして

137)名取武光『噴火湾アイヌの捕鯨』『北方文化研究報告』第3輯、1940。

138)前註136文献。

こうした『可能性』を除外して考えるとすれば、氏の『暫定的結論』は、ただちにそれをオホーツク文化一般に敷衍することはできないとしても、道東部の・特にこの場合知床半島北西岸の『オホーツク文化期の狩猟・漁撈活動のおおまかな復原』として、多くの点で、的を射たものといわれてよいのではないと思われる。

ただ、ここで注意されなければならないことは、すでにさきに述べたように、また大泰司氏もその所論のうちで指摘されておられるが、各年毎に変動はあるにせよ、平均して一月下旬から三月下旬におよぶ流水の接岸する時期には、海におけるほとんどいっさいの生産活動が停止されなければならないと考えられることである¹⁴²。陸上の狩

利用されていたことは明らかである」と書かれているのである。おそらく、それは西本氏のいわれるとおりなのであって、その遺跡立地から考えれば、河川・この場合ポー川でのサケ類の漁撈が、彼等・いわゆる『トピニタイ文化』の荷負者達（もっとも、この遺跡の堅穴住居址群を『トピニタイ文化』にかかるものとするかどうか、全く問題がないわけではないかもしれない）の生業の、かなり重要な一部をなしていたことは、ほとんど疑問の余地がなさそうである。サケ類の遺存体は、下記の報告にみられるように、斜里川河口に近い須藤遺跡でも確認されている。これらの事例から考えれば、いわゆる『トピニタイ文化』の荷負者達の場合、一般に、河川でのサケ・マス類の漁撈が、その生業の無視できない一部となっていたことが想定されてよいのかもしれない。前註87にふれたその集落遺跡群のあり方も、これと関連して考えられるべきものかもしれないと思っている。あらためて検討・討論してみたいと考えている。

西本豊弘「カリカリウス遺跡出土の動物遺存体」稲田光明・稲田美枝子『伊茶仁カリカリウス遺跡発掘報告書——昭和56年度 標津遺跡群保存修理事業——』標津町教育委員会に所載、1982。

西本豊弘「須藤遺跡出土の動物遺存体」前註1引用の金盛氏他報告書に付編2として所収、1981。

142) 下記の文献で、金子浩昌氏は、流水の接岸する時期のコマイ漁の可能性を検討する必要があることを述べておられる。たしかにそうした可能性は絶無ではなかったと思われるが、これまでに知られる資料・データから考えるかぎり、それがオホーツク文化の荷負者達の生業の主要な一部をなしていたと考えること、つまり、流水の接岸する時期の彼等の生活を支える役割を果たしていたと考えることは、おそらく、できないものと思われる。金子氏も、そうした可能性を示唆されるとしても、明言されてはいないが、そこまで考えてはおられないであろう。

金子浩昌「オンネモト遺跡出土の動物遺存体および未

猟活動もまた、これを補完するものではありえなかったであろう¹⁴³。そうであるとすれば、この時期の彼等の生活は、当然、ほとんど全く備蓄に頼らなければならないと思われる。しかし、大泰司氏の示される『オホーツク文化の狩猟・漁撈カレンダー』によれば、そうした備蓄がおこなわれなければならないと思われる十一月から一月にかけて、特にそれを可能とするような、つまり、いちじるしく高い生産性を期待しうる、狩猟・漁撈対象は指摘し難いようにみえる¹⁴⁴。それにもかかわらず、たしかに流水によって海の閉ざされる時期はあったのであって、その期間の生活を維持するための備蓄は、それがどのような形でおこなわれたかは遺憾ながらなお明らかではない¹⁴⁵が、当然、なければならない筈なのである。

あるいは、まさにそれこそが、この地域におけ

製骨角器」前註70報告書に付篇1として所収、1974。

143) 前註115を参照されたい。

なお、大泰司氏も、前註130引用の文献中で、『シカの捕獲しやすい時期』が『流水の結氷期と一致』することを述べておられるが、『食肉』の『供給源』としてのシカの意義は、必ずしも大きくは評価しておられないようである。

144) 前註130引用の文献、図2を参照されたい。

なお、図中にやや大きく示されているシロザケについては、すでに本文中に評価し難いことを述べた。もうひとつの例であるオットセイについては、少なくとも道東部オホーツク海岸・根室水道沿岸では、現在のその回遊状況から考えて、多くを期待するわけにはいかないであろう。実際、『北海道アイヌのアザラシ及びオットセイ狩り』に関する犬飼哲夫・森樊須両氏の下記の報文でも、この地域では『極めて稀にオットセイを見る丈である』ことが述べられている。

犬飼哲夫・森樊須「北海道アイヌのアザラシ及びオットセイ狩り」『北方文化研究報告』第11輯、1956。

なお、現在のオットセイの回遊状況については、下記の文献を参照した。

和田一雄「三陸沖のオットセイの回遊について」『東海区水産研究所研究報告』第58号、1969。

和田一雄「オットセイの回遊について」『東海区水産研究所研究報告』第67号、1971。

145) 全く根拠を欠く推測にすぎないが、上に引いた大泰司氏の『オホーツク文化の狩猟・漁撈カレンダー』によって考えるとすれば、流水の接岸する直前の時期にあらわれるトド・ゴマフアザラシ・フィリアアザラシ・アゴヒゲアザラシなどの海獣類が、その主要な部分をなしていたのかもしれないと思っている。さらに今後の調査・研究に俟ちたい。

道北部のそれに類似の『地域集団』のうちにあった“矛盾”だったのかもしれない。すなわち、中核的・定着的な集落に『地域集団』の成員の全てが集結したとしても、その全成員をよく支えうる・(道北部における産卵群を対象とする漁撈のような)生産性の高い生業形態が期待できず、しかも、まさにその時期に、流水によって海が閉ざされる期間のための備蓄がおこなわれなければならなかった、つまり、そこでは、さらなる生産の強化が必要だった筈である。そうした生産の強化は、おそらく、従来の中核的・定着的な集落からの活動範囲・漁猟場の範囲では、困難だったのではないかと思われる。その範囲での急激な生産の強化は、漁猟場の荒廃につながりかねない危険性をはらんでいた筈である。そうした生産の強化は、したがって、その活動範囲を拡げることで果されていたのではあるまいか。

たしかに、少なくともある期間——刻文系の土器群の製作・使用がおこなわれていた期間——は、それはそれなりに果されていたものと考えられる。しかし、活動範囲を拡大することは、一方で、漁猟場への移動の時間を含めて、単位時間当りの生産性の低下をもたらした筈である。そこには、あえていうとすれば、少なからぬ困難・無理があったのではないだろうか。しかも、そこでは、すでに述べたように『地域集団』の成員の数的な増大がおこっていた可能性がある。それは、上述の困難・無理をさらに増幅させることになったであろう。こうした経過のうちに“矛盾”は、とめどもなく、いわば成長していったのではあるまいか。そして、こうして成長した“矛盾”がそれまでにあった『地域集団』のあり方を支えていた論理¹⁴⁶を超えた時に、さきに述べた『地域集団』の「変革」がおこったのであろう。

そこにおこった『地域集団』の「変革」は、すでに考えたように、この場合、かつてあった『地

域集団』が、最終的には、三つに分解する形をとってあらわれたようである。すなわち、知床半島北西岸には、半島先端部・ルシャ付近・ウトロ付近に3集落が併存するような『地域集団』のあり方・セツルメントパターンが成立するのである¹⁴⁷。そして、そこでは、かつてあった季節的な移動はすでにおこなわれなくなり、彼等は、周年、それらの3集落に定住したものと考えられる。ついでにいうとすれば、この時点で、かつて集落が作られていた斜里川河口域が集落の場所として選ばれていないことも、注意さるべきかもしれない。それは『道東型のオホーツク文化』の荷負者達の生業大系に関して、斜里川河口域よりも、むしろ半島先端部・ルシャ付近・ウトロ付近の方が、より好適な環境的条件を備えていたことによるのであろう¹⁴⁸。

こうした経過のうちに成立した新たな3集落にあった人間集団は、それでは、いったいどんな集団だったのであろうか。

筆者は、さきに、この地域にあった『地域集団』の成員が、その数において、増大していたことを考えた。それは、おそらく、他の地域からの別の集団の移入の結果ではなく、原則として、この地域にあった『地域集団』の成員の、いわば自然増だったものと考えられる¹⁴⁹。つまり、この『地域

147) これらの3集落にあった人々が、かつてあった知床半島北西岸の『地域集団』——斜里川河口域に中核的・定着的な集落をもち、知床岬遺跡・ポンベツ遺跡およびウトロ付近にそれぞれにキャンプサイトをもっていた『地域集団』——のメンバー・ないしその後裔であり、他の地域から別の集団がはいったものではないであろうことは、筆者が、前註7引用の文献の註94)にすでに述べたところである。

148) あるいは、そもそもかつて斜里川河口部に中核的・定着的な集落が作られたのは、生業のために好適な環境があったためではなかったのかもしれない。むしろ、それは、なんらかの——それが何であったか、遺憾ながら、なお明らかではないが——他の事由によって選択されていたのかもしれないのである。こうした事例は、かつてあったセツルメントパターンにおける集落の意味を考えるための、ひとつの手掛りとなりうる可能性があるであろう。

149) 前註147を参照されたい。

もっとも、一般に『地域集団』が外婚的集団であったと考えて、ここでは、その婚後居住形態が夫処婚であったにせよ妻処婚であったにせよ、あるいは選択居住制であったとしても、婚出・婚入による成員の動きがバラ

146) 前註7引用の文献の114・115頁にもふれたが、実は、筆者には、この論理がどんなものであったのか、なお明らかであるとはいえない。しかし、道東部での場合のように、明らかに異なった環境のもとで、少なくともある期間、かなりの困難・無理を冒してまでそれが貫かれていたことからみれば、それは、単なる経済的な問題・論理ではなかったものと考えなければならぬようである。さらに後考に俟ちたい。

集団」を構成する、おそらく複数の、血縁的集団の規模もまた増大していた筈であって、さきにくい『地域集団』の分解によってあらわれた新しい3集落は、そうした血縁的集団を単位として——あるいはひとつの血縁的集団が複数の集落を作る場合もあったかもしれないが、そうしたケースをも含めて——成立していたのではあるまいか。

この地域・知床半島北西岸のオホーツク文化の荷負者達の数的な増大は、おそらく、こうしたセツルメントパターンの成立した以降も、なお続いてきたものと推定される。筆者は、さきに、これらの新たに成立した3集落について、ある一時点に、それぞれ2～4戸の竪穴住居があったことを想定したが、そうした想定もまた、この人口の増大という推定の上に立つものだったのである。つまり、ここでは、かりに最大の4戸を考えるとしても、それらは、多分、ひとつの血縁的集団の数的な増大の結果としてあった・同じ血縁的集団に属するものであったと考えようとするわけである。

こうした想定の当否はともあれ、かつてあった『地域集団』の領域内に3集落が併立するようなセツルメントパターンが成立した状態で、知床半島北西岸にあったオホーツク文化の荷負者達の地域社会¹⁵⁰の成員相互の関係は、かつてあった『地域集団』の成員相互の間にあったそれとは、明らかに異なっていたものと考えられよう。すなわち、3集落が併立する形の場合、それぞれの集落の領域は明らかに区分され・相互に重なり合うことはなく、また、個々の集落の領域は一体のものであり、さらに細分されてはいなかった可能性が大きい。つまり、ここでは、個々の集落はより強い自立性を持ち、さらに、これらの集落を構成する2～4戸はより緊密な関係を取結んでいた、いわばひとつの共同体的なものとしてあったことが想定されてよさそうである。そこで、かつてあった『地域集団』の成員の間に、原則として、たとえばキャンプサイトについてある一定の領域があったとしても、知床半島北西岸一帯に関して共通の領域意識があったと考えられるのに対して、個々

スしていたという想定にたっている。おそらく、こうした想定は、ほぼ容認されてよいであろう。なお、こうした問題に関しては、前註7引用の文献の註58)を御参照いただきたい。

150)前註89を参照されたい。

の集落の領域についての意識がより強く、知床半島北西岸一帯に関する共通の領域意識は、少なくとも相対的には、稀薄になっていたのではないかと考えられる。

もちろん、かつてあった『地域集団』が、全くその実体・機能を失ってしまったわけではないのであろう。さきにもみたように、これらの3集落の分布は、明らかに、それらが『他とは区別される・一群のものとしてあったこと』を示しているようである。たしかに、上にみたように、各集落が独自の領域をもち・より強い自立性をもつようになっただけ、それだけ『集団』としての結合・規制は、相対的に、弱くなっていた可能性が大きいように思われる。それにもかかわらず、なおこうした集落の分布が認められることは、自他ともにその『集団』を一『集団』として認めていたこと、そして、それが具体的にどんなものであったかはなお明らかではないが、いずれかの形で『集団』としての活動——たとえば、いずれかの祭祀・儀礼など——があったことを反映するものではないかと考えられる。そうした意味では、かつてあった『地域集団』は、たとえそこに無視できない程の変質があったとしてもなお、やはり一『地域集団』としてあり続けたものといわれてよいのではあるまいか¹⁵¹。

151)筆者は、前註89に『任意のある遺跡を正當に理解し・評価するためには』『隣接するものを含めた複数の「地域社会」相互の関係が、あるいは、オホーツク文化の荷負者以外の、他のグループのそれとの関係が、さらに考慮される必要があるかもしれない』ことを指摘した。しかし、すでに予定の紙数を大幅に超過してしまっているために、遺憾ながら、これらの問題について、ここに詳論することはできそうもない。したがって、ここでは、直接関係するかもしれない2,3の問題についてのみ、補足的に、ふれておくことにしたい。

そうした問題のひとつは、婚姻圏の問題であり、あるいは、それと直接に関わるかどうかはともかく、複数の『地域集団』を含むより大きな社会組織の有無・それがもしあるとすればそれと個々の『地域集団』との関係の問題である。前註149にもふれたように、もしこれらの『地域集団』を外婚的集団であったと考えるとすれば、複数の『地域集団』の間には、それが女の交換であったにせよ男の交換であったにせよ、その成員のなにかが交流があった筈である。そして、そうした成員の交流は、いずれかの形で、それらの『地域集団』相互のあり方に影響をもったことが考えられてよからう。具体的に

それがどんな形をとってあらわれたか、少なくとも現状では、明らかであるとはいえない。しかし、そうした関係を無視して、ある『地域集団』を孤立的な形で捉えたとすれば、そこでは、おそらく、ある歪みが避けられないことになろう。筆者はかつて、前註7引用の文献で、土器群の型式論的類同から、『オホーツク文化の後半の時期に』『札文島・利尻島・宗谷湾周辺・枝幸町周辺をそれぞれの領域とする地域集団』によってなる『地方群』の存在を考え、それらの間に『相互的・恒常的な通婚関係があった』ことを想定した。そして、たとえ『きわめてルースなものであった』にせよ、ひとつの社会組織としての『地方群』は、その傘下にあった複数の『地域集団』にながしかの規制を与え、それらが、いずれかの『特別な関係を取結んでいたこと』を考えたのである。筆者は、同時に、道東部についても、類似の土器群の型式論的類同が認められること、したがって、類似の『地方群』の存在が考えられてよいことを述べながら、それが『地域的な拡がりでもまたその規模でも、あまりに大きすぎる』という理由で、婚姻圏を超えた、ある『政治組織』にまで成長していたことを想定した。こうした想定を認めるとすれば、われわれは、一方で、『政治組織としての地方群』の性格・意義について、その傘下にあった『地域集団』に対する規制について、あるいは『地域集団』に与えたその影響について、それぞれ考えなければならぬのと同時に、それとは別に、そのうちにあった(おそらく複数の)婚姻圏について、そうした婚姻圏を構成した複数の『地域集団』相互の関係について、考えてみなければならないことになろう。これらの問題について考えるための資料・データは、今のところ、(遺構を含む)遺物・遺物群の型式論的対比以外にないのかもしれない。たとえば、そうした事例として、筆者は、さきに土器群の型式論的類同についてふれたが、それ以外にも、道東部のオホーツク文化に特有であり・かつそれらに共通する要素は、けっして少ないとはいえないようである。思いつくままにあげても、身部が五角形を呈する有柄の石鏃・横に並ぶふたつの索孔をもつ骨角製回転式銚頭・カエリをもつ骨角製銚頭・住居内の方形を呈する石囲炉・同じく住居内の2箇所ないしそれ以上におよぶ獣骨の儀礼的集積等、容易にいくつかの事例をあげることができる。こうした事例が、道東部のオホーツク文化にのみ・共通してあることは、そこに、こうした共通の要素をもたらすにたる情報の流通があったことを意味する筈であり、それを可能にする人的な交流があったことを意味する筈である。あるいは、こうした事例を丹念に検討してみることによって、われわれには、こうした情報の流通・人的な交流を解明することが可能になるかもしれないし、また、それらを介して、上にいう『政治組織としての地方群』の実体の解明にアプローチすることができるかもしれないと思われる。また、こうした広い地域におよぶ共通の要素の存在とは別に、もっとミクロな型式論的特徴も、注意される必要がありそうである。筆者はなお充分な検討を果していないが、たとえばモヨロ貝塚出土の貼付土器と常呂町の諸遺跡出土のそれと

を比較すると、後者のやや粗放な造りに対して、前者の繊細さ・巧緻さが印象的である。この場合、その一般的な型式論的一致とは別の形で、それらのちがいは(それもまた確かに型式論的な特徴のひとつではあるが)土器群の製作者集団のちがいを反映するものかとも考えられる。こうした想定を認めるとすれば、あるいは、われわれは『政治組織としての地方群』のうちでありえた(たとえば婚姻圏を示すような)もう少し小さい集団を確認し・そのあり方を考えることも、あながち不可能とはいえないのではあるまいか。さらに今後の課題としたいと考える。

(ついでにいえば、最近、天野哲也氏が下記論文に示された『岩石学的方法による土器の分類と製作地推定の試み』は、氏らの結論にはいくつかの点で同意し難い点があるとしても、こうした問題を考えるために示唆的であろう。この場合、香深井A遺跡出土の土器群の中に、確実に他の地域で製作された土器が含まれることが明らかになったことは、きわめて興味深い。ここで残された問題は、氏らもいわれるとおり『土器の移動とは何を意味するのかという問題』、つまり、それをどう理解し・評価するかという問題であろう。そこでは、問題は、上に述べてきたところに直結してくる可能性がある。今後の研究の発展を期待したい。

天野哲也・大場孝信「岩石学的方法による土器の分類と製作地推定の試み」『北方文化研究』第16号、1984.)

もうひとつの問題は、オホーツク文化の荷負者と擦文化の荷負者との関係の問題である。筆者は、かつて、前註82引用の論文「擦文化とオホーツク文化の関係について」の中で、両者が『そのある部分において時間的に平行して存在したとしても、それぞれその分布圏を異にしていたものと考え』て、そうであるとすれば『これらの間に相互の影響が認められないことは、何ら異とするに足りない』と述べたことがある。こうした問題に関する筆者の見解は、現在でも変わっておらず、おそらく、それはそのとおりであろうと考えている。しかし、その後の調査をも含めて、(特にその終末期に近い)オホーツク文化にかかる遺物群のうちに、擦文化式土器ないし擦文化に由来する遺物が発見される事例が、間々みられることもまた事実である。つまり、両者が『分布圏を異にし』ていたとしても、両者の間に、なながしかの・いずれかの形での、接触・交渉があったことは疑うべくもないのであって、両者の間に(それぞれの遺物群に関して)『相互の影響が認められない』としても、この場合、オホーツク文化の荷負者達のあり方に、全くその影響がなかったと断言してしまうわけにはゆかないのかもしれない。たとえば、さきに前註124にもふれたように、オホーツク文化にかかる集落が『ある時期以降、その立地として、海浜を離れて、やや高い台地あるいは丘陵上を選択するようになる傾向がうかがえるらしい』こともそれと無関係ではないかもしれないし、また前註22文献にいうように『II C型の集落の成立』に『擦文化の荷負者との関係がひとつの要因になっていたかとも考えられる』のもそうした例であろう。さらに、前註7引用の文献にいうよ

以上に、筆者は、多くの頁を費して、斜里町管内・知床半島北西岸のオホーツク文化にかかる諸遺跡について記載し、それらのあり方を検討してきた。もちろん、さきの記載にも明らかのように、それらの諸遺跡に関するわれわれの知見はなお全く不十分なものでしかないし、それらのあり方を検討するに際しても、われわれは、その多くの部分で、推測を混えて考え・議論せざるをえなかったのである。しかし、筆者は、以上の検討によって、知床半島北西岸のオホーツク文化にかかる諸遺跡・それらによってなる遺跡群のあり方について、ある見とおしを提示することができたのではないかと考えている。

筆者がここに提示した見とおしが当をえたものでありうるかどうかは、あらためていうまでもなく、その検証を、今後の調査・研究に俟つ必要がある。しかし、今後の調査・研究が、もし、全く白紙の状態からではなく、筆者がここに提示した見とおしから出発することができる、あるいは、少なくとも、こうした見とおしの当否の検討からはじめることができるとすれば、筆者が小論の筆を執った目的は、十分に達せられたとしてよいのであろう。また、そうした意味で、筆者のこの小論は、けっしていずれかの結論を提示するものではない——すでに繰返し述べているように、そのためには関係する資料・データはあまりに限られている——のであって、その多くを、筆者自身の

うに『道東部における政治組織としての地方群の成長』自体が、擦文文化の荷負者達との接触・交渉と無関係ではなかったかもしれないのである。もっとも、こうした想定をいずれかの資料・データによって論証することは、あるいは、きわめて困難なことかもしれない。しかし、逆に、擦文文化の荷負者達との関係を無視してこれらの事象を理解し・説明することは、おそらく、できないものと思われる。これもまた、今後の課題としなければならないであろう。

当然、こうした問題・擦文文化の荷負者達との関係の問題は、いわゆる『トピニタイ文化』の成立過程の問題に、つながってゆくことになる。前註1・87等にもふれたように、ここでもわれわれは多くの議論を必要とするものと思われるが、他日・稿をあらためて論ずることとし、ここにはふれないことにしたい。

それを含めて、今後の調査・研究に俟たなければならぬのである。

筆者がここに提示した見とおしを検証するためには、必ずしも、この地域・知床半島北西岸の關係する諸遺跡・遺跡群の調査・研究が絶対に必要とされるわけではないのかもしれない。筆者がすでに注意したように、道東部のいくつかの地域で、筆者が小論で考えてきた知床半島北西岸のそれに類する、オホーツク文化にかかる遺跡群が知られており、それぞれの地域的な環境条件のちがいで等によってある程度の差異は考えられるにせよ、基本的には、知床半島北西岸の場合と同様なあり方・経緯が想定されてよいと思われるからである¹⁵²。しかし、あるひとつの遺跡群に関して、知床半島北西岸の場合のように、そのかなりの部分が良好な状態で保存されている——それでもなお、さきの各遺跡についての記載にもうかがえるように、ウトロ遺跡・チャシコツ岬下B遺跡・禪龍寺遺跡・ウエンベツ河口遺跡等、ほとんど今後の調査にたえない状態にあるものが含まれるが——ケースは、実は、ほとんどないに等しいのである。つまり、われわれがオホーツク文化・特に道東部のオホーツク文化について、就中、その社会組織の実態・変遷までを含めて、トータルな形で考えようとする場合、斜里町管内・知床半島北西岸の当該遺跡群は、われわれに残されたほとんど唯一のフィールドなのではないかと思われる。その意味では、これらの遺跡群は、われわれに残された、きわめて貴重な・かけがえのない文化財(この言葉には、いろいろな意味で、少なからぬ抵抗があるが)だといわれなければならない筈なのである。しかし、遺憾ながら、現在の日本における文化財行政は、全く貧寒な状況にあるようである。そこでは目先の経済的効率のみを視野においた「開発」の論理が優先し、現状では、長期的な視野にたつ・まさに「保護」の論理にもとづく文化財行政は、およそ期待すべくもないらしい。こうした行政のもとで、はたして、どこまでこれらの貴重な遺跡群が「保護」されるか、むしろ危慮の思いのほうが強いのである。

さいわい、斜里町では、「知床百平方メートル運動」をはじめ、力強い自然保護運動のうねりがある。自

152) 前註22文献参照。

然保護の論理には、多くの部分で、文化財保護の論理と通じるところがあろう。筆者は、国の文化財行政に期待する以前に、斜里町民各位のそうした力に、もちろん筆者もこれに協力するにやぶさかでないが、これらのオホーツク文化にかかる遺跡群を含む斜里町管内の諸遺跡の、今後の有効な保護・活用を期待したいと思うのである。

平素からそうであるが、特に小論を執筆するに

あたっては、知床博物館に、就中、同学芸員金盛典夫氏に、大変お世話になった。末尾になったが、あらためて心から御礼申上げる次第である。なお、小論中に示した土器等の実測図・拓影は、大学院生小野裕子氏、および東田久美嬢をはじめ北方文化研究施設の多くの方々の御協力によるものである。明記して御礼申上げる。

On the Sites of Okhotsk Culture in Shari-Town,
N-W Coast of Shiretoko Pen., Eastern Hokkaido

Haruo OHYI

The Institute for the Study of North Eurasian Cultures,
Faculty of Letters, Hokkaido University

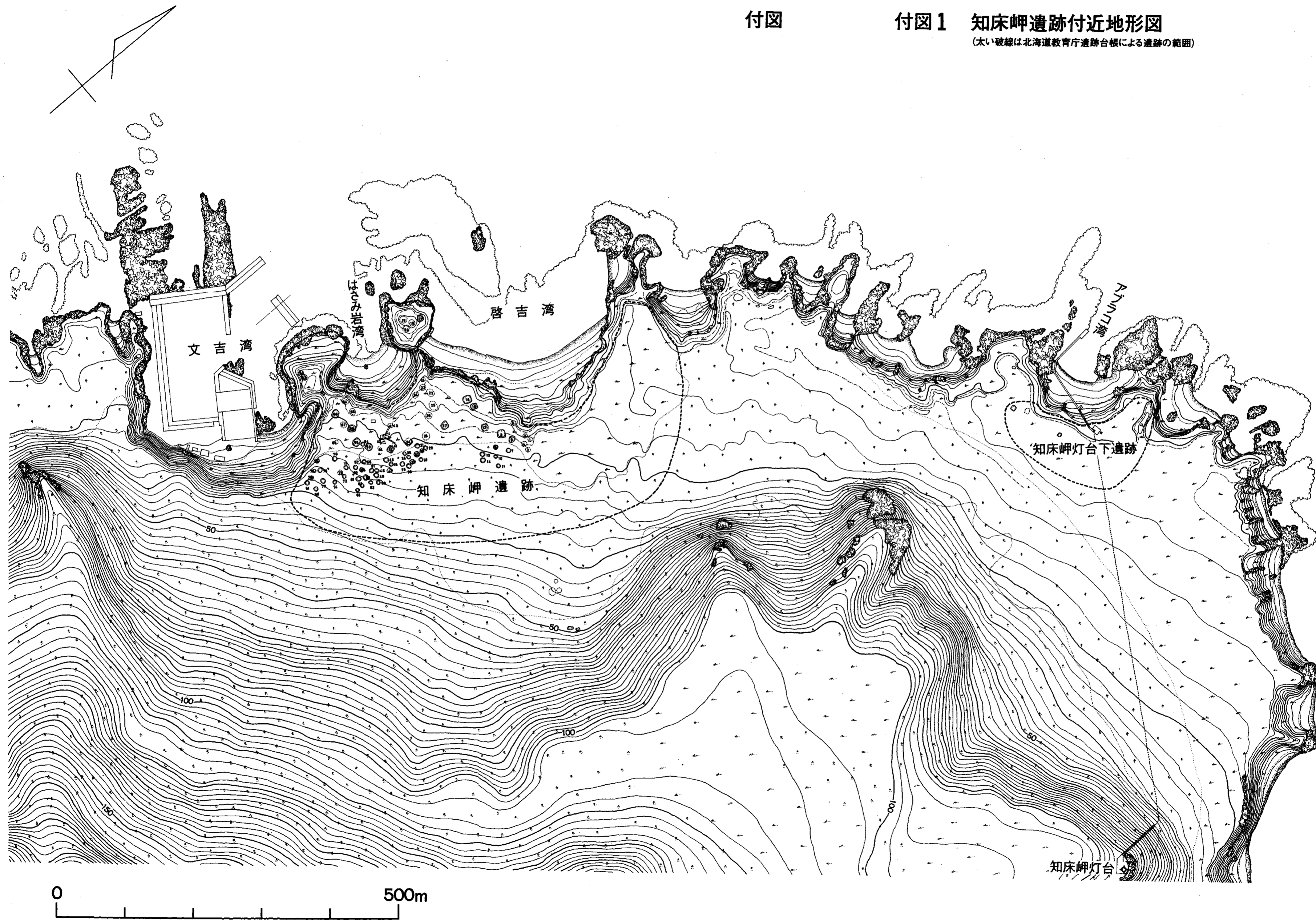
Summary

There are many sites belonging to the Okhotsk Culture in the range of Shari-Town, north-west coast of Shiretoko Peninsula, eastern Hokkaido. In this article, the present writer describes these sites in detail from the materials and data obtained in the excavations in the 1950's through 1960's, directed by H. Kohno, W. Matsushita, T. Ohba and K. Komai respectively, and also the results of our recent survey, the Institute for the Study of North Eurasian Cultures, Faculty of Letters, Hokkaido University. On the basis of these descriptions, the writer discusses the social organizations of the bearers of Okhotsk Culture in the region. The results are as follows. A similar group seen in northern Hokkaido, a 'regional community' in the writer's terminology, with a stationary settlement and several summer-camps, was also seen there in the earlier stage of their distribution, though of a different environment in the region. In the later stage of Okhotsk Culture in eastern Hokkaido, some changes had occurred in the region, probably because of the drift ice completely covering the sea-shore in mid-winter every year (consequently the fishing and the sea-mammal hunting on and off shore were impossible in that season), and also increasing population. A 'regional community' broke up into several more or less independent smaller groups, with only a stationary settlement and no accompanying seasonal-camp. Simultaneously, a 'locae group' as a political organization, including a number of settlements in the areas where several 'regional communities' had been distributed in the former stage, developed there. We can see here a certain effect from the Satsumon people in south-western Hokkaido who were going to widen their distribution northwards and then eastwards. In the following period, acculturation of the bearers of Okhotsk Culture took place under the influences of Satsumon people who immigrated into the region, resulting in the crystalization of Satsumon-Okhotsk Hybrid Culture.

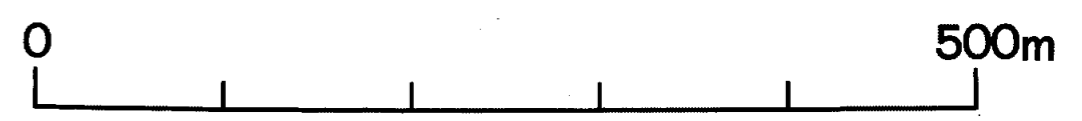
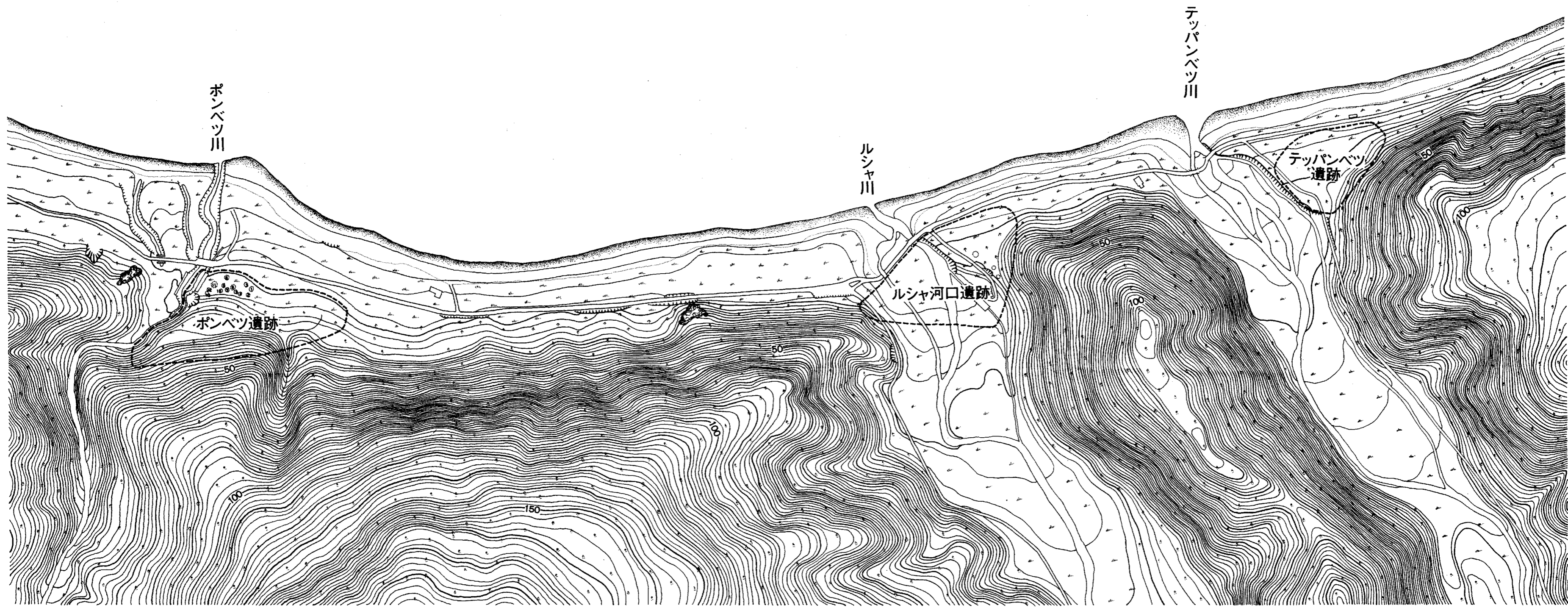
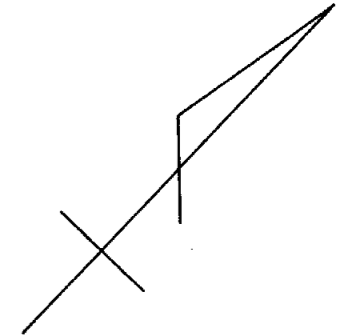
付図

付図1 知床岬遺跡付近地形図

(太い破線は北海道教育庁遺跡台帳による遺跡の範囲)



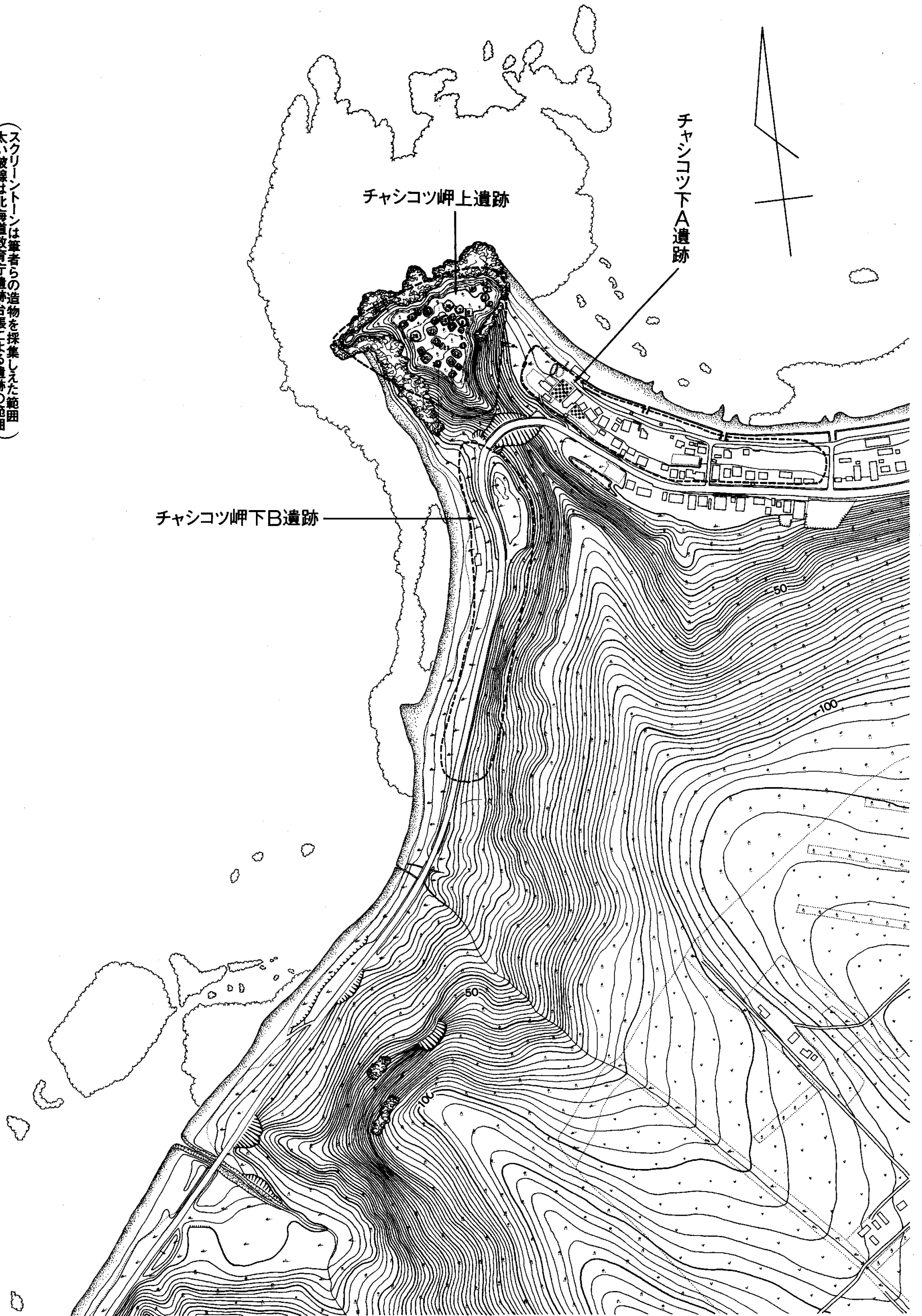
付図2 ポンベツ遺跡付近地形図
(太い破線は北海道教育庁遺跡台帳による遺跡の範囲)



付図3

チャシコツ岬遺跡群付近地形図

(スクリーントーンは筆者らの造物を採集しえた範囲)
(太い破線は北海道教育庁遺跡台帳による遺跡の範囲)



0 500m